

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第698集

うえ  
上のマツカ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

2019

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
(公財)岩手県文化振興事業団

# 上のマツカ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査





1号竪穴建物全景



1号竪穴建物出土製埴土器



## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところであります。

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は洋野町における、三陸沿岸道路建設事業に関連して平成27年度、ならびに平成29年度に発掘調査された上のマッカ遺跡の調査成果をまとめたものであります。平成27年度調査では、縄文時代の竪穴住居跡や食糧貯蔵用の土坑が見つかりました。平成29年度調査では、古代と推定される製塩土器を伴う竪穴製塩工房が見つかりました。これは全国的にも珍しい調査事例となりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、洋野町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 菅野洋樹

## 例 言

- 1 本報告書は、平成27年度・同29年度に行った上のマッカ遺跡（岩手県九戸郡洋野町種市有家第6地割当座屋敷・岩手県九戸郡洋野町種市有家第5地割林山）の発掘調査の成果を取録したものである。
- 2 今回の調査は、三陸沿岸道路建設事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所との協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 遺跡台帳に登録されている遺跡番号は「IF89-0340」である。
- 4 遺跡略号、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者名は以下の通りである。

[平成27年度] 遺跡略号：UM-15  
調査期間：平成27年6月15日～平成27年9月24日  
調査担当者：久保賢治・高橋義介・久保友咲・伊東格  
調査面積と委託者：3,700㎡・国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

[平成29年度] 遺跡略号：UM-17  
調査期間：平成29年6月5日～平成29年6月30日  
調査担当者：福島正和・光井文行・松渡耕己  
調査面積と委託者：300㎡・国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
- 5 室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

[平成27年度] 整理期間と担当者：平成27年12月1日～平成28年3月31日 久保賢治  
[平成29年度] 整理期間と担当者：平成29年12月16日～平成30年3月31日 中村隼人
- 6 調査および整理における委託業務については次の機関に依頼した。

[平成27年度] 基準点測量：有限会社 ダイヤ測量設計  
航空写真撮影：東邦航空株式会社  
炭素年代測定（AMS測定）：株式会社 加速器分析研究所

[平成29年度] 基準点測量：株式会社 スズマ測量設計  
炭素年代測定（AMS測定）：株式会社 加速器分析研究所
- 7 本遺跡の調査成果は、すでに『平成27年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集）および『平成29年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集）において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 8 土色の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993）を使用した。
- 9 本報告書の執筆は福島正和・久保賢治・光井文行・久保友咲・中村隼人が行い、編集は中村・福島が行った。文責は文末括弧内の担当者名による。
- 10 本報告書で使用した地形図は国土地理院発行1：25,000「陸中中野」「陸中大野」「八木」「種市」である。
- 11 野外調査ならびに、整理、報告書作成の際、次の方からご協力、ご指導いただいた。記して深く感謝いたします（敬称略）。君島武史 千田政博
- 12 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 凡 例

### 1 遺構について

#### (1) 本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

竪穴住居平面断面：1/40、土坑平面断面：1/40、焼土平面断面：1/20、炭窯平面断面：1/40

#### (2) 遺構断面の土層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修1993）を基準とする）

粘性（4段階表示：強、やや強、やや弱、弱）

しまり（4段階表示：密、やや密、やや疎、疎）

混入物の有無（混入量は5段階表示：微量1～10%・少量11～20%・中量21～30%・

やや多い31～40%・多量41～50%）

### 2 遺物について

#### (1) 本文中の図版縮尺は以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

縄土石器：1/3 剝片石器：2/3 礫石器：1/3・1/4

#### (2) 遺物図面のアミかけについては下段に示した通りである。

#### (3) 観察表の表記項目について

層位・器種・残存部位・外面文様・内面調整・外面色調・焼成・胎土・混入物・土器型式について観察し、記載している。

文様：口縁部（「口」と表記）、胴部（「胴」と表記）、底部（「底」と表記）に分けて記載している。なお、無文の場合は特に記載していない。

焼成：土器の断面を観察し、断面内の黒色層を基準として土器の焼成具合を4分類した。

良好 →断面に黒色層がみとめられず、断面の色調が橙色を帯びるもの。

やや良好 →断面に明瞭な黒色層は認められないが、土器の内外面色調と比べ、やや暗い（黒色味がかっている）もの。

やや不良 →断面の中央部にのみ黒色層がみとめられるもの。

不良 →断面の半分以上に黒色層が認められ、焼成の際の火回りが悪いもの。

色調：内外面については『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修1993）を基準とした。

（久保賢・中村）

■ 現地性焼土

○ P 土器片

○ S 礫

## 目 次

I	発掘調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	
1	地 勢	1
2	地 質	1
3	基本層序	2
4	歴史的環境	3
III	調査及び整理の方法	
1	平成27年度調査	7
(1)	野 外 調 査	7
(2)	室 内 整 理	7
2	平成29年度調査	8
(1)	野 外 調 査	8
(2)	室 内 整 理	8
3	出土遺物の分類	8
(1)	縄 文 土 器	9
(2)	石 器	10
IV	平成27年度調査	
1	概 要	11
2	検出遺構と出土遺物	13
(1)	竪 穴 住 居	13
(2)	土 坑	25
(3)	焼 土 遺 構	25
(4)	土 器	30
(5)	土 製 品	33
(6)	石 器	33
V	平成29年度調査	
1	概 要	61
2	検出遺構と出土遺物	61
(1)	竪 穴 住 居	61
(2)	土 坑	64
(3)	炭 窯	67
(4)	出 土 遺 構	68
(5)	土 器 製 塩	70

## VI 放射性炭素年代測定

1 測定対象試料	75
2 測定の意義	75
3 化学処理工程	75
4 測定方法	75
5 算出方法	75
6 測定結果	76
7 所見	80

VII 総括	81
報告書抄録	123

## 図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第25図 出土遺物9 (遺構外・縄文土器)	38
第2図 基本層序	3	第26図 出土遺物10 (遺構外・縄文土器)	39
第3図 周辺の遺跡	5	第27図 出土遺物11 (遺構外・縄文土器)	40
第4図 調査区位置図	6	第28図 出土遺物12 (遺構外・縄文土器)	41
第5図 平成27年度調査区遺構配置図	11	第29図 出土遺物13 (遺構外・縄文土器)	42
第6図 平成27年度調査区遺構配置図拡大図	12	第30図 出土遺物14 (遺構外・縄文土器)	43
第7図 1号竪穴住居	14	第31図 出土遺物15 (土製品・石器)	45
第8図 2号竪穴住居	15	第32図 出土遺物16 (石器)	46
第9図 2号・3号竪穴住居	16	第33図 出土遺物17 (石器)	47
第10図 4号竪穴住居	19	第34図 出土遺物18 (石器)	48
第11図 5号竪穴住居	20	第35図 出土遺物19 (石器)	49
第12図 6号竪穴住居	21	第36図 出土遺物20 (石器)	50
第13図 出土遺物1 (竪穴住居内・縄文土器)	22	第37図 出土遺物21 (石器・銭貨)	51
第14図 出土遺物2 (竪穴住居内・縄文土器)	23	第38図 平成29年度調査区遺構配置図	62
第15図 出土遺物3 (竪穴住居内・縄文土器)	24	第39図 1号竪穴建物	63
第16図 1号～7号土坑	26	第40図 25号～29号土坑	66
第17図 8号～16号土坑	27	第41図 1号炭窯	67
第18図 17号～24号土坑	28	第42図 出土遺物22	69
第19図 出土遺物4 (土坑内・縄文土器)	29	第43図 出土遺物23	70
第20図 1号～3号焼土遺構	29	第44図 出土遺物24	71
第21図 出土遺物5 (遺構外・縄文土器)	34	第45図 出土遺物25	72
第22図 出土遺物6 (遺構外・縄文土器)	35	第46図 試料No.1～4 暦年較正年代グラフ	79
第23図 出土遺物7 (遺構外・縄文土器)	36	第47図 試料No.5～8 暦年較正年代グラフ	79
第24図 出土遺物8 (遺構外・縄文土器)	37		

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	4	第6表	平成27年度調査遺物観察表3	60
第2表	遺構名変更表	6	第7表	平成27年度調査遺物観察表4	60
第3表	平成27年度調査土坑一覧表	25	第8表	平成29年度調査遺物観察表	73
第4表	平成27年度調査遺物観察表1	52	第9表	放射性炭素年代測定結果(補正值)	77
第5表	平成27年度調査遺物観察表2	59	第10表	放射性炭素年代測定結果(暦年較正年代)	78

## 写真図版目次

写真図版1	空撮写真	85	写真図版19	出土遺物(縄文土器)	103
写真図版2	1号・3号竪穴住居	86	写真図版20	出土遺物(縄文土器)	104
写真図版3	2号竪穴住居	87	写真図版21	出土遺物(縄文土器)	105
写真図版4	4号竪穴住居	88	写真図版22	出土遺物(縄文土器)	106
写真図版5	5号竪穴住居	89	写真図版23	出土遺物(縄文土器)	107
写真図版6	5号・6号竪穴住居	90	写真図版24	出土遺物(縄文土器)	108
写真図版7	1号竪穴建物	91	写真図版25	出土遺物(縄文土器)	109
写真図版8	1号～4号土坑	92	写真図版26	出土遺物(縄文土器)	110
写真図版9	5号～8号土坑	93	写真図版27	出土遺物(縄文土器)	111
写真図版10	9号～12号土坑	94	写真図版28	出土遺物(縄文土器)	112
写真図版11	13号～16号土坑	95	写真図版29	出土遺物(縄文土器・土製品)	113
写真図版12	17号～20号土坑	96	写真図版30	出土遺物(石器)	114
写真図版13	21号～24号土坑	97	写真図版31	出土遺物(石器)	115
写真図版14	25号～28号土坑	98	写真図版32	出土遺物(石器)	116
写真図版15	28・29号土坑・1号～3号焼土	99	写真図版33	出土遺物(石器)	117
写真図版16	1号炭窯・沢跡	100	写真図版34	出土遺物(石器・銭貨・製塩土器)	118
写真図版17	出土遺物(縄文土器)	101	写真図版35	出土遺物(土師器・縄文土器)	119
写真図版18	出土遺物(縄文土器)	102	写真図版36	出土遺物	120

## I 発掘調査に至る経過

上のマッカ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（待浜～階上）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年5月27日付け国東整陸一調第26号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年6月11日～18日にわたり試掘調査を行い、平成25年7月5日付け教生第598号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成29年4月3日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地 勢

本遺跡が位置する岩手県九戸郡野野町は、岩手県沿岸地域最北の自治体に相当し、青森県との県境域に位置する。北は青森県階上町、南は久慈市、西は九戸郡軽米町や九戸村が所在し、東には太平洋が広がる。野野町は平成18年1月に、九戸郡大野村と同郡種市町が合併し誕生した自治体であるが、本遺跡はこのうちの東半を占める旧種市町城南端部の有家第五地割内に立地する。

現在の野野町は、総面積の八割を山林と原野が占める地勢で、海岸帯と町北東部の中心集落（野野町役場・種市駅）周辺を除けばおおむね山間部ないしは山岳帯となっている。特に町西端にはともに標高700m余りの階上岳と久慈平岳が対峙する。両峰を源とする複数の小河川が山間を縫い、太平洋へと東流する。20km以上に及ぶ海岸は段丘からなり、出入り口の少ない干出岩盤が多い。

本遺跡は海岸線から西に約1.1km、地域圏の主要都市である青森県八戸市と岩手県久慈市間を南北に繋ぐ国道45号線（旧三陸浜街道）から西に140m程度の位置にあたる。遺跡範囲は東西・南北ともに約475m、遺跡の総面積は166,800㎡程度である。このうち平成27年度調査区は遺跡範囲内の南東隅5,300㎡、平成29年度調査区は北東隅の300㎡に該当する。調査区は南北に直線距離で280m程度離れている。遺跡範囲に西接し同地の地名の由来でもある藤原有家を祀る有家神社が座す。

### 2 地 質

遺跡の基盤層は白亜紀の火成岩層と推定され、この基盤岩上に段丘堆積物として砂礫層・砂層・泥層などが堆積し、さらにこの上を火山灰や軽石起源の灰層群と黒色土（クロボク土）が覆う。

九戸火山灰層は種市町内では2～3mの厚さを持つ暗褐色の粘土質火山灰である。詳細な分布や層序、噴出源は未詳である。高館火山灰層は後期更新世の火山砕屑物により構成された層で、十和田火

山起源のものを主体とする。八戸火山灰層は、火山砕屑層と上層の火砕流堆積物によって構成される。現在の研究状況ではこの火山砕屑層は約15,000年前の起源と比定されている。

岩手県北城から青森県東南部にかけての完新世火山砕屑物は下位からいずれも十和田火山起源の南部軽石層、小国軽石層、中振軽石層、十和田b降下火山灰層、十和田a火山灰層が堆積し、この上層に苫小牧火山灰層が堆積する。

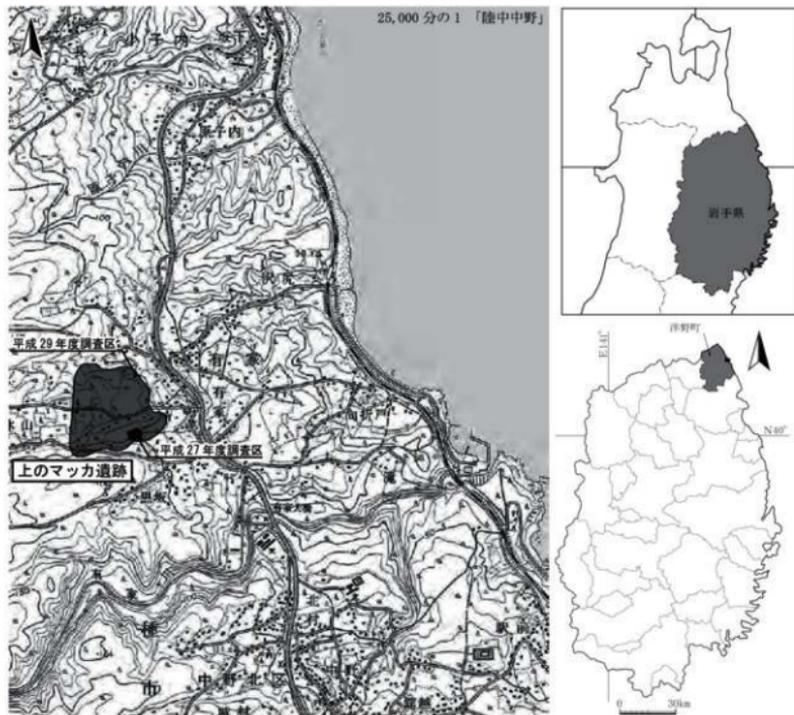
(中村)

### 3 基本層序

基本層序の様相は平成27年度調査区、平成29年度調査区とも同様である。柱状図は平成27年度調査区内の4号竪穴住居付近で確認した(図2)。土層はI~IV層に分類される。

以下、層位ごとに概観する。

第1層：黒褐色シルト(10YR2/2)、粘性はやや弱、しまりは疎で空隙が多い。後年の土地利用の影響を受け、攪乱が多い。摩滅が進んだ土器片を含んでいる。



第1図 遺跡位置図

第Ⅱ層：黒色シルト（10YR2/1）を主体とし、粘性はやや弱、しまりはやや疎である。炭化物粒を微量に含み、土器片も認められる。Ⅰ層同様に攪乱の影響を受けている。場所によってはⅠ層からⅡ層間に分層が不可能であった。

第Ⅲ層：暗褐色シルト（10YR3/3）を主体とし、粘性はやや強、しまりは密である。粒径2mmまでの明黄褐色バミス少量や微量の炭化物粒が含まれる。一部例外を除き、基本的には両調査区とも同層上面を遺構検出面とした。

第Ⅳ層：黄褐色シルト（10YR5/8）を主体とし、粘性はやや強、しまりは密である。2mm程度のバミス少量と風化花崗岩粒を微量に含む。例外を除き、遺構の検出及び遺物の出土が認められなかったため、同層以下を地山とした。層厚は不明である。

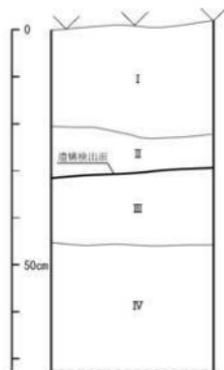
平成27年度調査区中では、緩斜面上方に位置する西半で各層の堆積が薄く、斜面下方に位置する東半で各層の層厚が厚い傾向がみられる。調査区北東部及び南東部の地域ではⅢ層上面で二本の沢跡が確認された。

平成29年度調査区は、後年の地業改変により、調査区内の一部が大きく削平されていた。斜面上方に相当する調査区西半は切土の影響によりⅠ層からⅢ層が削平されており、表土直下がⅣ層という状況であった。

対して東半は切土の影響を受けず、原地形が残されており、他所同様の堆積状況が確認できた。

表土から遺構検出面であるⅢ層上面までの深さは平成27年度調査区で30cm程度、平成29年度調査区で15cm程度である。各層の層厚もまた平成27年度調査区の方が全般に厚い。

（久保賢・中村）



第2図 基本層序

#### 4 歴史的環境

本遺跡が所在する洋野町有家の地名は、新古今和歌集の選者の一人として知られる藤原有家の人名に由来するという。同地にはあらぬ罪に問われ蝦夷への流罪を申し付けられた有家とそれに随行した家臣団が、安住の地として同地周辺（久慈市から階上町）を選び、ここに土着したとする伝承が残されている。遺跡範囲に東接する位置にはこの有家を祀った有家神社が鎮座している。有家はこの同社周辺に御涼庵という庵を編み、余生を過ごしたと伝えられている。

本遺跡は昭和三十六年に岩手大学教授草間俊一氏によって試掘調査が行われており、その成果報告書として、種市町役場1963『種市の歴史（原始～中世）種市町諸遺跡の調査報告』が刊行されている。同書では縄文時代前期から後期までの土器片・石鏃・石匙・石斧・半円状扁平打製石器・獣骨片・骨角器・貝輪などが出土したことが報告されている。また遺跡の盛期が縄文時代前期初頭になる可能性が指摘されたほか、近年の開墾の影響により表採及び表土内で大量の土器片が出土する状況などについても言及がなされている。同書中で草間氏は本遺跡を「前期ははじめの単純遺跡として、相当内容のある遺跡で、県下で重要な遺跡の一つ」と評価し、盛期以外の年代の遺物包含層や貝塚が存在する可能性を示唆している。

本遺跡の周辺に所在する遺跡は第3図及び第1表の通りである。

縄文時代の集落跡として向折戸遺跡（7）、黒坂遺跡（13）、散布地として長坂遺跡（3）、八森遺跡（6）、向長根遺跡（10）、長根塚遺跡（14）、下向遺跡（15）、中野城内遺跡（16）、貝塚として小子内貝塚（4）、黒マッカ貝塚（5）が知られ、縄文時代早期から晩期までの遺跡が万遍なく存在する。大宮Ⅰ遺跡（11）と大宮Ⅱ遺跡（12）はともに縄文時代早期の集落跡・散布地として知られるが、ともに弥生土器も数点出土している。

南八木遺跡（2）では羽口や鉄滓を伴う年代未詳の製鉄炉が検出されている。製鉄に欠かすことのできない砂鉄と薪炭を潤沢に有したことに起因してか、洋野町内では古代から近世までの60カ所以上の製鉄関連遺跡が確認されている。

また図外の遺跡になるが海浜に近い旧種市町内では縄文時代晩期以降の製塩遺跡も多くみられる。同町種市のたけの子遺跡やゴッソー遺跡では縄文時代晩期の製塩土器が出土している。また同じく二十一平遺跡からは、平安時代の製塩土器のほか土製支脚が多く出土するなど、地勢を反映し、積極的な製塩が行われていたようだ。

有家館（8）及び中野館（16）は中世後期の城館遺跡として知られる。室町時代から戦国時代の本遺跡周辺は国人である種市氏の勢力域であったと考えられている。種市氏は16世紀段階になると三戸南部氏の被官となったため、同地は三戸南部氏の所領となり、そのまま盛岡藩の蔵入り地となった。

寛文四年（1664）の八戸藩創設により、洋野町域は八戸藩領となった。現在の洋野町域のうち、本遺跡を含む海側の旧種市町域は八戸廻代官所、山側の旧大野村域は久慈代官所の管轄下に置かれた。近世段階の洋野町内では漁業のほか、雑穀や大豆を中心とする農業を主産業とした。この他に山林部の旧大野村域では林業・製鉄業・製炭業・畜産業、海浜部の旧種市町域では造船業や藩営で製塩業が行われた。藩政期の種市は藩営の塩釜や塩問屋が林立する景観であった。有家台場（9）は異国船警戒を目的に作られた台場で、寛政三年（1791）に幕府の命を受けた八戸藩が造営した。

近代以降の種市は依然漁業を主産業としている。この他に旧種市町内ではしいたけや寒じめホウレンソウ栽培、旧大野村域では畜産に力を入れている。

（中村）

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別	確認された遺構・遺物
1	上のマッカ	縄文	集落跡	縄文土器（前～後期）、石斧、剥片
2	南八木	不明	製鉄関連	羽口、鉄滓
3	長坂	縄文	散布地	縄文土器（後・晩期）
4	小子内貝塚	縄文	貝塚	染附磁器、鉄片、ミルクイ、インダタミ
5	黒マッカ貝塚	縄文・古代	貝塚	縄文土器（後期）、石器、土師器
6	八森	縄文	散布地	縄文土器
7	向折戸	縄文	集落跡	縄文土器（晩期）、石斧
8	有家館	中世	城館跡	単郭、廻跡（破壊）
9	有家台場	近世	砲台場跡	土塁
10	向長根	縄文	散布地	縄文土器
11	大宮Ⅰ	縄文・弥生	集落跡	縄文（早・前・晩期）、石鏢、弥生土器
12	大宮Ⅱ	縄文・弥生	散布地	縄文土器（早期）、弥生土器
13	黒坂	縄文	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器（中期）
14	長根塚	縄文	散布地	土器
15	下向	縄文	散布地	陥し穴
16	中野館（館桜・蝦夷館）	中世	城館跡	単郭、廻跡（破壊）
17	中野城内	縄文	散布地	陥し穴
18	蝦夷塚	縄文	集落跡	縄文土器



25000分の1 「種市」「八木」「陸中大野」「陸中中野」

第3図 周辺の遺跡



第4図 調査区位置図

第2表 遺構名変更表

調査年度	旧遺構名	遺構名
平成27年度	SI04	1号竪穴住居
平成27年度	SI05	2号竪穴住居
平成27年度	SI03	3号竪穴住居
平成27年度	SI01	4号竪穴住居
平成27年度	SI06	5号竪穴住居
平成27年度	SI02	6号竪穴住居
平成27年度	SK01	1号土坑
平成27年度	SK24	2号土坑
平成27年度	SK21	3号土坑
平成27年度	SK22	4号土坑
平成27年度	SK23	5号土坑
平成27年度	SK16	6号土坑
平成27年度	SK14	7号土坑
平成27年度	SK10	8号土坑
平成27年度	SK15	9号土坑
平成27年度	SK02	10号土坑
平成27年度	SK09	11号土坑
平成27年度	SK04	12号土坑
平成27年度	SK03	13号土坑
平成27年度	SK13	14号土坑
平成27年度	SK11	15号土坑
平成27年度	SK07	16号土坑
平成27年度	SK05	17号土坑
平成27年度	SK12	18号土坑
平成27年度	SK08	19号土坑
平成27年度	SK06	20号土坑
平成27年度	SK20	21号土坑
平成27年度	SK18	22号土坑
平成27年度	SK19	23号土坑
平成27年度	SK17	24号土坑
平成27年度	1号焼土	1号焼土
平成27年度	2号焼土	2号焼土
平成27年度	3号焼土	3号焼土
平成29年度	SI01	7号竪穴住居
平成29年度	SK01	25号土坑
平成29年度	SK02	26号土坑
平成29年度	SK03	27号土坑
平成29年度	SK04	28号土坑
平成29年度	SK05	29号土坑
平成29年度	SX01	1号炭窯

### Ⅲ 調査及び整理の方法

#### 1 平成27年度調査

##### (1) 野 外 調 査

本調査に先立ち、平成26年に岩手県教育委員会生涯学習文化課により試掘調査が実施され、委託者との協議を経て調査区が設定されている。

調査は平成27年6月15日より調査を開始した。調査面積は3,700㎡である。調査員3名、野外作業員26名体制で行った。

調査区にはグリッドを設定した。グリッドは平面直角座標第X系（世界測地系）に合わせており、まず一辺100×100mの大区画（IA）を設定後（第4図参照）、4×4mの小区画に細分した。北から南にアルファベット小文字a～y、西から東にアラビア数字1～25に分割している。各グリッドの名称については、例えば「IA1aグリッド」のように呼称することとした。

本調査は表土除去から始めている。重機（バックホウ0.45㎡、キャリアダンプ6t）を用い、その後、人力による遺構検出作業を行った。検出した遺構は規模や性格により、適宜に4分法と2分法を選択し精査を進めた。各遺構については平面と断面、また必要に応じ遺物出土状況の実測および、写真撮影を行った。実測方法については、株式会社CUBICの「遺構実測支援システム（遺構くん）」を用いてトータルステーションによる測量を行い作成した。

写真撮影は主にデジタルカメラ1台（キャノンEOS5D）と35mm一眼レフカメラ（モノクローム）を使用し、同アングルのデジタル写真・銀塩写真の両方で撮影している。

普及活動の一環として9月2日に現地公開を実施した。地元住民を中心に約80人の見学があった。

平成27年9月16日に本調査を行った3700㎡についての終了確認を受け、平成27年9月18日に現場から資材等を撤収し、調査終了とした。

##### (2) 室 内 整 理

平成27年12月1日から平成28年3月31日の期間に室内整理作業調査員1名、室内作業員3名体制で行った。

遺物は水洗から始め、以降の工程（仕分け・注記、接合復元、実測、トレース、図版作成）を作業員が分担した。調査員は遺物の分類、原稿の執筆、遺物観察表の作成、実測図や図版のチェックを行った。出土した炭化物4点について炭素年代測定（AMS法）を行い、その分析結果については附編にまとめて掲載した。本文中においても該当する遺構で触れている（加速器分析研究所）。遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が行った。撮影にはデジタルカメラ（EOS5D）を用いた。

遺構図面の整理は、野外調査時に作成した平面図・断面図から、調査員の指示のもと、第2原因の作成と遺構図版作成を行った。遺構・遺物図版作成には株式会社CUBICの「遺構実測支援システム（遺構くん・トレースくん）」、Adobe社「IllustratorCS5」を使用し、デジタルにて図版を作成した。

なお本報告書作成にあたり、各遺構名を野外調査時から変更し、第2表の通り改めた。

（久保賢）

## 2 平成29年度調査

### (1) 野 外 調 査

平成29年6月5日より調査を開始した。調査面積は300㎡である。調査員3名、野外作業員12名体制で行った。調査区近隣に事務所等の設置を行うことが叶わなかったため、同年に本事業団が発掘調査を行った南八木遺跡の元事務所用地内に、本遺跡事務所等を設置し、同所より調査地に赴いた。

調査区にはグリッドを設定した。グリッドは平面直角座標第X系（世界測地系）に合わせ、5×5mの方形区画を設定した。北西隅を起点として北から南へ向けてアラビア数字1から付与し、西から東へ向けてアルファベット小文字aから順次付与している。このため北西隅を「1a」グリッドと呼称することになる。

本調査は重機を用いた表土除去から進め、その後人力による遺構検出を行った。検出した遺構は規模や性格により、適宜に4分法と2分法を選択し調査した。

各遺構については平面と断面実測および、写真撮影を行った。実測方法については、株式会社CUBICの「遺構実測支援システム(遺構くん)」を用いてトータルステーションによる測量を行い作成した。写真撮影は主にデジタルカメラ1台(キャノン EOS6D)と中版カメラ(6×7)を使用した。

平成29年6月29日に本調査を行った300㎡について事業者・県教委・埋文センター三者立会のもと終了確認がおこなわれ、同年6月29日現場から資材等を撤収し、調査を終了した。

### (2) 室 内 整 理

平成29年12月15日から平成30年3月31日の期間に室内整理作業調査員1名、室内作業員2名体制で行った。

遺物は水洗から始め、以降の工程（仕分け・注記、接合復元、実測、トレース、図版作成）を作業員が分担した。調査員は遺物分類、原稿執筆、遺物観察表作成、実測図及び各種図版の確認を行った。

出土した炭化物4点について炭素年代測定（AMS法）を行い、その分析結果については附編にまとめて掲載した。本文中で触れている（加速器分析研究所）。

遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が行った。撮影にはデジタルカメラ（EOS6D）を用いている。

遺構図面の整理は、野外調査時に作成した平面図・断面図から、調査員の指示のもと、第2原因の作成と遺構図版作成を行った。遺構・遺物図版の作成には株式会社CUBICの「遺構実測支援システム(遺構くん・トレースくん)」、Adobe社[「IllustratorCS6」]を使用し、デジタルデータにて図版作成を行った。

なお本報告書作成にあたり、各遺構名を野外調査時から変更し、第2表の通り改めた。

(中村)

## 3 出土遺物の分類

二か年の調査で合わせて、大コンテナ（40ℓ相当）14箱分の土器と、中コンテナ（28ℓ相当）11箱分の石器が出土した。主な遺物である縄文土器と石器については以下のような基準を設け細分した。

## (1) 縄文土器

縄文土器は、早期から後期まで出土している。図版には年度別に、遺構内出土遺物、遺構外出土遺物の順に掲載した。遺構外出土遺物は、各グリッド（5m四方）・出土層位（I層、II層、III層）順に並べて図版を作成した。縄文土器には大木系土器と円筒式系土器がみられるが、ここでは、両系統を時代ごとにまとめて取り扱った。分類としては、縄文時代早期をI群、縄文時代前期をII群、縄文中期をIII群、縄文時代後期をIV群とした、土器の分類にあたっては、「縄文土器大観」や三陸沿岸地域で発掘調査した報告書を参考にした。各群に大別した後、それぞれの文様の特徴などから細別した。

## I群（縄文時代早期）

いわゆる貝殻沈線文が施されているもの。

## II群（縄文時代前期）

- 1類 半竹管で押し引き沈線文が施されているもの。
- 2類 横位還付末端回転文（ループ文）が施されているもの。
- 3類 横位羽状縄文（結束、非結束）が施されているもの。
- 4類 多段結節回転文が施されているもの。
- 5類 組紐回転文が施されているもの。
- 6類 S字状連鎖沈文が施されているもの。
- 7類 織維を含み網目状燃糸文（単軸絡条体第5類）が施されているもの。
- 8類 附加条回転文（附加条第2種）が施されているもの。

## III群（縄文時代中期）

- 1類 縄文原体圧痕文が伴うかまぼこ形の貼付隆帯と馬蹄形状の縄文原体圧痕文があるもの。
- 2類 貼付の隆線（鋸歯状、曲線）が施されているもの。
- 3類 口縁部無文帯があり、刺突列が巡るもの。
- 4類 沈線で囲って楕円文や逆U字文が施されているもの。

## IV群（縄文時代後期）

- 1類 粗野な渦巻き沈線文が施されているもの。
- 2類 磨り消し縄文が施されているもの。
- 3類 微隆起文で（曲線、平行、三角状）が施されているもの。
- 4類 縦位に平行状細沈線が施されているもの。
- 5類 口縁部に水平方向の縄文原体圧痕文が施されているもの。
- 6類 縦位の結節回転文が施されているもの。
- 7類 織維を含まず、全体に網目状燃糸文（単軸絡条体第5類）が施されているもの。
- 8類 平行燃糸文（短軸絡条体第1種）が施文されているもの。
- 9類 単節縄文のみ、あるいは文様が施されていない無文のもの。

（光井）

(2) 石 器

出土した器種の内訳は石鏃、尖頭器、石匙、不定形石器、磨製石斧、敲磨器類である。

- 石鏃 扁平で、二次加工により鋭角な先端部が作り出され、長さが5 cm以下のもの。  
出土した石鏃は基部の形態と茎部の有無によって分類した。その他に未製品がある。
- 尖頭器 両側縁からの二次加工により鋭利な先端部が作り出されているもの。
- 石錐 二次加工により錐状の端部が作り出されているもの。
- 石匙 突出した摘まみ部があり、二次加工によって幅広の刃部が作り出されているもの。  
1類 刃部が縦方向に付くもの。  
2類 刃部が横方向に付くもの。  
3類 刃部が斜方向に付くもの
- 不定形石器 定形化した形状をもたず、扁平で縁辺部半分以上に刃部作出と考えられる二次加工を施しているものを一括した。刃部角度や刃部の形状から3分類した。  
1類 刃部角度が60°以下のもの……削器  
2類 刃部角度が60°以上のもの……搔器  
3類 刃部作出の二次加工が粗いもの、または不連続のもの。
- 礫器 礫または大型の剥離を素材に、周辺に大きな剥離を連続的に加え、刃部としたもの。
- 磨製石斧 平面形が撥形、長方形を呈し、剥離や敲打によって整形された後、研磨を施して仕上げられた石。
- 敲磨器類 磨痕、擦痕、敲打痕、凹痕が確認できた礫石器。
- 磨石、擦石、凹石、敲石を一括した。使用痕の種類で3分類した。  
1類 正裏面ないし側面に磨痕のみが確認されるもの。磨面が複数のもも含む。  
2類 正裏面ないし側面に凹痕のみが確認されるもの。凹痕が複数のもも含む。  
3類 端部や側面に敲打痕のみが確認されるもの。敲打痕が複数のもも含む。

(久保・中村)

## IV 平成27年度調査

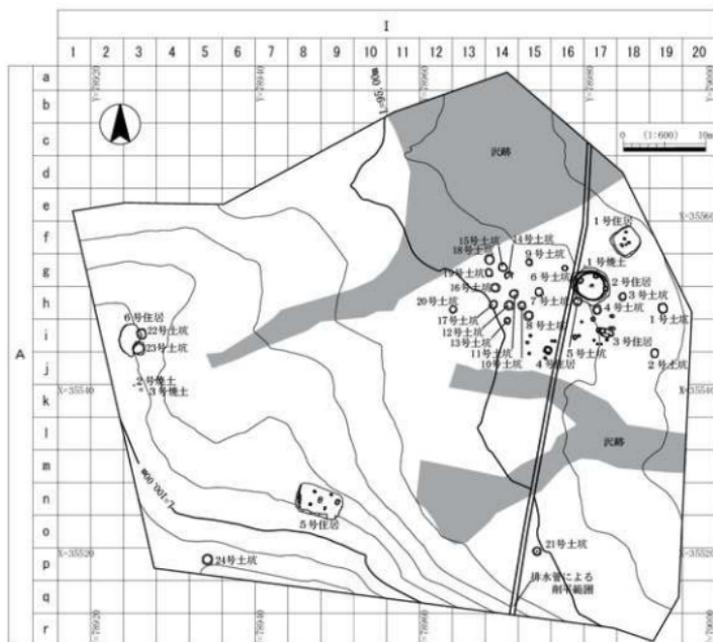
### 1 概 要

調査区は南北に約60m、東西に約70mの不整な長方形をなしており、調査区北側と東側の一部には概ね西から東へ走る沢跡が2本ある。検出状況から沢は縄文遺構群よりも若干古い時代に流れていたものと考えられるが定かでは無い。しかしながら遺構群はその沢跡に挟まれた微高地に分布しているように見えるため、水はけの良い位置に集落を形成していたと考えられる。

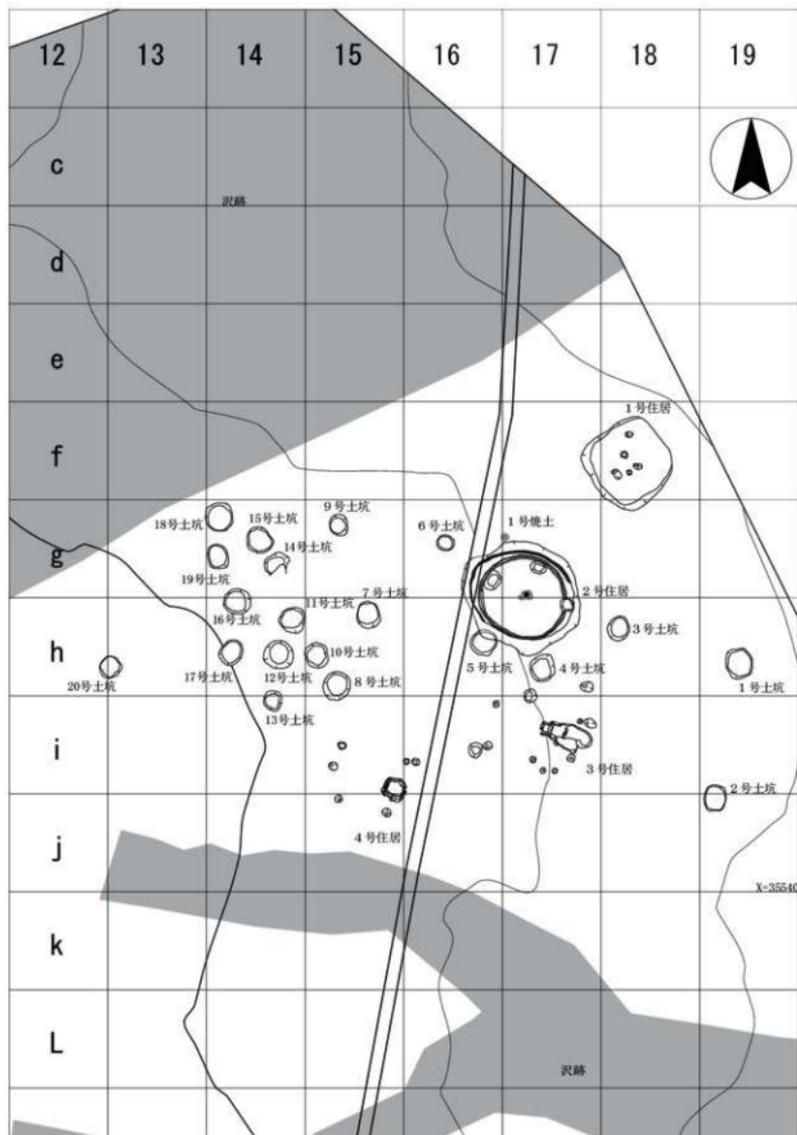
調査区は調査の直前まで畑地と利用されていたことと、それ以前に植林による地形改変を受けている。土層の攪乱が激しく遺構・遺物ともに残存状態は不良であった。

今回の調査では縄文時代の竪穴住居6棟と土坑24基、焼土遺構3基を検出した。竪穴住居については6棟のうち2棟は耕作に伴う攪乱と削平の影響を受け、石囲炉と柱穴のみの確認にとどまった。遺構に共存する遺物は縄文時代中期の円筒上層式土器であるが、遺構外からは早期から後期までの土器片が出土している。

(久保賢)



第5図 平成27年度調査区遺構配置図



第6図 平成27年度調査区遺構配置図拡大図

## 2 検出遺構と出土遺物

### (1) 竪穴住居

#### 1号竪穴住居（第7図、写真図版2）

〔位置・検出状況〕調査区北西側、I A18fグリッドに位置する。Ⅲ層上面において検出した。

〔他の遺構との重複〕なし。

〔平面形〕不整な方形を呈する。

〔規模〕長軸330cm、短軸320cm、深さ31cm

〔埋土〕8層からなる。黒褐色シルトが主体であり、断面中央部の1層、2層は二次堆積である火山灰層（To-Cuと考えられるが科学分析は行っていない。）である。北東側は現代の削平により埋土上部から住居壁、床面が失われている。埋土の状況から自然堆積であると推測する。

〔床面・壁〕床面はほぼ平坦であるが、わずかに北東側へ傾斜している。壁は削平を受けた北東側を除いて緩やかに立ち上がる。

〔付属遺構〕柱穴を5個検出した。いずれも支柱穴であると考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から縄文土器と石器が出土している。縄文土器片は28～32の5点を掲載した。28は組紐縄文を地文に持つ深鉢である。口縁部の文様帯や無文帯は認められず口縁部から体部下半まで地文が展開する。30は口縁部に縄文原体圧痕が認められる。32は胎土に多くの繊維を含む深鉢である。地文は非結束の羽状縄文が器表面全体に展開する。30・31は縄文時代後期の土器であり、その他は縄文時代前期前葉の土器である。石器は遺構周辺出土の280・298を含め、292・293・325の5点を掲載した。280は石鎌、292・293・298は石匙であり、325は床面直上出土の磨石器である。

〔時期〕出土遺物と埋土（火山灰層）の様相から縄文時代前期に属する竪穴住居であると考えられる。

#### 2号竪穴住居（第8～9図、写真図版3）

〔位置・検出状況〕調査区北西側、I A17g、I A17hグリッドに位置する。1号住居の南西側に位置し、Ⅲ層上面で検出した。本遺構の西側は現代の構造物（排水管）によって破壊されている。

〔他の遺構との重複〕5号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

〔平面形〕円形を呈する。

〔規模〕長軸510cm、短軸416cm、深さ36cmである。

〔埋土〕4層からなる。黒褐色シルトが主体であり、炭化物と明黄褐色バミスを微量に含む。検出面から床面までの深さがあるため、削平や耕作土の攪拌から免れており、残存状態が良い。

〔床面・壁〕炉の検出された面を床面とした。床面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。東壁の一部は垂直気味に立ち上がる。

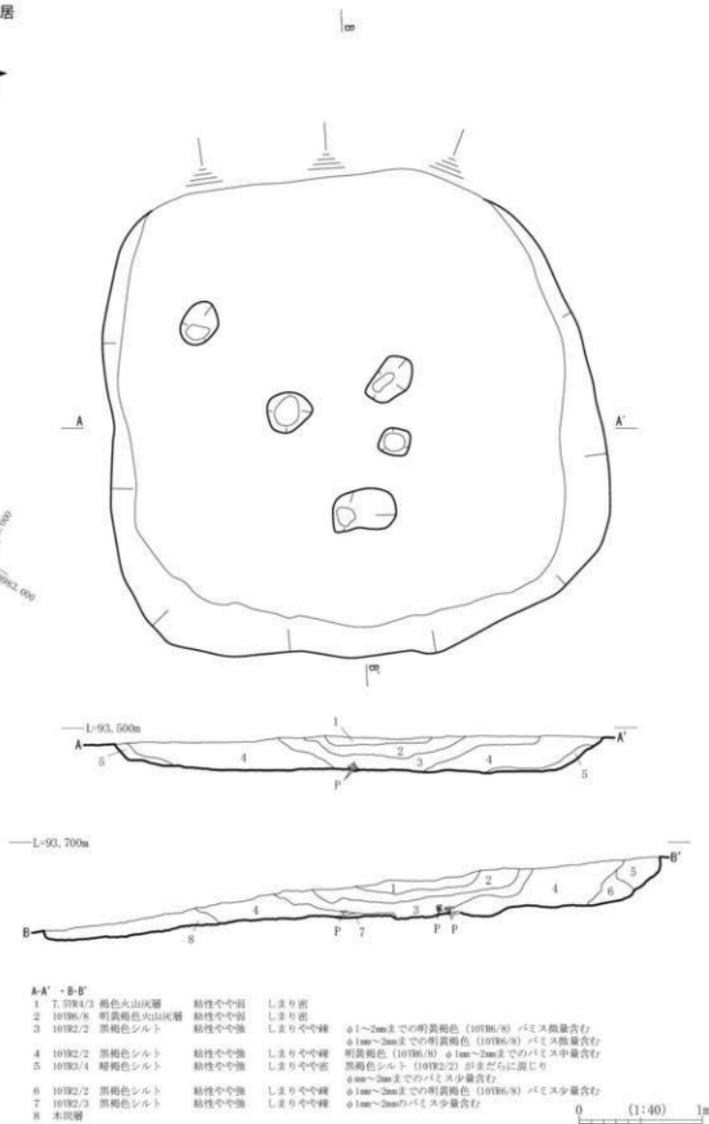
〔炉〕住居中央部から埋設土器を伴う炉1基を検出した。焼土範囲は長軸54cm、短軸30cmの歪な楕円形を呈する。焼土は炉の使用面から4cm下まで達する。石囲等は確認されなかった。埋設土器の埋土下位には炭化物が多量に含まれていた。この炭化物については炭素年代測定（AMS法）を実施している。

〔付属遺構〕床下土坑が3基と2本の壁溝を検出した。柱穴は検出されなかった。

〔出土遺物〕埋土中から縄文土器が出土した。縄文土器4点を掲載した。16～19は縄文時代中期～後期に属するものと考えられる。

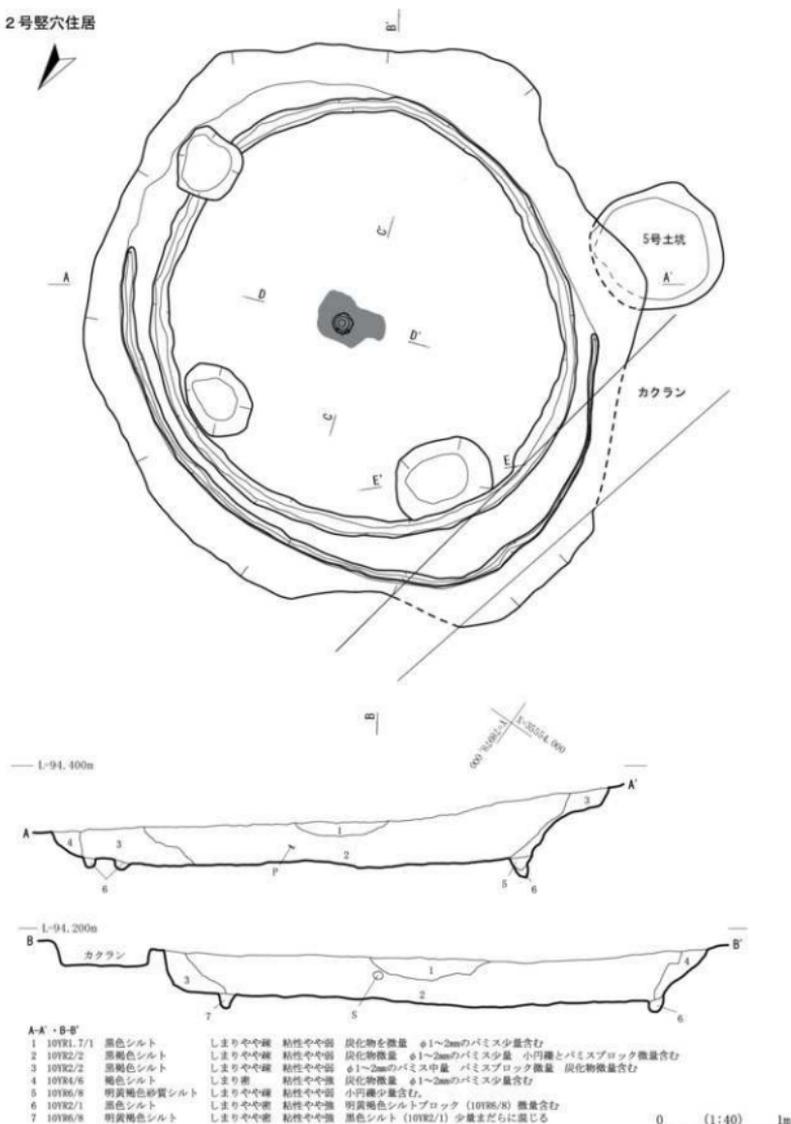
〔時期〕埋設土器から縄文時代中期と判断した。なお、埋設土器の埋土下位から出土した炭化物につ

## 1号竪穴住居



第7図 1号竪穴住居

2号竪穴住居



第8図 2号竪穴住居

2 検出遺構と出土遺物

2号竪穴住居伊2 C-C'

L-93.700m



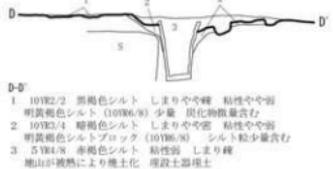
2号竪穴住居床下土坑2 E-E'

L-93.800m



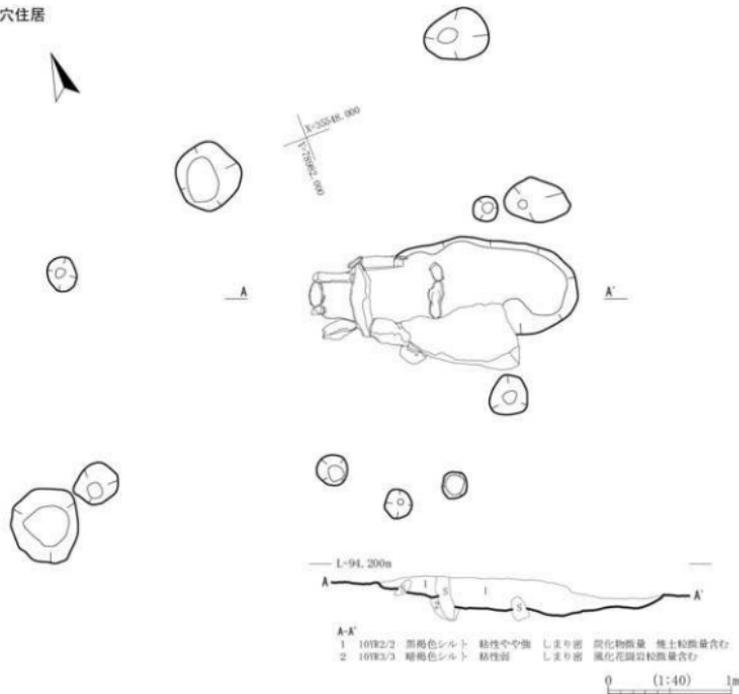
2号竪穴住居埋設土器 D-D'

L-93.700m



0 (1:20) 1m

3号竪穴住居



第9図 2号・3号竪穴住居

いて炭素年代測定（AMS法）を行い、「5283calBP - 5161calBP」という結果を得ており（附編・1）、縄文時代中期の範疇に帰属する。

### 3号竪穴住居（第9図、写真図版2）

〔位置・検出状況〕 調査区北東側、I A17グリッドに位置する。Ⅲ層上面において検出した。

〔他の遺構との重複〕 2号住居、4号住居、4号土坑と重複する可能性があるが、遺構全体の規模が不明であるため確認できない。

〔平面形〕 全体形は不明である。

〔規模〕 5～7m程度の規模であると思われるが、不明である。

〔埋土〕 耕作土として攪拌・削平を受けており、炉内の埋土のみ確認した。1層からなり、黒褐色シルトを主体とする。

〔床面・壁〕 床面はそのほとんどが攪拌や削平により失われているが、ほぼ平坦であると考えられる。壁は完全に失われており不明である。

〔炉〕 複式炉である。石囲部2個と前庭部で構成され、長軸215cm、短軸95cmを測る。石材は周辺から容易に得られる花崗岩を用いている。また、前庭部南側にみられる巨石は原位置を保つ自然石で、この石を利用して複式炉となるよう周辺に石を配した造りとなっている。

〔付属遺構〕 床面からは柱穴11個が検出されたが、主柱穴は不明である。

〔出土遺物〕 遺構検出面で縄文土器と石器が出土している。縄文土器片は8点掲載した。いずれも縄文時代前期のものである。石器は294・319・326・327の4点を掲載した。294は石匙、319は磨製石斧、326・327はそれぞれ敲磨器である。

〔時期〕 炉の形態的特徴から縄文時代中期の竪穴住居である可能性が高い。

### 4号竪穴住居（第10図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕 調査区東側、I A15iグリッドに位置する。Ⅲ層上面において検出したが、畑地として利用されていたため土壌の攪拌を受けている。

〔他の遺構との重複〕 なし

〔平面形〕 不明

〔規模〕 不明

〔埋土〕 3層からなる。暗褐色シルトを主体とするが、攪拌を受けており不明瞭である。

〔炉〕 石囲炉である。長軸96cm、短軸95cmを測る。石材は主に花崗岩を用いており、風化が激しい。使用面は薄らと赤色化した焼土がみられるが、使用面下には焼土が形成されておらず、被熱量は少ないものと考えられる。

〔付属遺構〕 柱穴が6個検出された。Pit 1～5は主柱穴と推測されるが、Pit 6の位置と住居東側が削平のため失われているため定かではない。

〔出土遺物〕 埋土から縄文土器と石器が出土している。縄文土器片は15点掲載した。大半の出土土器は縄文時代前期前葉であるが、縄文時代中期や後期の土器も混入している。1は大木2b式に相当する土器で口縁部文様帯にS字状連鎖沈文がみられ、体部には組紐縄文の地文が展開する。縄文時代前期初頭～前期前葉に属するものと考えられる。石器は295の1点を掲載した。295は石匙である。

〔時期〕 縄文時代前期前葉の土器が一定量出土しているが、石囲炉の特徴を勘案すると前期の竪穴住居ではない可能性が高い。出土土器のうち縄文時代後期のものがこの竪穴住居に伴う遺物であると考えられる。

## 5号竪穴住居（第11図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕 調査区南側、IA8n、IA9nグリッド内に位置する。Ⅲ層上面で検出した。

〔他の遺構との重複〕 なし

〔平面形〕 隅丸長方形を呈する。

〔規模〕 長軸555cm、短軸315cm、深さ46cm

〔埋土〕 3層からなる。黒色シルトを主体とし、炭化物とバミスを少量含む。傾斜に沿って南から北への堆積がみられる。

〔床面・壁〕 床面は柱穴と炉を検出した面とした。ほぼ平坦であるが、北側は壁とともに流失している。壁は床面とから緩やかに広がりながら立ち上がる。

〔炉〕 地床炉埋設土器の周りに、淡い橙色になった土が微量に確認できたが、埋土を剥す段階ですぐに消失してしまったため炉ではないと判断した。

〔付属遺構〕 柱穴は11個確認された。床下土坑は本遺構の東側に位置し長軸67cm、短軸45cm、深さ20cm、埋土は暗褐色シルトが主体で剥片石器が多く含まれていた。壁溝は西側の壁際のみ確認できた。埋設土器は本遺構中央に位置する。

〔出土遺物〕 埋設土器のほかに、埋土中から縄文土器と石器が出土している。縄文土器は41～44の4点を掲載した。41は略完形の深鉢である。山形に突出する口縁部を持ち、体部は地文のみである。42は口縁部片である。口縁部は緩やかに外反し、端部には連続する刻みが認められる。43は口縁部片であり、地文のみが展開する。44は口縁部から体部中位の残存する深鉢である。横方向1条の隆帯により口縁部と体部が区分できる。口縁部は原体の圧痕がある隆帯によって加飾されており、これらの特徴から円筒上層b式と考えられる。これら出土土器を概観すると、縄文時代前期に属する42が認められるが、それ以外は縄文時代中期の土器群である。石器は281・317・328・329・335の5点を掲載した。281は石鏃、317は不定形の剥片、328・329・335はいずれも敲磨器である。

〔時期〕 遺構の特徴から詳細な時期を特定するのは困難であるが、出土した埋設土器の年代から縄文時代中期前葉の竪穴住居であると考えられる。

## 6号竪穴住居（第12図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕 調査区北東側、IA2iグリッドに位置する。Ⅲ層上面において検出した。

〔他の遺構との重複〕 なし

〔平面形〕 不明

〔規模〕 不明

〔埋土〕 西側で単層の埋土を確認した。埋土はにぶい黄褐色シルトであり、地山ロームブロックをわずかに含む。

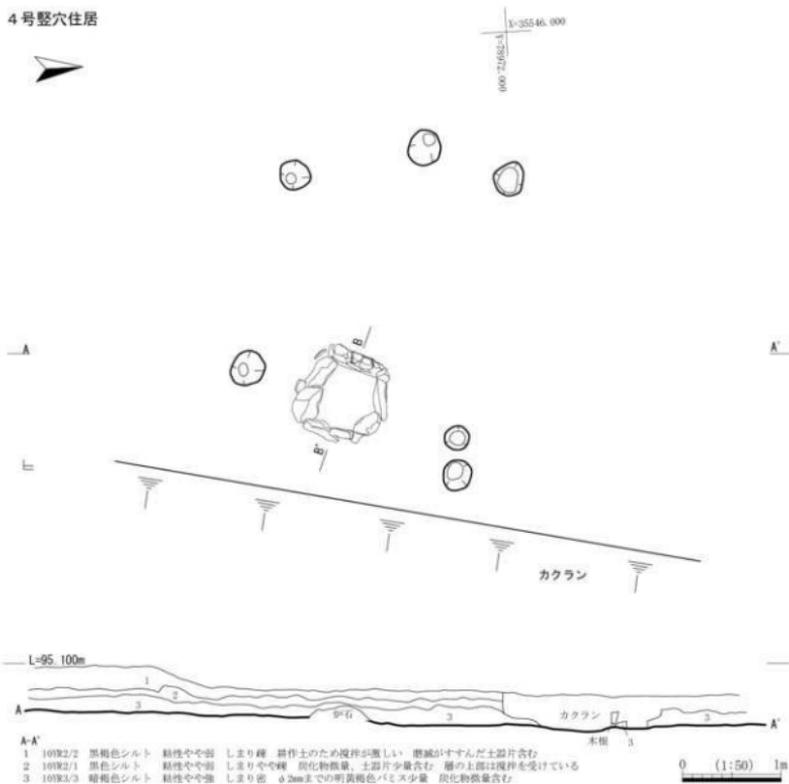
〔床面・壁〕 床面はそのほとんどが攪乱や削平により失われているが、ほぼ平坦であると考えられる。壁は西辺に連続する立ち上がりを確認した。壁の立ち上がりは比較的急角度に立ち上がる。

〔炉〕 検出した床面で2箇所の焼土を確認し、それぞれ炉1、炉2と呼称して調査を進めた。いずれも石などを伴わない地床炉である。

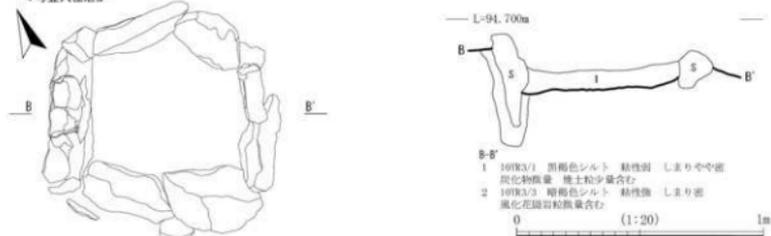
〔付属遺構〕 床面では柱穴は確認されなかった。

〔出土遺物〕 埋土中から縄文土器と石器が出土している。縄文土器は8点掲載した。39は口縁部から体部下半にかけて残存し、横方向2条の平行する隆帯で口縁部と体部が区分される。口縁部文様帯は縄文原体の圧痕が施された隆帯で加飾されている。体部には横位の結節回転文が施されている。40はほぼ完形の深鉢であり、埋設された土器である。横方向2条の平行する隆帯で口縁部と体部が区分さ

## 4号竪穴住居

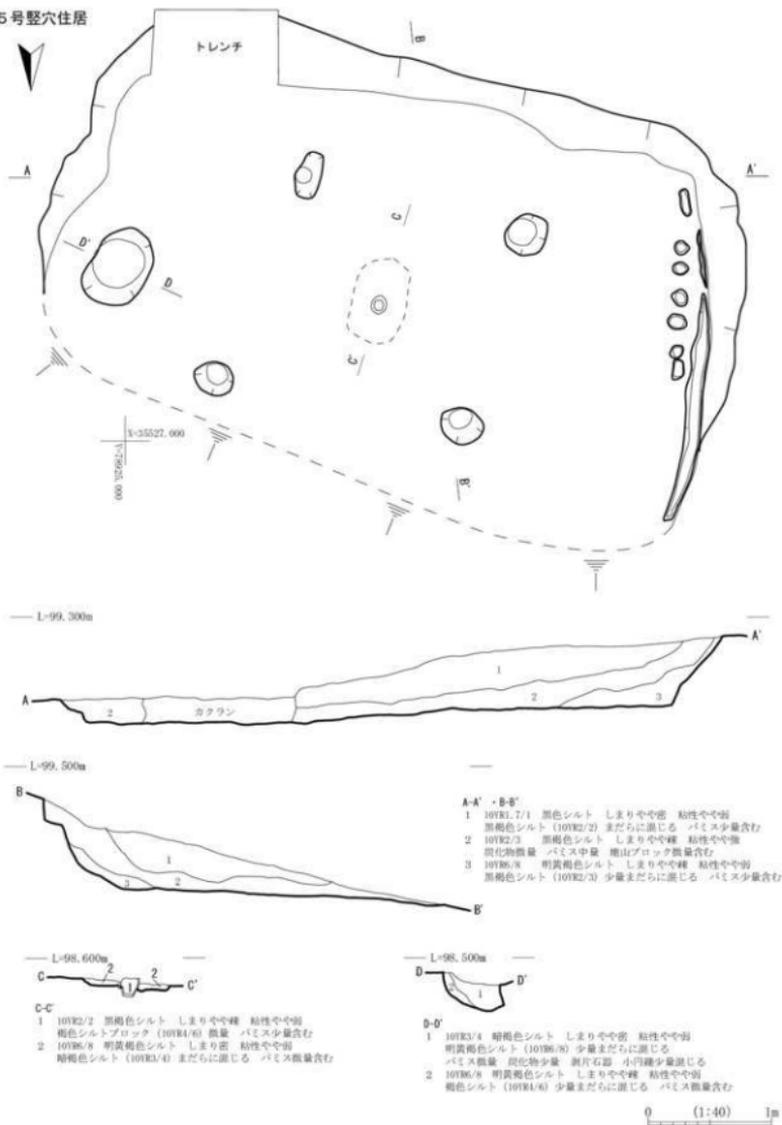


## 4号竪穴住居炉



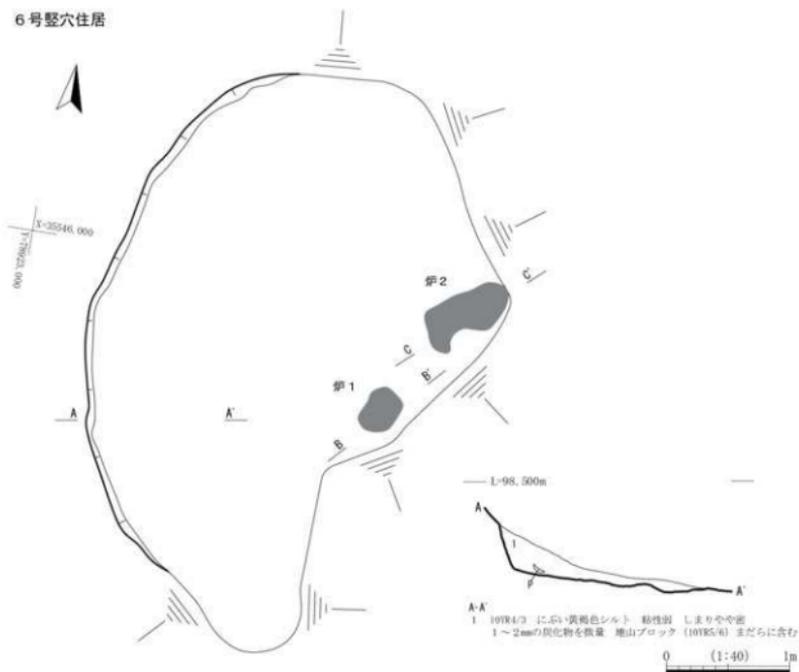
第10図 4号竪穴住居

5号竪穴住居

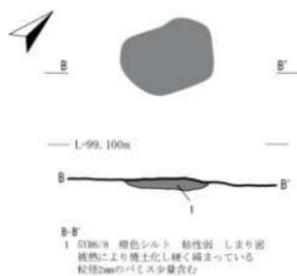


第11図 5号竪穴住居

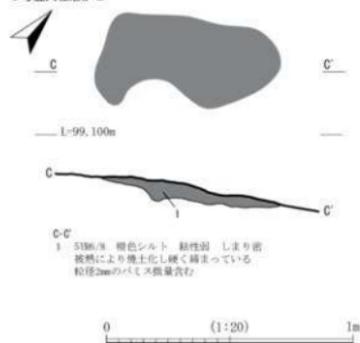
## 6号竪穴住居



## 6号竪穴住居 竪穴1



## 6号竪穴住居 竪穴2

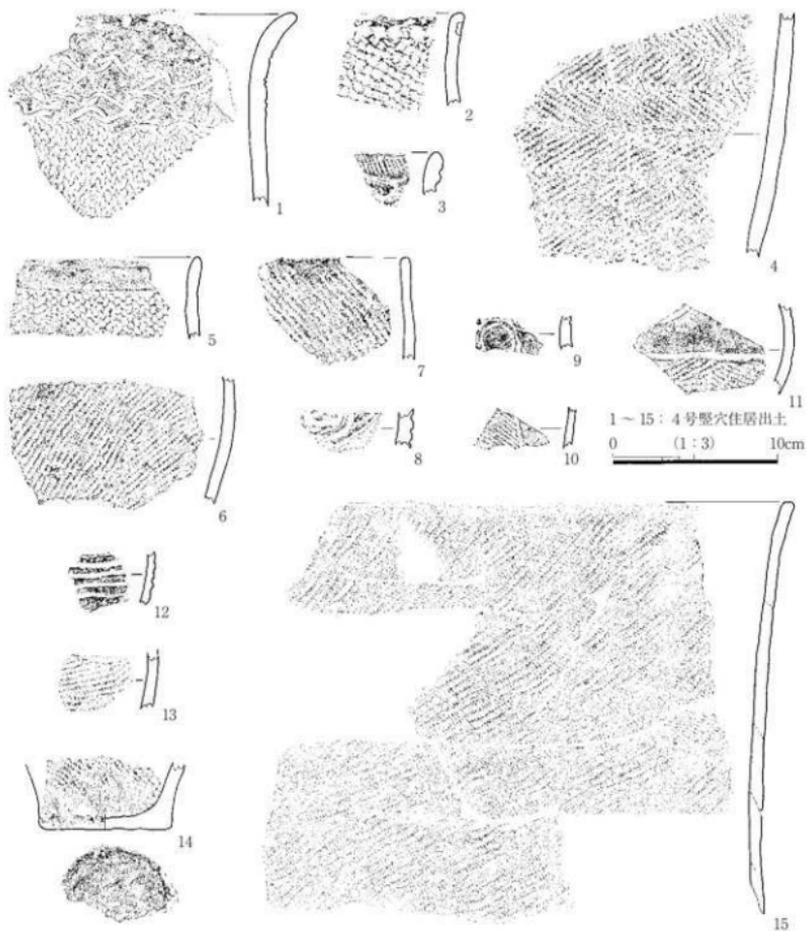


第12図 6号竪穴住居

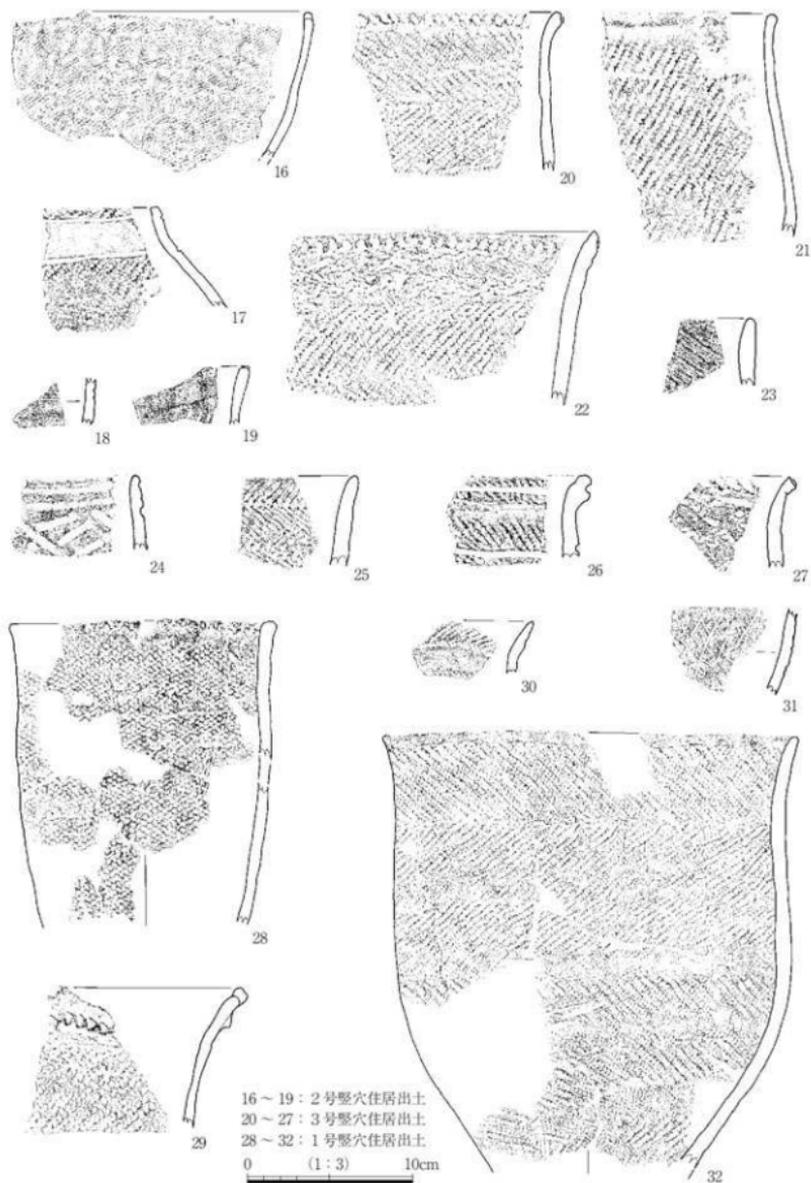
れる。体部には横位の結節回転文が施されている。これら39と40は円筒上層b式期に属するものと考えられる。石器は286・290・316・318・330の5点を掲載した。286・290はいずれも石鏃、316・318は不定形の剥片、350は敲磨器である。

〔時期〕 遺構の特徴から詳細な時期を特定するのは困難であるが、出土遺物から縄文時代中期前葉の竪穴住居であると推定される。

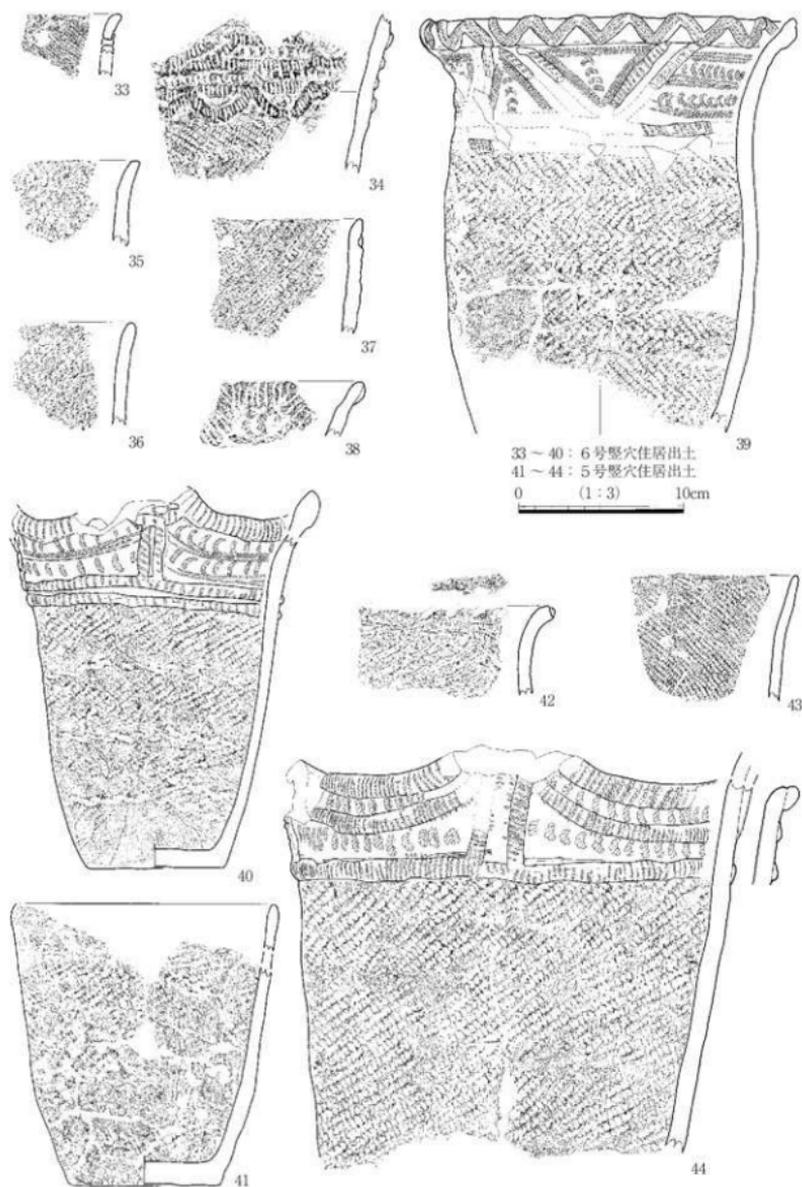
(久保)



第13図 出土遺物1 (竪穴住居内・縄文土器)



第14回 出土遺物2 (竪穴住居内・縄文土器)



第15図 出土遺物3(壑穴住居内・縄文土器)

## (2) 土 坑

## 1～24号土坑 (第16～18図、写真図版8～13)

平成27年度調査で確認された土坑は24基である。これらのうち21号土坑の底面には副穴が1個認められる。平面形と規模はほぼ同一であり、一部住居との重複関係は認められるが、土坑同士の重複はない。いずれの土坑も形状や規模から食糧貯蔵穴と考えられる。ただし、底面が外方に張り出したいわゆるプラスチック状土坑は認められない。

(久保)

## (3) 焼 土 遺 構

平成27年度調査で確認された焼土遺構は3基で、いずれも縄文時代の遺構であると想定される。

## 1号焼土遺構 (第20図、写真図版15)

【位置・検出状況】調査区北側 I A17gに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。

【平面形】不整な円形 【規模】長軸36cm・短軸34cm

【備考】地山が被熱の影響により使用面から3.5cm下まで焼土化している。周辺遺構に伴う屋外炉の可能性が高い。時期は周辺の遺構から縄文時代と判断した。

## 2号焼土遺構 (第20図、写真図版15)

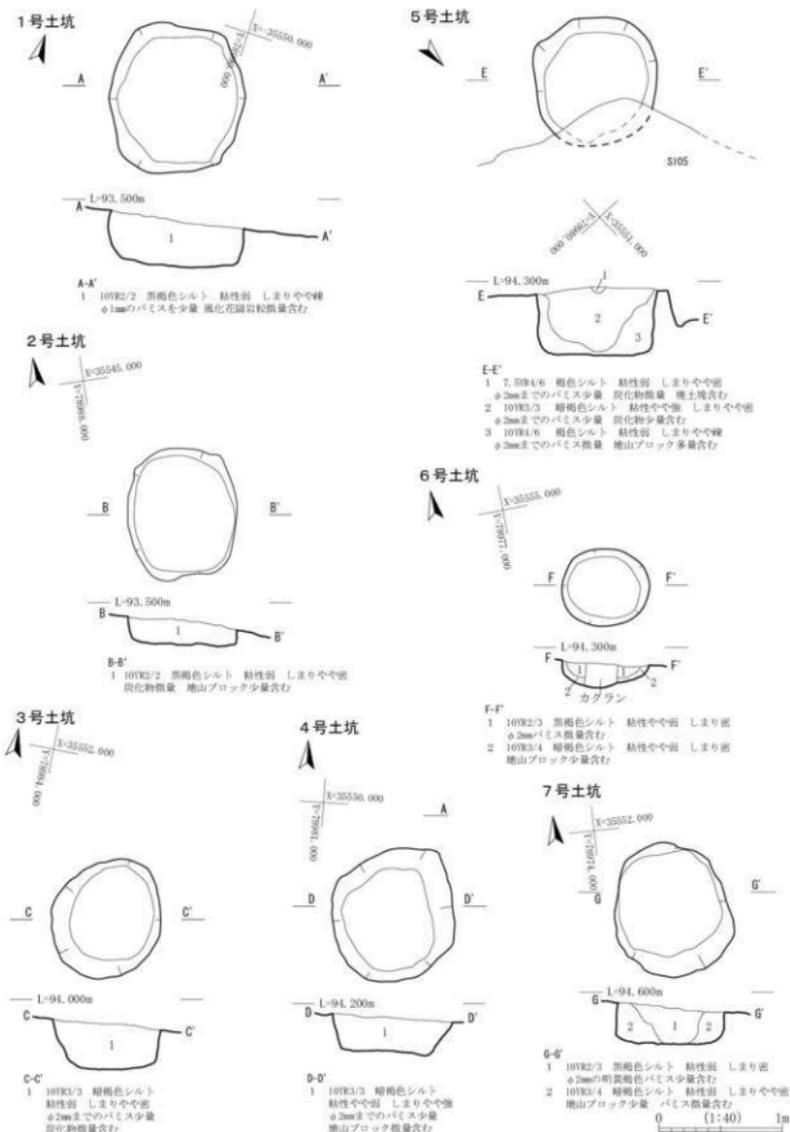
【位置・検出状況】調査区北側 I A3kに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。

【平面形】不整な円形 【規模】長軸34cm・短軸30cm

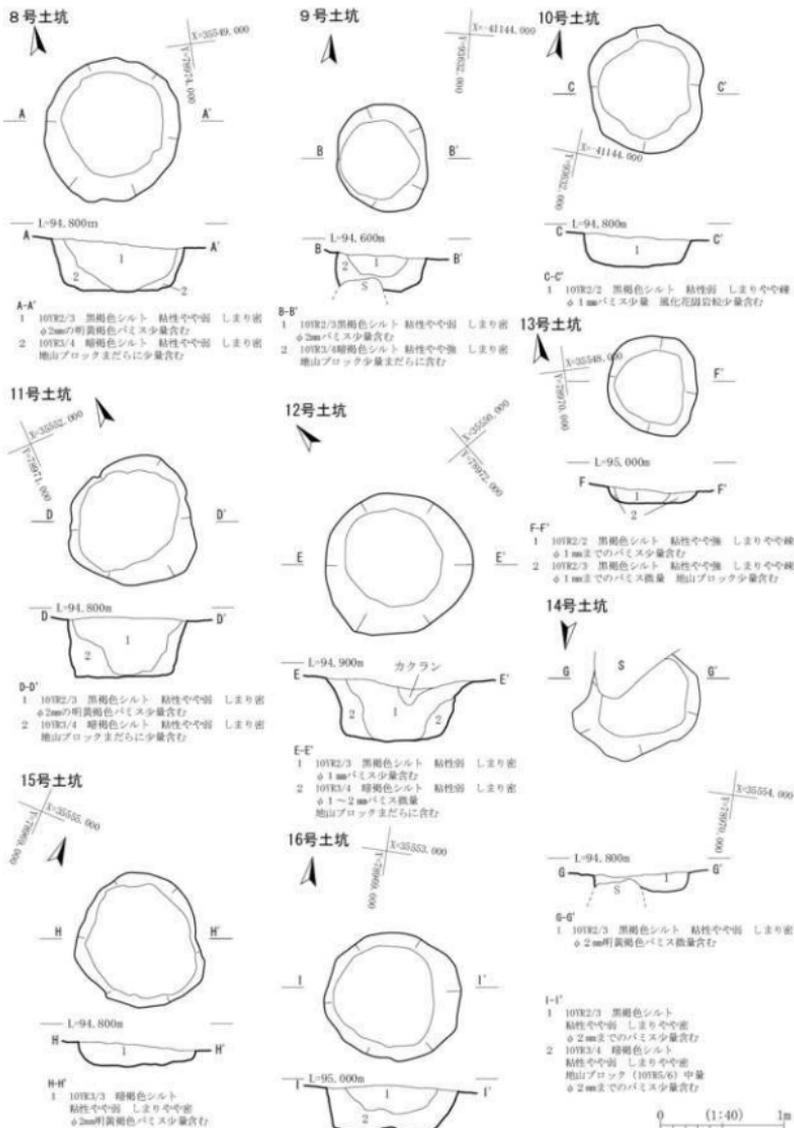
【備考】地山が被熱の影響により使用面から5cm下まで焼土化している。隣接して3号焼土遺構が

第3表 平成27年度調査土坑一覧表

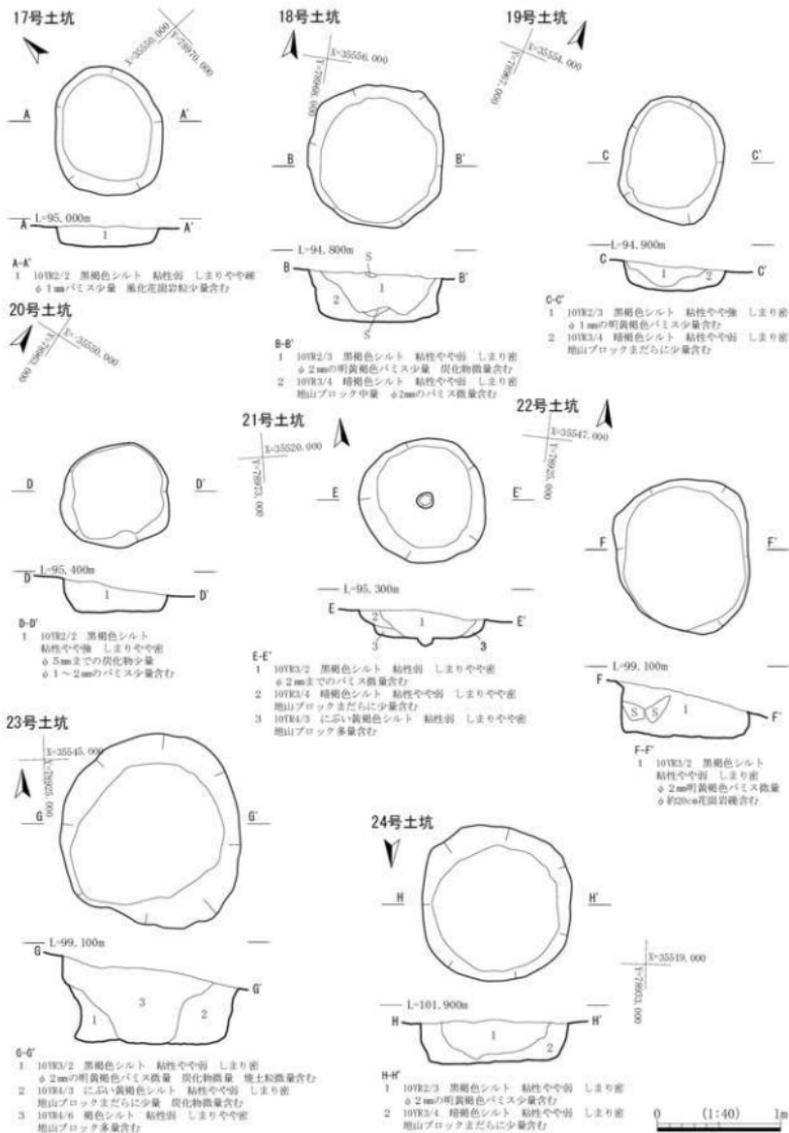
グリッド名	遺跡名	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土主体土	備 考
I A19h	1号土坑		118	108	37	黒褐色シルト	
I A19j	2号土坑		104	88	20	黒褐色シルト	
I A18h	3号土坑		100	87	36	暗褐色シルト	
I A17h	4号土坑		104	98	20	暗褐色シルト	
I A16h	5号土坑	S102<SK05	(104)	98	55	暗褐色シルト	
I A16g	6号土坑		71	62	19	黒褐色シルト～暗褐色シルト	
I A15h	7号土坑		110	92	28	黒褐色シルト～暗褐色シルト	
I A15h	8号土坑		118	108	38	黒褐色シルト	
I A15g	9号土坑		86	72	28	黒褐色シルト～暗褐色シルト	
I A15h	10号土坑		102	88	24	黒褐色シルト	
I A14h	11号土坑		108	96	46	黒褐色シルト～暗褐色シルト	
I A14h	12号土坑		119	114	44	黒褐色シルト～暗褐色シルト	
I A14i	13号土坑		86	73	11	黒褐色シルト	
I A14g	14号土坑		107	(80)	14	黒褐色シルト	
I A14g	15号土坑		112	99	18	暗褐色シルト	
I A14h	16号土坑		112	102	34	黒褐色シルト～暗褐色シルト	
I A14h	17号土坑		105	86	16	黒褐色シルト	
I A14g	18号土坑		120	110	38	黒褐色シルト～暗褐色シルト	
I A14g	19号土坑		100	81	19	黒褐色シルト～暗褐色シルト	
I A13h	20号土坑		88	83	18	黒褐色シルト	
I A15p	21号土坑		102	101	29	黒褐色シルト	
I A3i	22号土坑	S106<SK22	128	106	34	黒褐色シルト	
I A3i	23号土坑	S106<SK22	163	144	61	褐色シルト	
I A5p	24号土坑		130	123	34	黒褐色シルト～暗褐色シルト	



第16図 1号～7号土坑



第17図 8号～16号土坑



第18図 17号~24号土坑

あるが、関連性は不明である。屋外炉の可能性が高く、時期は出土層位から縄文時代と判断した。

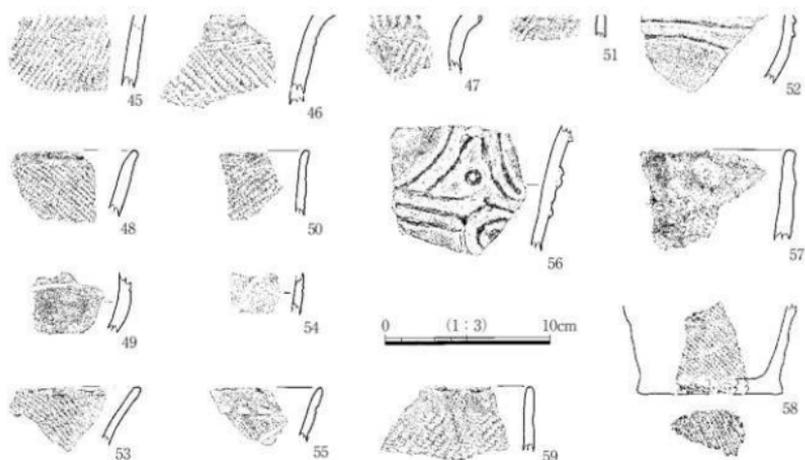
### 3号焼土遺構（第20図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕 調査区北側 I A 3 k に位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。

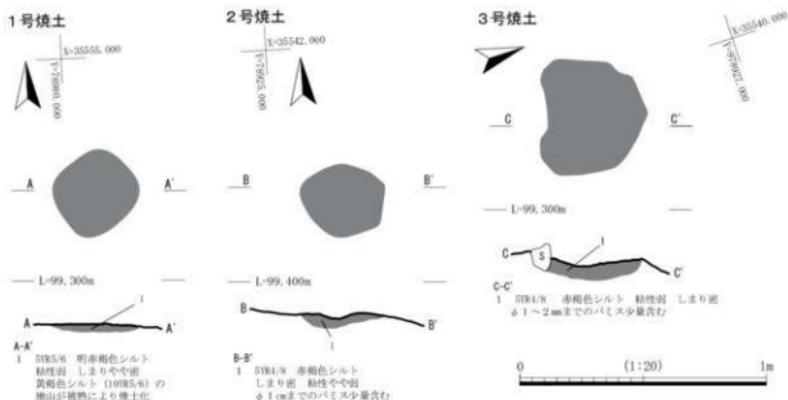
〔平面形〕 歪な楕円形 〔規模〕 長軸46cm・短軸40cm

〔備考〕 地山が被熱の影響により使用面から6cm下まで焼土化している。周辺には2号焼土遺構があるが、関連性は不明である。石が設置されていることから石囲炉の可能性が考えられるが、石を周囲に設置した痕跡は確認できなかった。

(久保)



第19図 出土遺物4(土坑内・縄文土器)



第20図 1号～3号焼土遺構

## (4) 土 器

## 縄文土器 (第13～16・21～30図、写真図版17～29)

出土した土器の時期は、縄文時代早期から後期までである。掲載したものは220点である。分類基準(Ⅲ章)に沿って記述する。

## Ⅰ群土器 (縄文時代早期)

縄文時代早期に相当すると思われる土器群である。157・200～202・266がこれに該当する。全体形状を窺い知ることができる個体は出土していない。また、堅穴住居等の遺構から出土しておらず、すべて遺構外の出土である。器表面に貝殻腹縁文や細く鋭利な沈線文が施文されている土器群である。調査区東部の緩斜面グリッド I A 9 j のⅡ層から1点(157)、I A 15 h のⅠ層から3点(200～202)、攪乱から1点(266)出土している。201は胴部下半のもので、斜位、横位の貝殻沈線文を平行して3～5本施文されている。202は底部付近の破片で、砲弾状の底部に繋がるものと推定される。266は貝殻腹縁文が連続施文されている。

## Ⅱ群土器 (縄文時代前期)

縄文時代前期前葉に相当すると思われる土器群である。1・2・4・5・20～25・27～29・31～33・35～37・42・46・57・58・62・68・103・111・112・136・144・146・147・150・152・155・156・159・165・170・171・181～185・187・188・190～193・195～199・205・208～210・219・229～234・236～239・241～245・247～260・263～270がこれに該当する。

## Ⅱ群1類

竹管による押し引き沈線文が施文されている土器が、調査区北東部の緩斜面グリッド I A 15 e のⅡ層から3点(197～199)出土している。いずれも胴部片で、3条単位の鋸歯状押し引き沈線文と4条単位の平行押し引き沈線文が横位に施文されているものである。また、短い沈線と横位、斜位に施文されている土器が、調査区東部の住居跡埋土から1点(24)出土している。Ⅱ群1類の土器は縄文時代前期前葉に位置づけられ、「早稲田6類」に比定されるものと考えられる。近隣地域では八戸市和野前山遺跡出土のものややモチーフが類似している。

## Ⅱ群2類

横位還付末端回転文(ループ文)が施文されている土器は、調査区西部の丘陵端部グリッド I A 4 k のⅡ層から1点(136)出土している。口縁部の上位1cmの部分のものである。Ⅱ群2類の土器は、縄文時代前期前葉の大木1に比定される。

## Ⅱ群3類

口縁部から全体に羽状縄文が施文されているもので、結束のもの(4・20・22・25・209・210・236・238・254・255・264)と、非結束のもの(32・146・152・183・184・185・187・195・205・208)に分けられる。調査区東側の緩斜面のⅡ層および住居跡埋土から主に出土している。結束羽状縄文が多く、横位羽状(結束第1種 R L + L R)が占めている。縄文時代中期にも一部認められる文様であるが、これらはこの分類から除外している。Ⅱ群3類は縄文時代前期前葉を中心として比定される。中でも非結束羽状縄文は大木1式段階に比定される可能性が考えられる。さらに、これらの中に口唇部に刻み目をもつもの(146・208)があるが、縄文時代前期前葉の大木2式あるいは白座式に相当するものと考えられる。

## Ⅱ群4類

口縁部を中心に横位結節回転文が施文されているものである。遺構内および調査区東部の緩斜面な

どで出土している (22・27・46・68・147・188・233・234・237・242・244・251・257・263)。Ⅱ群4類は前期前葉でも大木2式や白座式に比定されるものと考えられる。その中に横位多段結節回転文で口唇部の隆帯に刻み目をもつもの (22・27・147・263・265) や口縁部に刺突列をもつもの (244) などは、縄文時代前期前葉頃に相当する白座式の特徴が色濃く認められる。

#### Ⅱ群5類

地文が組紐回転文によって施文されているもので、住居跡埋土中より出土したもの (1・5・28・29・35・36)、調査区東部の緩斜面グリッド I A15i (219) や I A15k (232) から出土したものなどである。口縁部に無文体をもち、横位4本丸組紐回転文で施文されている。Ⅱ群5類の土器は縄文時代前期前葉の大木2式もしくは白座式に比定されるものと考えられる。

#### Ⅱ群6類

外面上半部にS字状沈線文が施されているもので、遺構内から1点のみ (1) 出土しているが、遺構外からは出土していない。Ⅱ群6類は縄文時代前期前葉の大木2b式に比定されている。

#### Ⅱ群7類

網目状燃糸文 (単軸絡糸条第5種) が施文されている土器で胎土に繊維が混じり、層位等から前期に属すると考えられるもので3点ある。遺構外から出土しているものは2点で、グリッド I A17j Ⅱ層 (245) と I A18j Ⅱ層 (259) から1点ずつ見つかった。Ⅱ群7類は縄文時代前期前葉に位置づけられると考えられる。

#### Ⅱ群8類

附加条回転文 (附加条第2種) が施文されている土器である。住居跡埋土 (23・33・37・42)、遺構外からは、調査区東部の緩斜面のグリッド I A12j (182)、I A13h (188)、I A14i (192)、I A15k (231) のⅡ層からそれぞれ出土している。Ⅱ群8類の土器は縄文時代前期前葉に比定されると考えられる。

#### Ⅲ群土器 (縄文時代中期)

Ⅲ群土器は縄文時代中期に相当すると思われる土器群である。3・34・38~41・44・47・48・50・121・179・189・203・207・222・227・228・246・262がこれに該当する。

#### Ⅲ群1類

縄文原体圧痕文が施されたかまほこ形の貼付隆帯 (鋸歯状、横位、縦位、斜位) と馬蹄形状の縄文原体圧痕文が施文されている土器は、調査区西側の堅穴住居5・6から5点 (34・38・39・40) のほか、調査区東側の遺構外から4点 (179・227・246・262) 出土している。後者の4点は、いずれも波状または台形状の突起をもつ口縁部片で、口縁に沿って隆帯が貼り付けられ、上部に縄文原体圧痕文が施されている。横位や斜位の貼付文に囲まれた中を、馬蹄形状の縄文原体圧痕文が横位に連続して施文されている。207も口縁上部の一部であるが262と同じ台形状の突起や原体圧痕文もつものと推定される。Ⅲ群1類は縄文時代中期前葉の大木7bに対応する円筒上層b式に比定されると考えられる。

#### Ⅲ群2類

隆線 (鋸歯状、曲線状) が施文されている土器は、調査区東部緩斜面中央のグリッド I A15j Ⅰ層から1点 (222) 出土している。細い粘土紐で横位、鋸歯状に貼り付けられている。Ⅲ群2類は、縄文時代中期中葉の大木8式に比定されるものと考えられる。

#### Ⅲ群3類

口縁部に刺突列点文が施文されている土器は、調査区西部の尾根上のグリッド I A4i Ⅱ層から1

点(95)出土している。口縁部の無文体と地文との境に連続する刺突列点文が施文されている。Ⅲ群3類は、縄文時代中期後葉の大木9式あるいは最花式に比定されるものと考えられる。

#### Ⅲ群4類

沈線で囲って楕円文や「逆U字文」が施されている土器は、調査区西区の尾根上のグリッドI A 4jⅡ層から1点(124)、中央部のグリッドI A 13hⅡ層から1点(189)、I A 9mⅡ層から1点(174)、東部のI A 15iⅡ層から1点(212)などが出土している。Ⅲ群4類は、縄文時代中期後葉の大木9式に比定されるものと考えられる。

#### Ⅳ群(縄文時代後期)

Ⅳ群土器は縄文時代後期に相当すると思われる土器群である。6・19・26・30・43・45・49・51・56・59・61・65・67・69・102・104・110・113・120・122・135・137・143・145・148・149・151・153・154・158・160・161・164・166・169・172・178・180・186・194・204・218・220・226・235・240・261がこれに該当する。

#### Ⅳ群1類

粗野な渦巻き沈線文が施文されているものである。地文の上に渦巻き文、曲線文を施すものと、無文の上に渦巻き文、曲線文を施すものがある。前者は調査区西部の尾根上のグリッドI A 4iⅠ層から7点(77・79・86・99・101・104・127)、I A 3jⅡ層から2点(63・66)、I A 4g検出面(Ⅲ層)から1点(71)、I A 6iⅡ層から2点(151・178)、中央部I A 14iⅡ層から1点(194)、I A 15iⅠ層から2点(215・223)出土している。後者は西部の尾根上グリッドI A 4iⅠ層から1点(78)、I A 4jⅠ層から2点(110・129)、中央部I A 9iⅡ層から1点、I A 15iⅠ層から1点(204)、I A 15jⅠ層から1点(224)出土している。Ⅳ群1類は縄文時代後期前葉の十腰内I式に比定されるものと考えられる。

#### Ⅳ群2類

磨り消し縄文が施文されている土器は、遺構内から調査区西の尾根上グリッドI A 4jⅠ層から1点(129)、I A 4iⅠ層から1点(79)、同じくⅡ層から1点(104)、刺突列のある1点(174)が出土している。縄文を施した後、沈線で区画し、内部を磨り消しているものである。いわゆる磨り消し縄文である。Ⅳ群2類は、縄文時代中期末～後期初頭に位置づけられるものと考えられる。

#### Ⅳ群3類

微隆起文(曲線、平行、三角状)が施されるものである。遺構内から2点(52・56・127・134)出土しており、遺構外からは出土していない。Ⅳ群3類は葦室式に相当する縄文時代後期初頭～前葉に位置づけられるものと考えられる。

#### Ⅳ群4類

口縁部から全体に平行状の細沈線がほどこされているものである。調査区西側の尾根、グリッドI A 4iのⅠ層から2点(89・90)出土している。Ⅳ群4類は縄文時代後期前葉に位置づけられると考えられる。

#### Ⅳ群5類

口縁部に筋状の縄文原体圧痕文が施文されている土器は、調査区北西部の尾根上のグリッドI A 4jのⅡ層から1点(128)、I A 9jⅡ層から1点(162)と南東部のグリッドI A 19iⅡ層から1点(261)出土している。Ⅳ群5類は、縄文時代後期初頭～前葉に比定されるものと考えられる。

#### Ⅳ群6類

縦位の結節回転文が施文されている土器は、調査区東部の緩斜面グリッドI A 4iⅡ層から1点

(97) 出土している。単節斜縄文(LR)に口唇部から縦位の結節回転文が施されている。Ⅲ群6類は縄文時代後期前葉に比定されると考えられる。

#### Ⅳ群7類

口縁部から全体に、網目状拵糸文(単軸絡条体第5類)が施文されている土器は、調査区西側の尾根上、グリッドIA4jのI層から2点(115・120)、IA4kのI層から1点(130)出土している。Ⅳ群7類は、縄文時代後期に位置づけられると考えられる。

#### Ⅳ群8類

平行拵糸文(単軸絡条体第1種)が施文されている土器は、調査区中央部のグリッドIA9jII層から2点(154・158)、グリッドIA9iII層から1点出土している。前者は縦位に、後者は斜位に平行拵糸文が施されている。Ⅳ群8類は、縄文時代後期に比定されるものと考えられる。

#### Ⅳ群9類

文様が施文されない無文の土器は、調査区西区の尾根上のI・II層から9点(60・70・72・73・87・107・131・142・153)、中央部のII層から1点(173)、東部のI層から1点(221)出土し、尾根側からが多い。87は口縁部が内湾する深鉢形の土器で、底部に木葉瓦痕文を有するものである。Ⅳ群9類はおおむね縄文時代後期に位置づけられるが、詳細については不明である。

以上のように、上のマッカ遺跡の平成27年度調査で出土した縄文土器を概観すると、大別4時期に分けることができる。最も古い段階の土器群であるI群としたものは、少量ながら縄文時代早期中葉をまとまりとするものである。尖底の底部を持ち、外面には貝殻腹線文や細く鋭利な沈線文が文様構成として考えられる。次に古い段階は、II群とした縄文時代前期初頭から前葉を中心とする時期のものである。少量の前期初頭の土器は早稲田6類に相当する土器があり、大木1式から大木2b式の土器群が認められる。さらに、白座式の特徴を有する土器が多くみられることが判明した。Ⅲ群とした土器群は縄文時代中期である。中期初頭に遺物量が多く認められ、比較的まとまっている。ただし、中期の土器は中期中葉から中期末までのものも散見され、中期全般にわたって土器が出土している。最も新しい縄文時代後期は初頭から前葉にかけて出土量が多い。少し離れた平成29年度調査においても同時代の土器が多くみられ、この時代は周辺域広範囲に遺物が分布していることが想像される。なお、それ以降の土器は出土が確認できない。

### (5) 土 製 品

土器以外に土製品として、円盤状土製品、きのこ形土製品、土錘、鐮形土製品などが出土している。いずれも時代が不明なものも含まれるが、縄文時代のものであると考えられる。

#### 円盤状土製品(第31図、写真図版29)

271・272は円盤状土製品である。土器片の側縁部を再加工、研磨し、円盤状に形を整えたものである。271は文様から縄文時代中期の土器片を再加工したものであると考えられる。

#### ミニチュア土器(第31図、写真図版29)

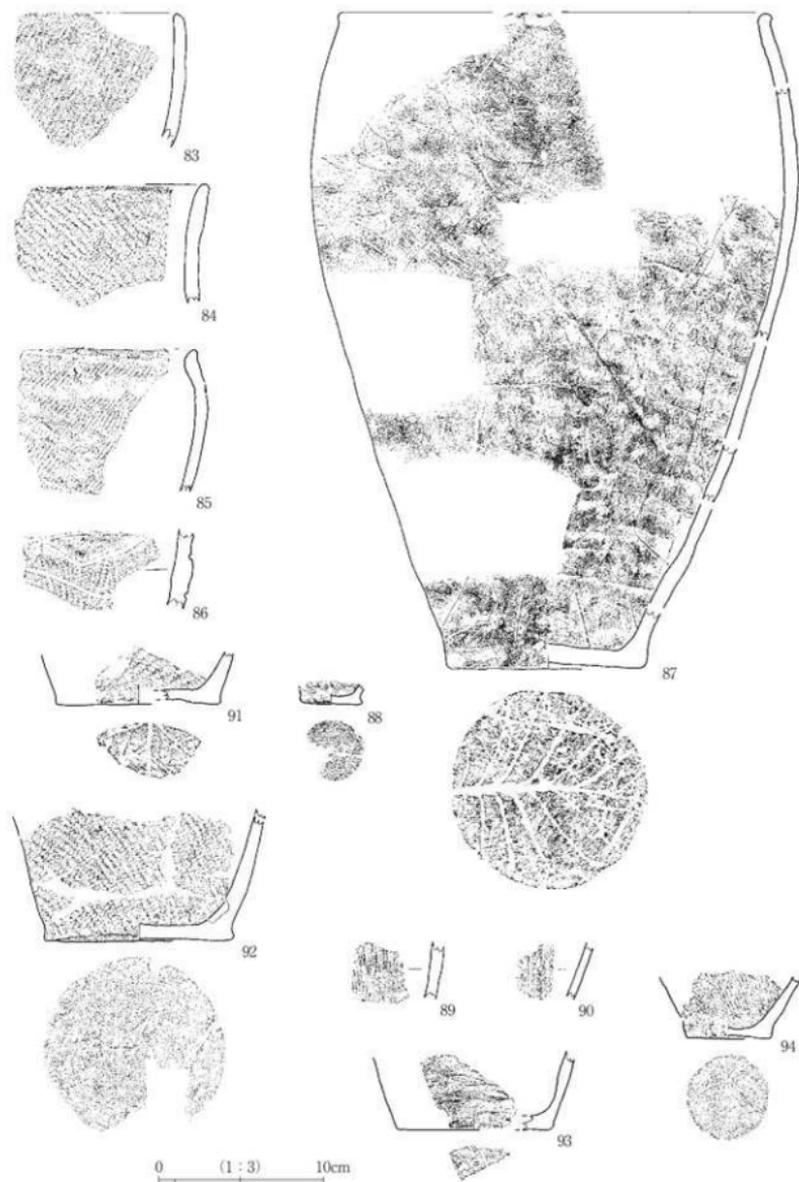
273・274はミニチュア土器である。273は細身の深鉢を模したものであり、外面には縄文が施されている。機能・用途は不明である。

#### きのこ形土製品(第31図、写真図版29)

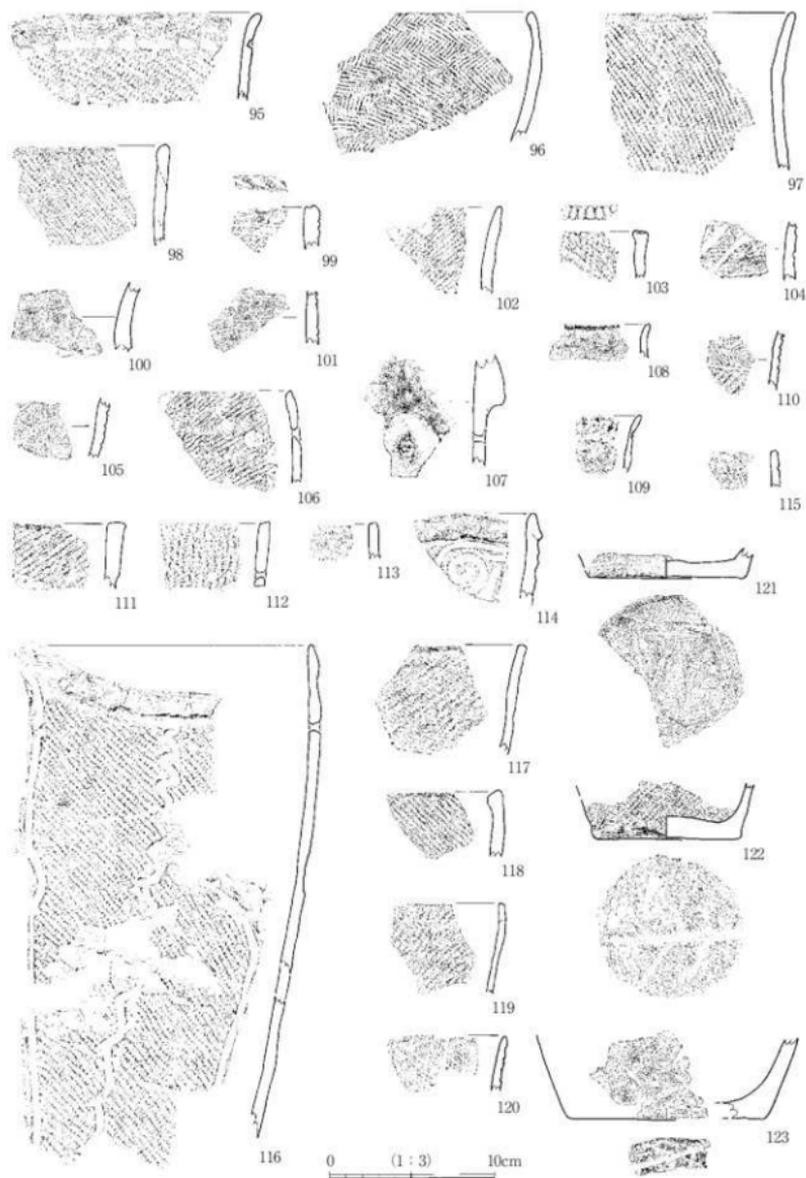
275はきのこ形土製品である。傘部と軸部が作り出されているが、軸部は大半が欠損しており、長さや形状を知ることができない。機能および用途も不明である。



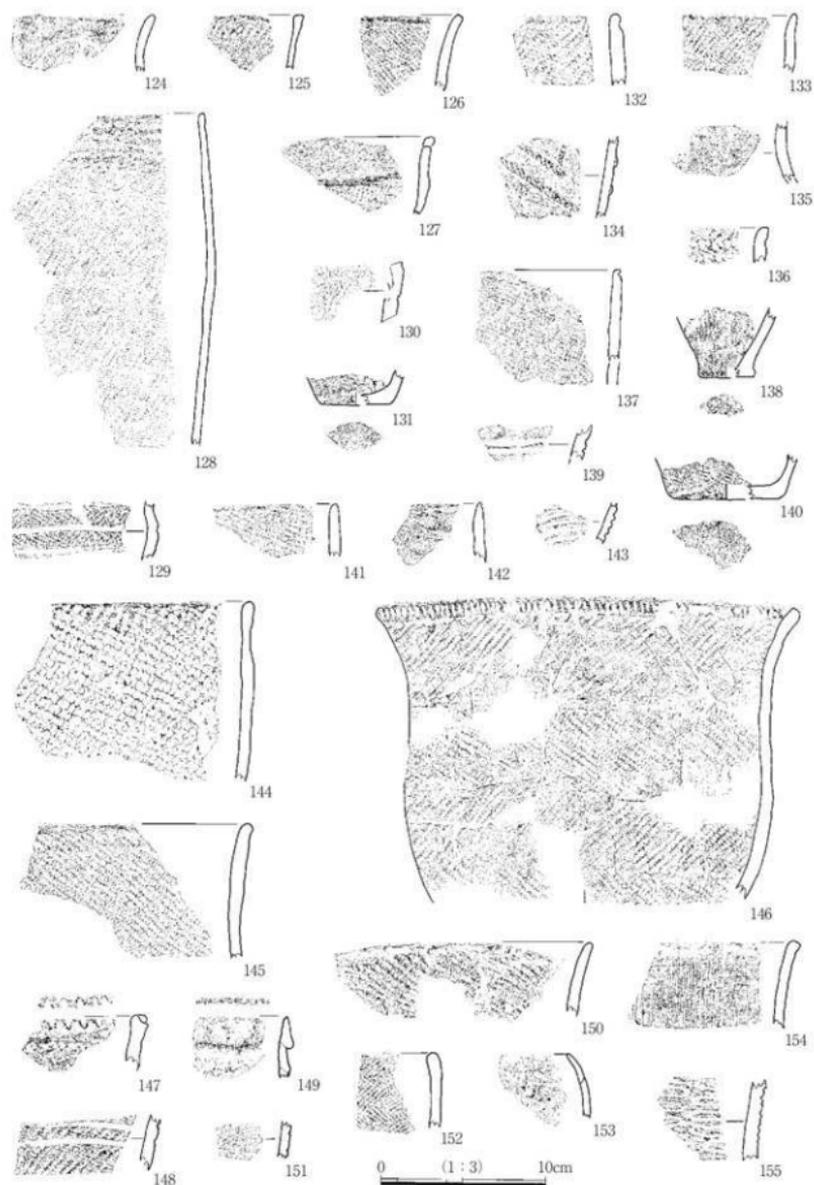
第21図 出土遺物 5 (遺構外・縄文土器)



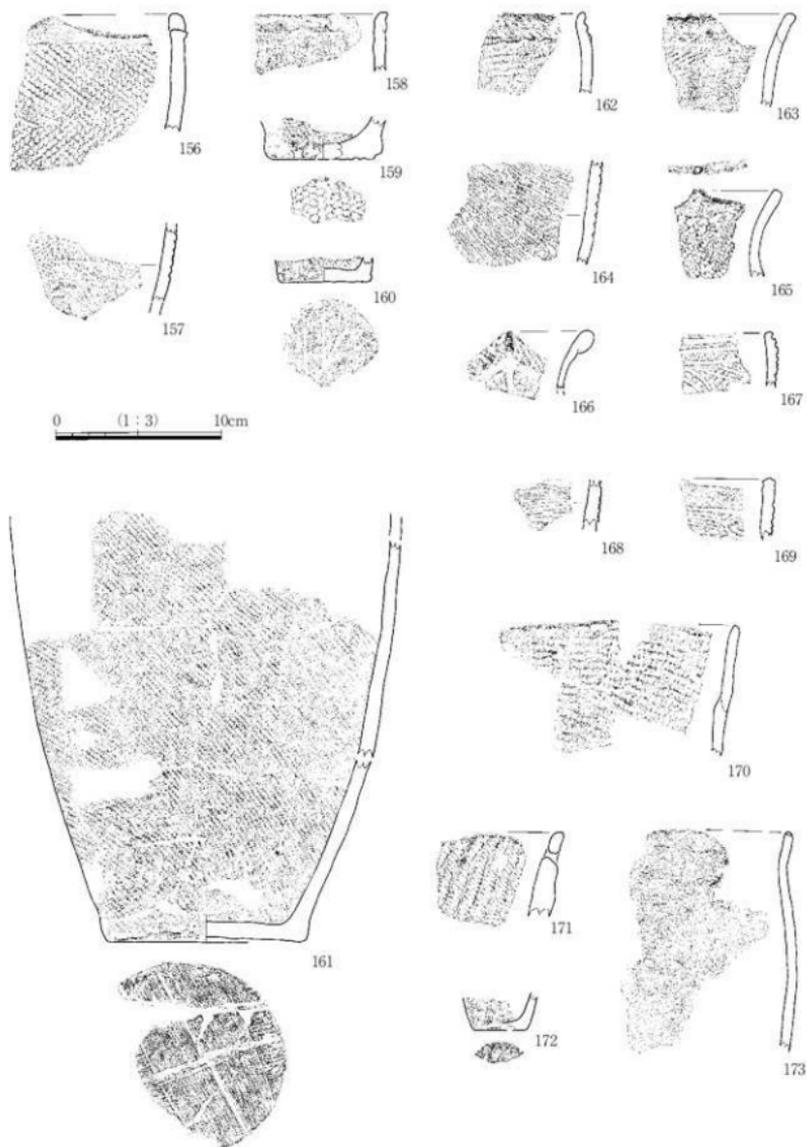
第22図 出土遺物 6 (遺構外・縄文土器)



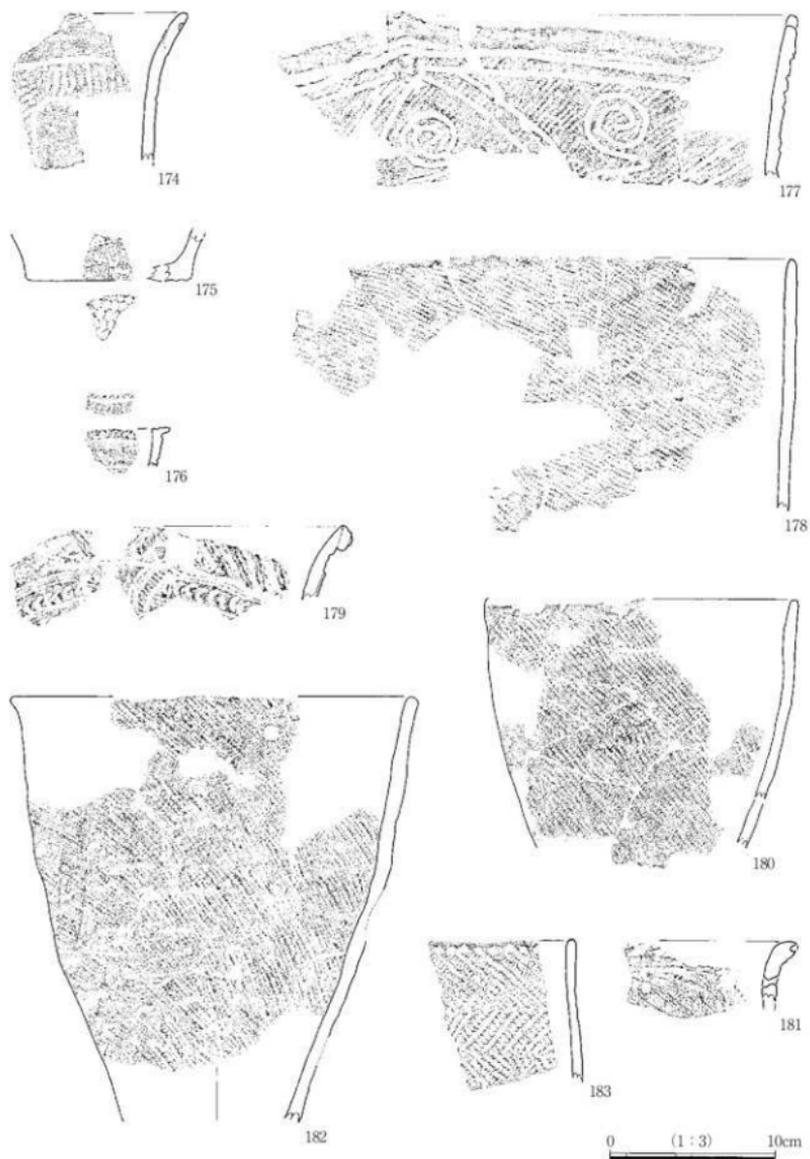
第23図 出土遺物7(遺構外・縄文土器)



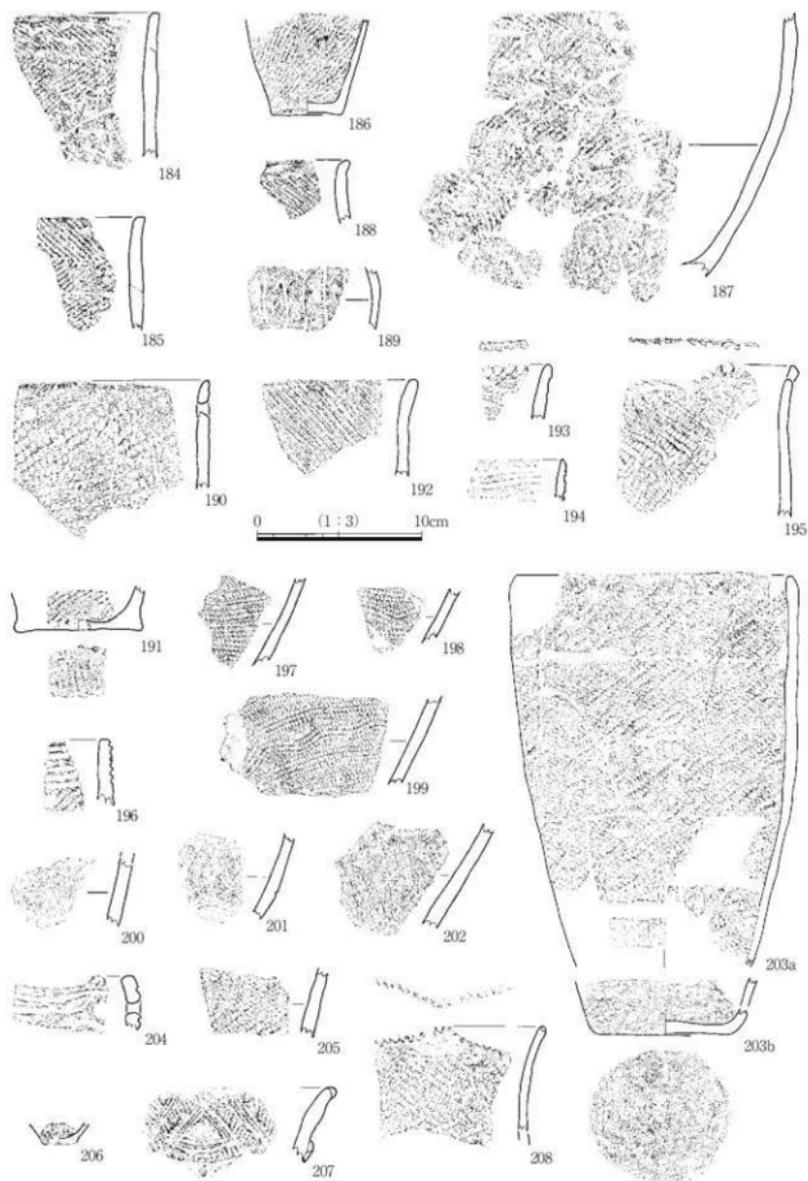
第24図 出土遺物 8 (遺構外・縄文土器)



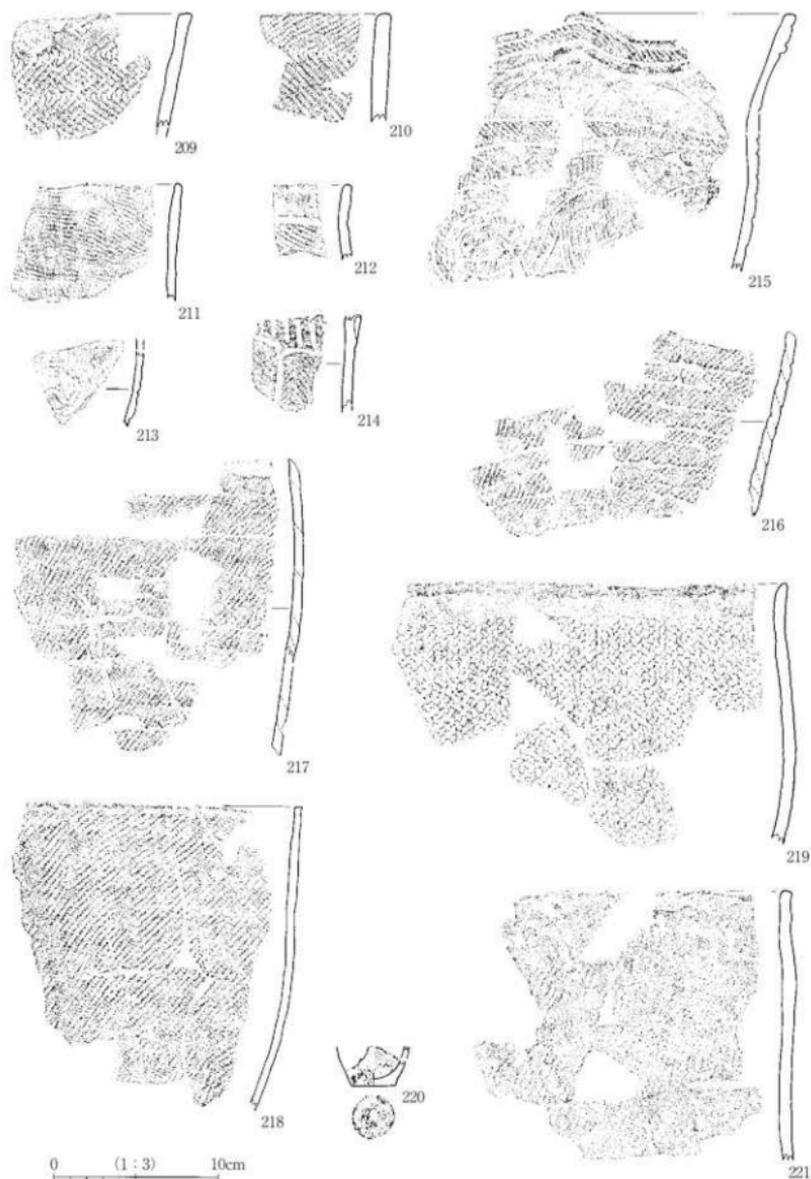
第25図 出土遺物9(遺構外・縄文土器)



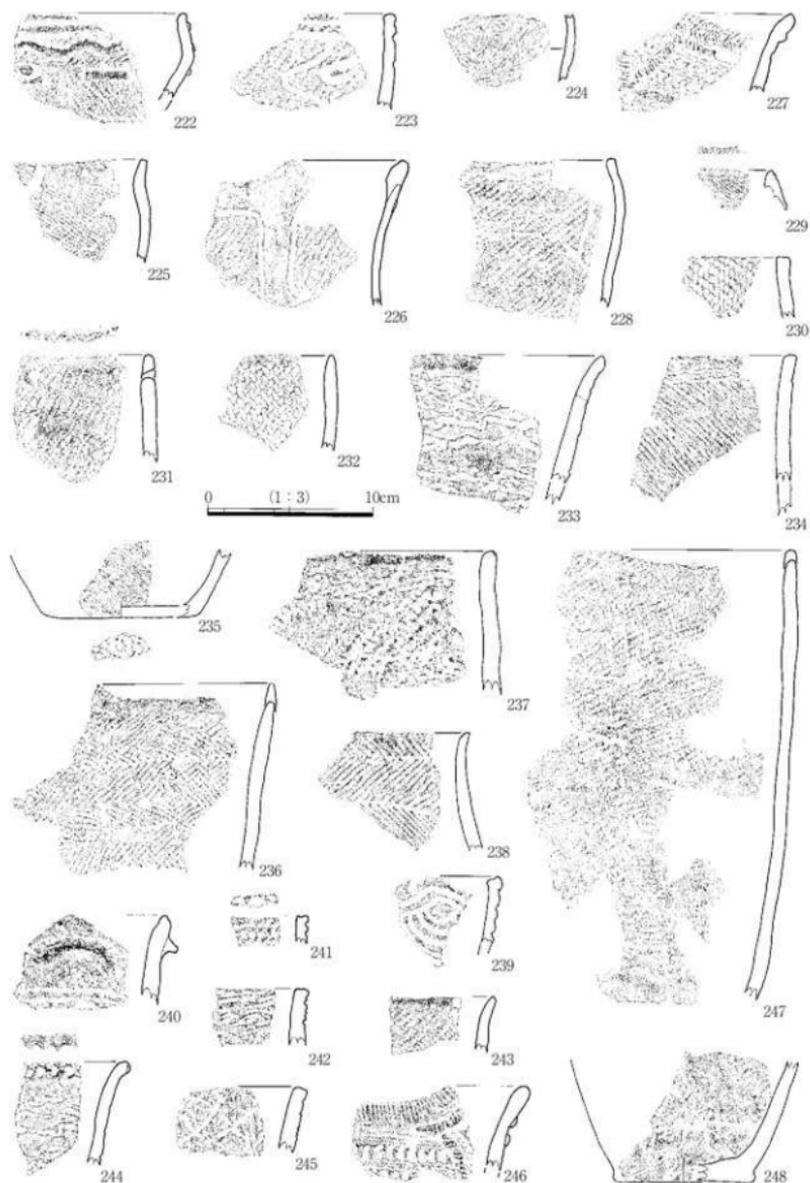
第26図 出土遺物10(遺構外・縄文土器)



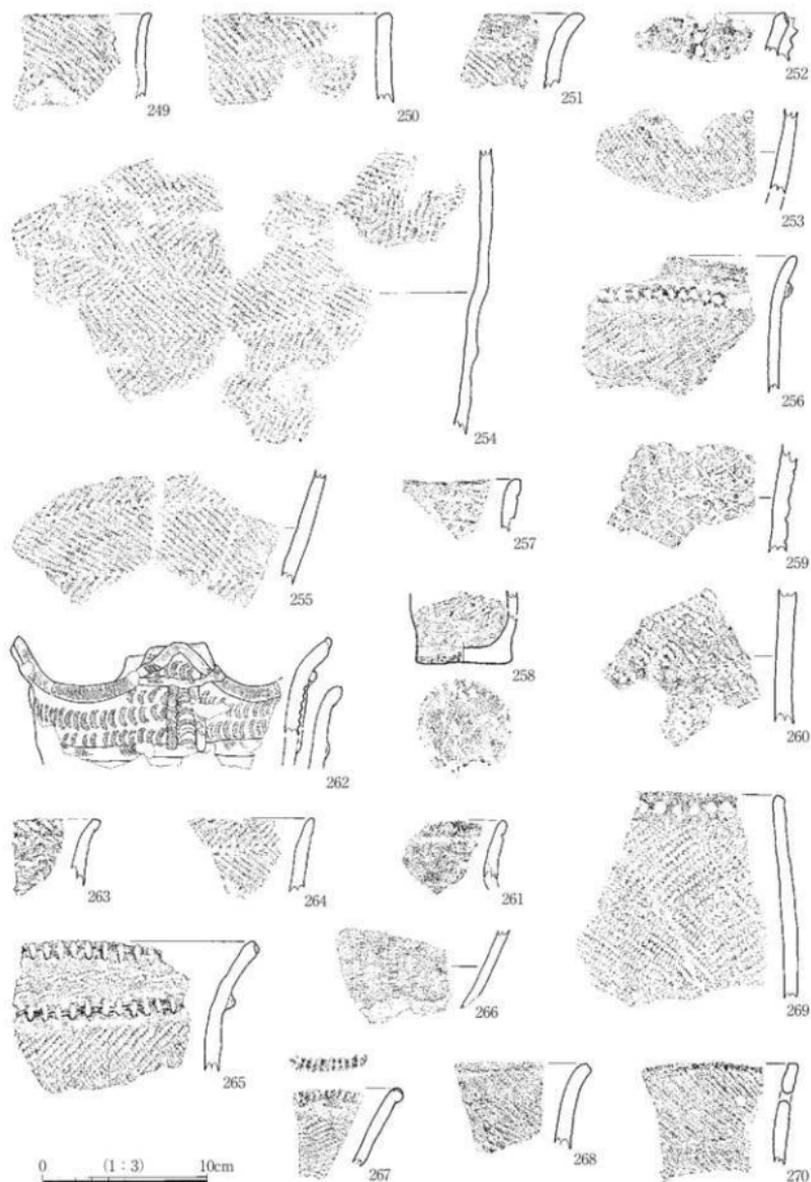
第27図 出土遺物11(遺構外・縄文土器)



第28図 出土遺物12(遺構外・縄文土器)



第29図 出土遺物13(遺構外・縄文土器)



第30図 出土遺物14(遺構外・縄文土器)

**土錘**（第31図、写真図版29）

276は中実・丸棒状の土製品で1箇所貫通孔が認められる。この貫通孔は、焼成前の穿孔であると考えられ、錘の役割を果たすかどうか不明であるが、特徴から土錘とした。

**鐺形土製品**（第31図、写真図版29）

278・279は鐺形土製品である。278は器の形をした簡素なものであるが、279は1箇所鈕状の突起が作り出されている。この鈕状突起には穿孔がなされており、貫通孔である。いずれも形態的特徴から鐺形土製品としたが、その機能および用途は不明である。

（久保賢・光井）

**(6) 石 器**

平成29年度調査で出土した石器（280～345）については分類基準（Ⅲ章）に沿って記述する。なお、実測図は出土状況ではなく、分類を優先して掲載した。帰属時期は、おおむね出土土器の時期と重なるものと推測される。

**石鏃**（第31図、写真図版30）

石鏃は有茎のものと無茎のものに2分される。281～284の4点はいずれも有茎石鏃である。これらのうち、長楕円形281を除いた3点は三角形の鏃身である。280・285～291は無茎の石鏃であるが、290は基部が残存していないため有茎の可能性もある。280が長楕円形である以外は三角形の鏃身であり、287～289・291は平基式に分類可能である。

**石匙**（第31・32図、写真図版30）

292～304は石匙である。刃部があり、摘み状の突出部が1箇所認められる。刃部の向きにより3分類可能であり、1類は縦方向の刃部、2類は横方向の刃部、3類は斜め方向の刃部である。292～299・303・304は1類の石匙である。刃部先端が尖る形態のものも認められる。300・302は2類で301は3類に分類できる。

**石錐**（第32図、写真図版31）

306・307は扁平で幅広の部位が徐々に細くなる形態を呈する。先端部が欠損した石錐であると判断したが、削搔器の一部かもしれない。

**尖頭器**（第32図、写真図版31）

308～312は尖頭器であると判断した。311は楕円形を呈するが、先端部を調整によって作り出されている。308・312は両端部が欠損しているため、全体形状が不明であるが、全体に細かな剥離調整が施されているため尖頭器である可能性が高い。

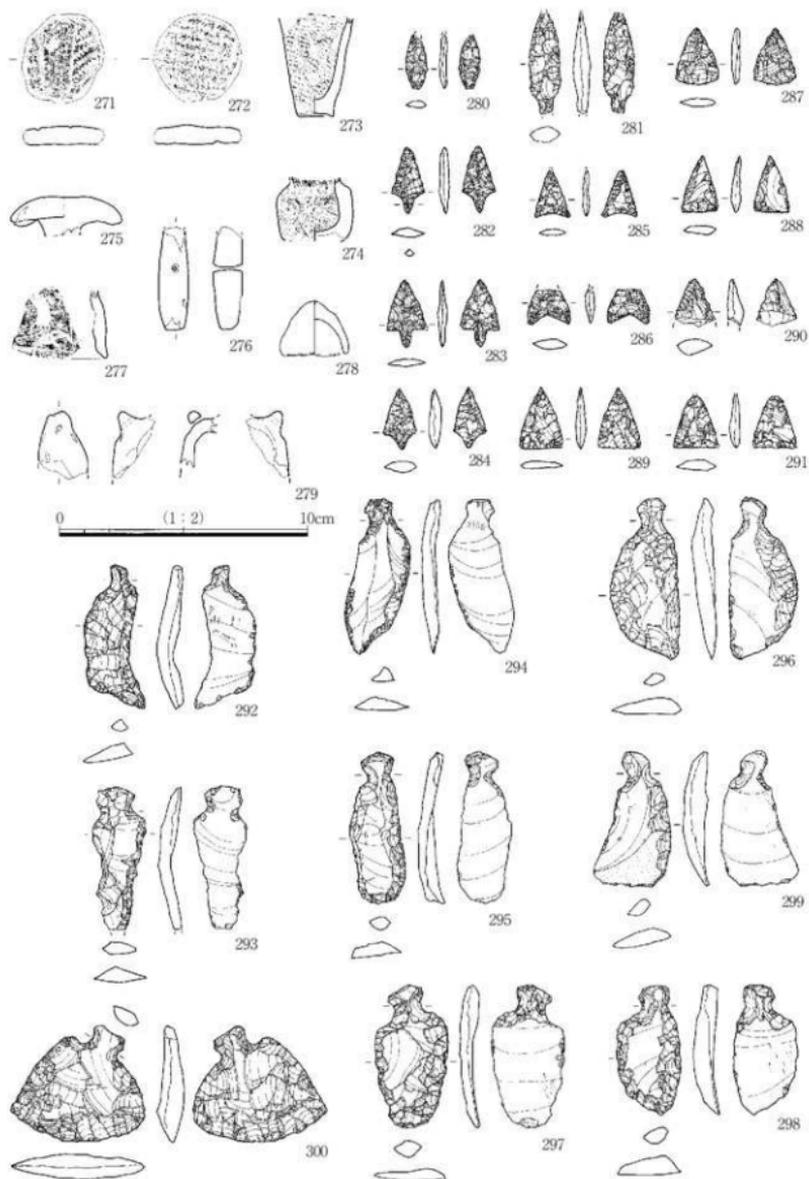
**石斧**（第33図、写真図版32）

319～324は石斧に分類した。319は小形の磨製石斧である。刃部は残存しておらず、全体形状は不明である。320～322・324は破面が認められるが、磨製石斧である。323は片面のみの加工がなされた礫石器の可能性も考えられる。

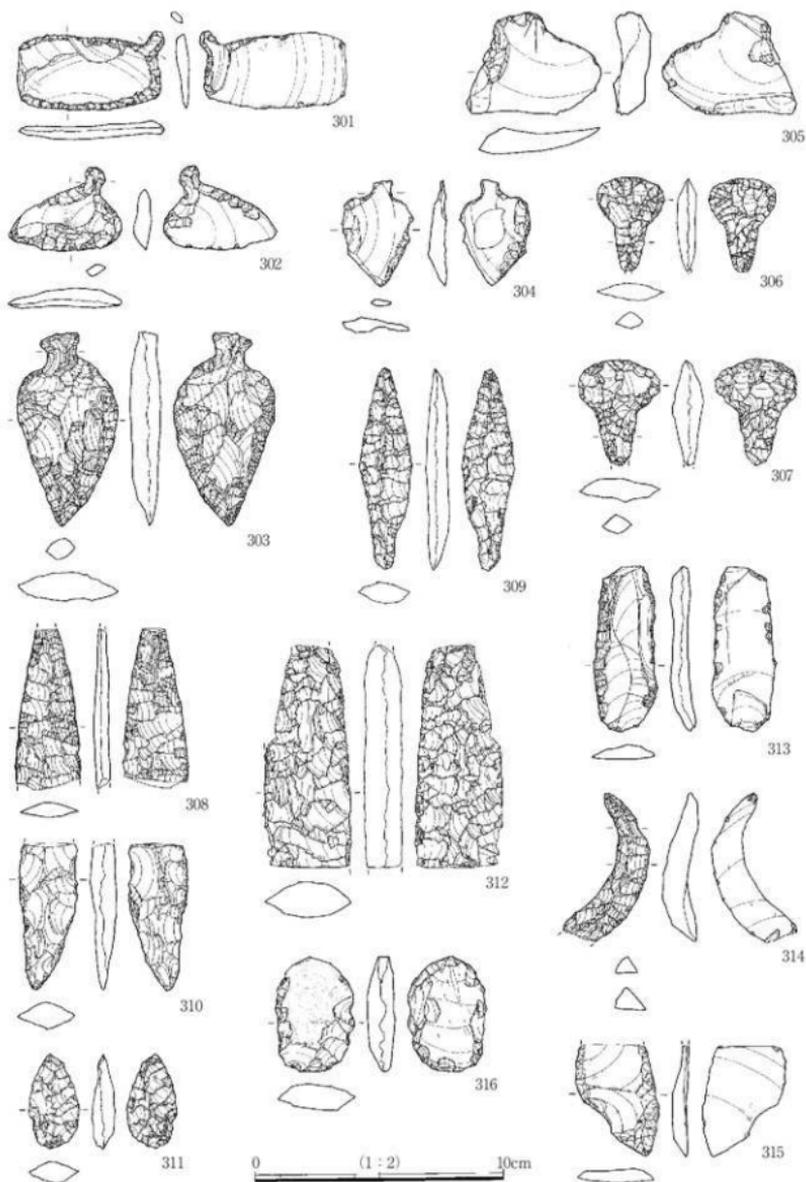
**敲磨器**（第33～37図、写真図版32～34）

325～345は磨石あるいは敲石などの礫石器である。これらのうち、333～338は一側面に顕著な擦痕が認められる特殊磨石である。

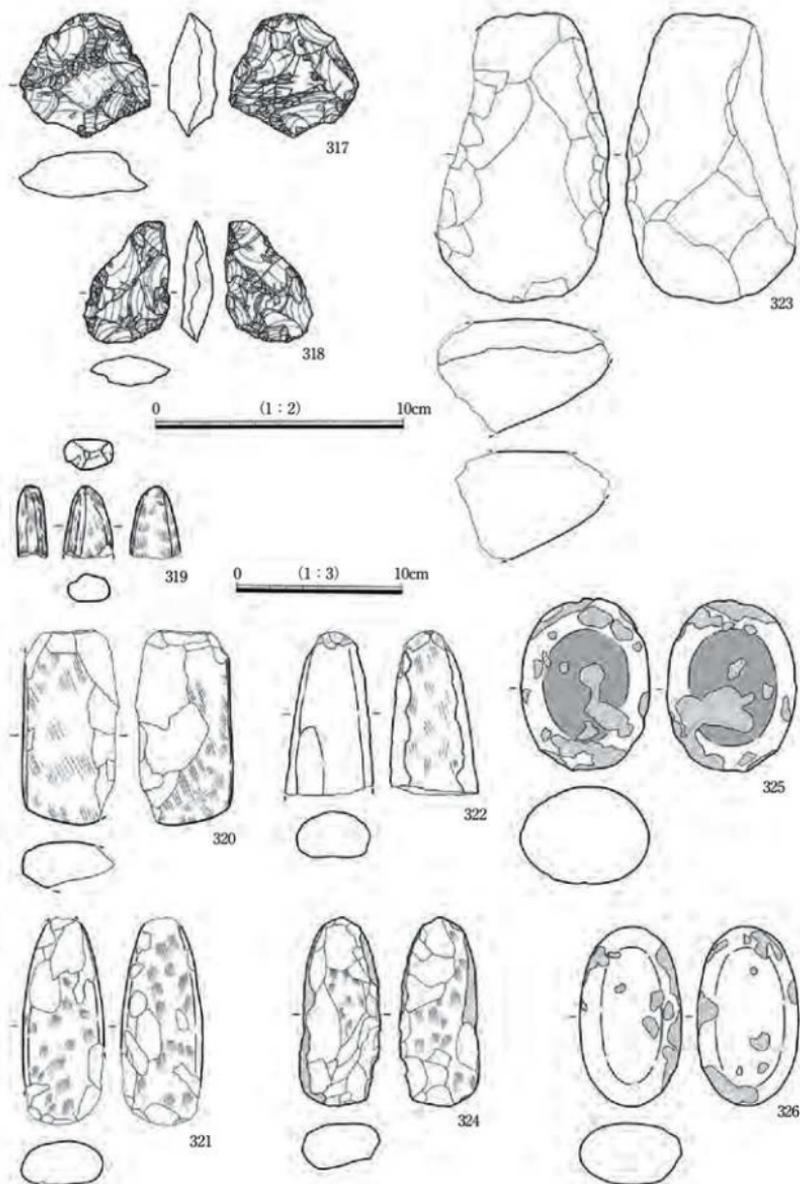
（久保賢・中村）



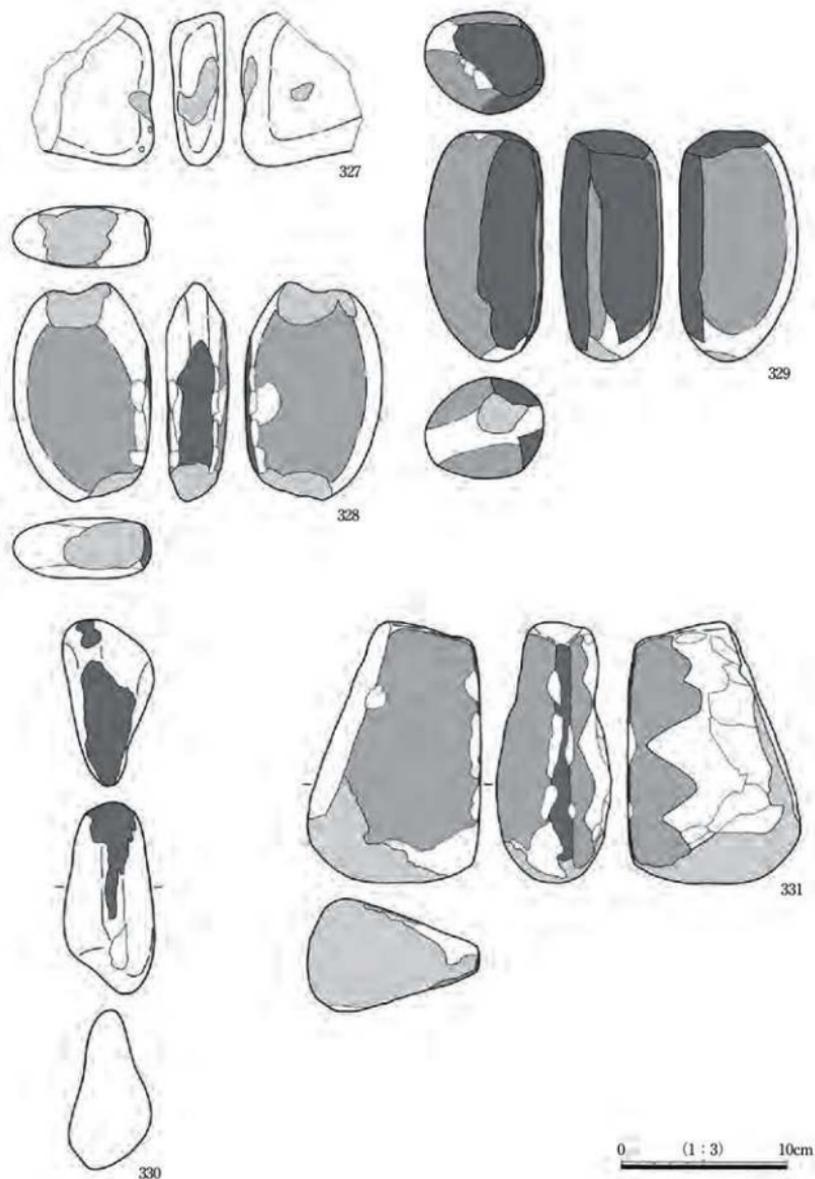
第31図 出土遺物15(土製品・石器)



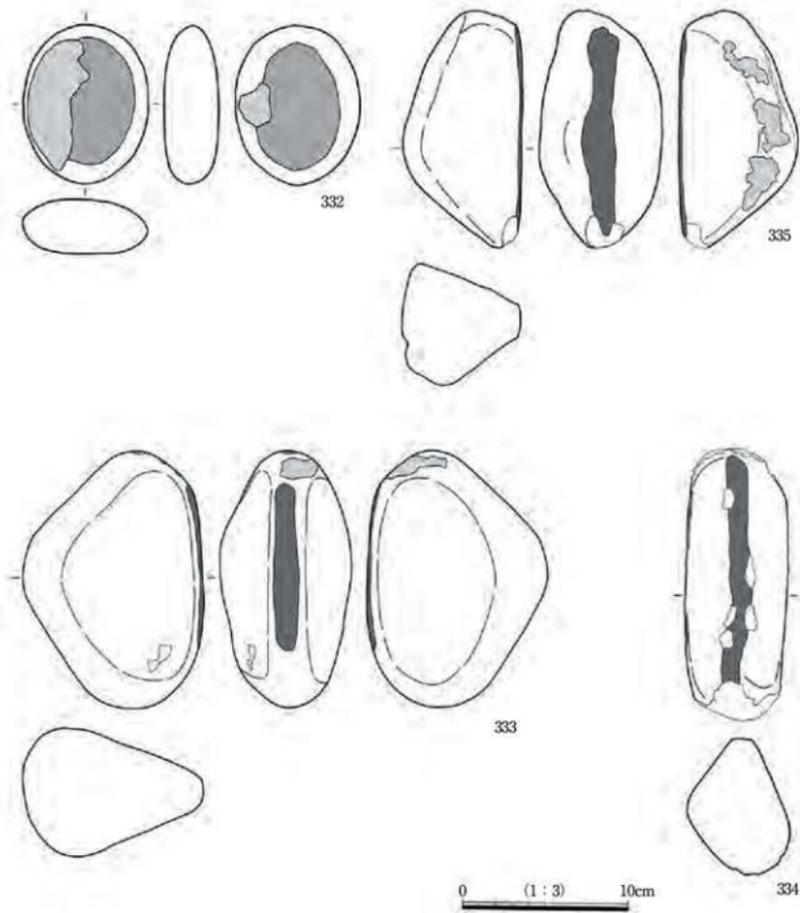
第32図 出土遺物16(石器)



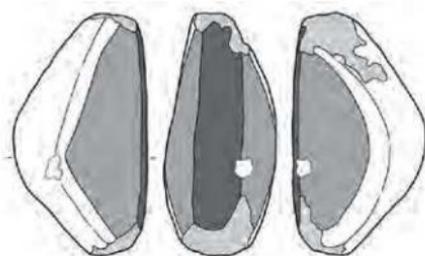
第33図 出土遺物17(石器)



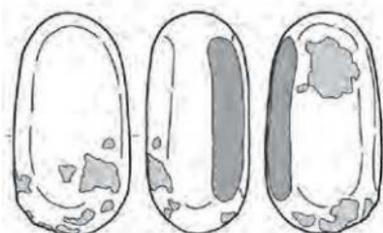
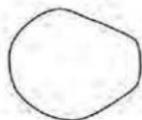
第34図 出土遺物18(石器)



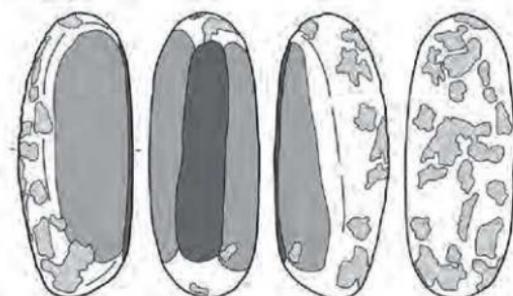
第35図 出土遺物19(石器)



337



338

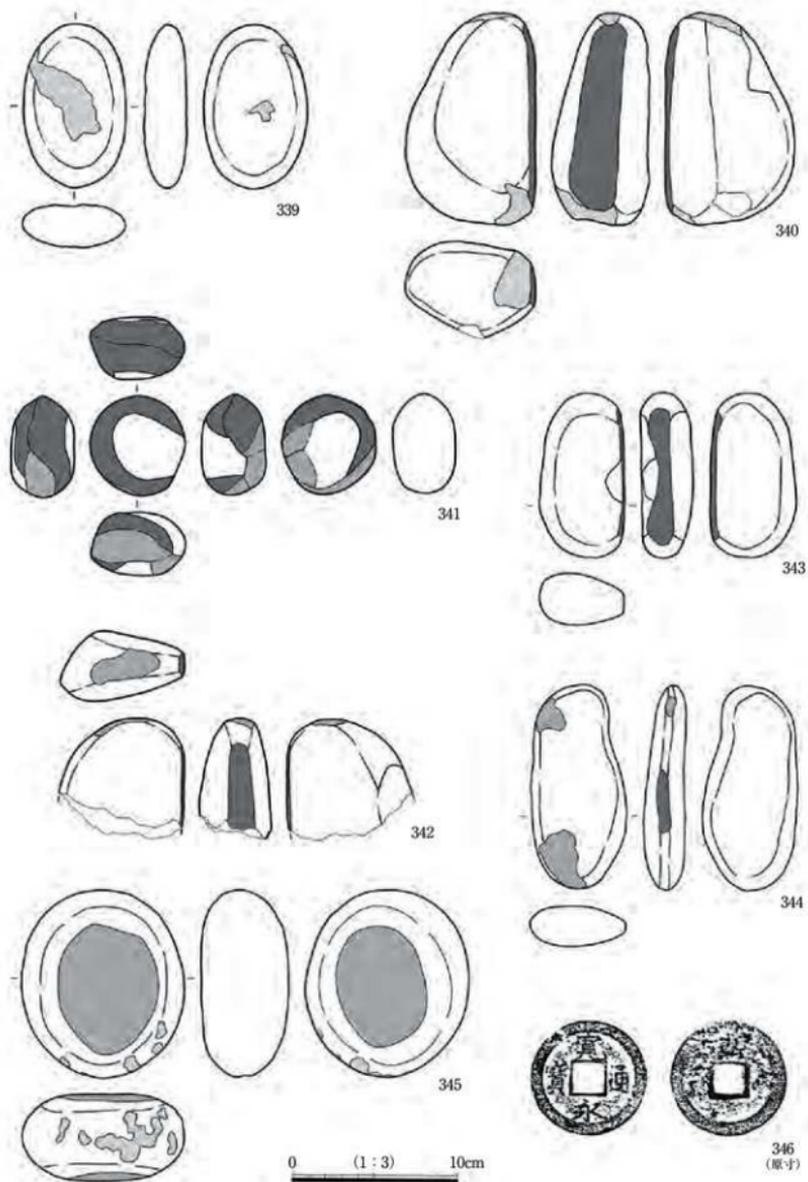


336



0 (1:3) 10cm

第36図 出土遺物20(石器)



第37図 出土遺物21(石器・銭貨)

第4表 平成27年度調査掲載遺物一覧表1

掲載 番号	出土 位置	器種	残存 部位	外面文様	内面 調整	外面色調	焼成	胎土 混入物	時期・ 型式	付着物	備考
1	4号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	5丁波濤波瀾, 模印4本丸組組	ナデ	褐色	やや 不良	白、砂	大木2b	内 -灰化物	
2	4号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	模印, 模印2R	ナデ	にぶい 黄褐色	不良	白	前期前期	なし	
3	4号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	口唇・縄文帯体(口唇)(1号室 縄文帯体(口唇)1R-9a)	ナデ	明褐色	やや 不良	白、砂	中期?	なし	
4	4号室 六瓦室	椀 深鉢	胴	模印波紋(結東第1種 1R-9)	ナデ (2丁半)	明褐色	やや 不良	白、砂	前期前期 (大木2a?)	内 -灰化物	
5	4号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	口縁・無文帯, 模印4本丸組組	ナデ	黒褐色	やや 不良	白(多) 砂	前期前期 (大木2b・白灰)	外 -灰化物	
6	4号室 六瓦室	椀 深鉢	胴	模印2R	ナデ	にぶい 褐色	やや 不良	白、雲母	後期	内 -灰化物	
7	4号室 六瓦室	埋土 下段	深鉢	何位R	ナデ (2丁半)	褐色	やや 良好	白	前期	外 -灰化物	
8	4号室 六瓦室	床面 直上	深鉢	沈瀬(模印, 波巻文), 何位R	ナデ	にぶい 褐色	やや 良好	白	後期	なし	
9	4号室 六瓦室	椀 深鉢	胴	沈瀬(波巻文)	ナデ	黒褐色	やや 良好	白、砂	後期	なし	
10	4号室 六瓦室	椀 深鉢	胴	沈瀬(模印), 何位R	ナデ	褐色	やや 良好	白	後期	なし	
11	4号室 六瓦室	床面 直上	深鉢	沈瀬(模印, 波巻文) 模印(波巻文)非結東, 何・1R0	ナデ	明褐色	良好	白	後期	なし	
12	4号室 六瓦室	椀 深鉢	胴	沈瀬(平行)	ナデ	にぶい 黄褐色	やや 不良	白、砂	前期前期	なし	
13	4号室 六瓦室	床面 直上	深鉢	沈瀬(弧状), 模印R	ナデ	褐色	良好	白	後期	なし	
14	4号室 六瓦室	床面 直上	深鉢	底 何位・模印R	ナデ	にぶい 黄褐色	不良	白	後期	内・外 -灰化物	
15	4号室 六瓦室	埋土 中	深鉢	口縁 模印R	ナデ	にぶい 黄褐色	やや 不良	白、砂	後期	外 -灰化物	輪郭痕
16	2号室 六瓦室	埋土 中	深鉢	山形突起, 何位R	ナデ	にぶい 黄褐色	やや 良好	白	後期?	内・外 -灰化物	
17	2号室 六瓦室	埋土 中	壺 口縁	沈瀬(平行), 模印R	ナデ	にぶい 黄褐色	やや 不良	白、雲母	後期	なし	
18	2号室 六瓦室	埋土 中	深鉢	沈瀬(平行)	ナデ	にぶい 褐色	良好	白	後期	なし	
19	2号室 六瓦室	埋土 中	深鉢	山形口縁, 無文	ナデ	にぶい 黄褐色	やや 良好	白、雲母	後期	なし	
20	3号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	口唇・波帯・何少目, 模印波紋(結東第1種R)-9R)	ナデ	にぶい 黄褐色	やや 不良	白、砂	白灰	外 -灰化物	縄跡含
21	3号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	何位R	ナデ	にぶい 黄褐色	やや 不良	白	前期	外 -灰化物	
22	3号室 六瓦室	床面 直上	深鉢	口唇・何少目 模印波紋(結東第1種R, 9R) 何宛, 模印(多段波帯)何位R1D	ナデ	褐色	やや 不良	白、砂 雲母	白灰	内 -灰化物	縄跡含
23	3号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	附加条3種R1, R0	ナデ	褐色	不良	白	前期前期	なし	縄跡含
24	3号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	沈瀬(平行, 斜行), 何宛・沈瀬(何位)	ナデ	黒褐色	やや 不良	白	早稲26a	外 -灰化物	縄跡含
25	3号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	模印波紋(結東第1種, R)-1R0	ナデ	黒褐色	やや 不良	白	前期前期	内 -灰化物	縄跡含
26	3号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	口唇・波帯・沈瀬, 模印R1-沈瀬	ナデ	黒褐色	やや 不良	白(多) 雲母	白灰	なし	
27	3号室 六瓦室	椀 深鉢	口縁	口唇・波帯・何少目, 模印(多段波帯)何位R1D	ナデ	明黄褐色	不良	白	後期	内 -灰化物	
28	1号室 六瓦室	埋土 下段	深鉢	口縁 模印4本丸組組R, R0	ナデ	黄褐色	やや 不良	白	白灰	外 -灰化物	縄跡含, 磨蝕孔
29	1号室 六瓦室	埋土 下段	深鉢	山形小突起, 口唇・何少 目, 模印(何位)+何少目, 模印4本丸組組	ナデ	明褐色	やや 不良	白、砂	大木2b・白灰	なし	縄跡含
30	1号室 六瓦室	埋土 下段	深鉢	小突起口縁, 縄文帯体(何位)(弧状)(R1), 模印R1	ナデ	にぶい 褐色	やや 良好	白、砂	後期	なし	
31	1号室 六瓦室	埋土 下段	深鉢	模印(早稲曲条体5種)	ナデ	にぶい 褐色	不良	白、砂 雲母	大木2a	なし	
32	1号室 六瓦室	埋土 下段	深鉢	模印波紋(非結東, 何・1R0)	ナデ	にぶい 黄褐色 褐色	やや 不良	白、砂	前期前期 (大木)	内 -灰化物	縄跡含
33	6号室 六瓦室	埋土 上段	深鉢	附加条R1+何	ナデ	にぶい 褐色	やや 不良	白	前期前期	なし	磨蝕孔, 縄跡含
34	6号室 六瓦室	埋土 下段	深鉢	何宛(平行, 斜行, 弧状, 小突起) 縄文帯体(何位) 模印波紋(結東第1種何少目, 何宛(何半竹管))	ナデ 2丁半	にぶい 黄褐色	やや 不良	白、砂 雲母	内層上段?	なし	
35	6号室 六瓦室	埋土 上段	深鉢	模印4本丸組組	ナデ	褐色	やや 不良	白、砂	前期前期	内 -灰化物	縄跡含

掲載 番号	出土 層位	器種	残存 部位	外面文様	内面 調整	外面色調	焼成	胎土 混人物	時期・ 型式	付着物	備考
36	6号室 六瓦室	理土 下位	深鉢	口縁	横穴4本丸線取	褐色	やや 不具	白	前期前葉	内 -灰化物	織跡含
37	6号室 六瓦室	理土 上位	深鉢	口縁	斜位附加条回紋(L,R)	褐色	不具	白	前期前葉 (大木)	内 -灰化物	
38	6号室 六瓦室	理土 下位	深鉢	口縁	台形穴口縁、馬蹄形穴(底)取 海帯(台形穴、斜位)・縄文帯体止痕(L,R)	ナゾ	黒褐色	やや 不具	白	河内土器	なし
39	6号室 六瓦室	理土 上位	深鉢	口縁	口沿・海帯体取付・縄文帯体止痕(L,R) 海帯(平行、斜位)・縄文帯体止痕(L,R) 馬蹄形穴(底)取付、縄文帯体止痕(横位、斜位)	ナゾ	にぶい・褐色 にぶい・褐色	やや 不具	白、砂	河内土器	外 -灰化物
40	6号室 六瓦室	理土 中	深鉢	口縁 ～底	台形穴口縁、馬蹄形穴(底)取 海帯(縄文帯体止痕(L,R))、海帯(平行、斜位) ・縄文帯体止痕(L,R)、横位附加条回紋(L,R)	ナゾ	明褐色	やや 良好	白、砂	河内土器	内・外 -灰化物
41	5号室 六瓦室	埋設土 器	深鉢	口縁 ～底	山形突起(4つ)、横位取付(結束第1種取付)	ナゾ	褐色	やや 良好	白	中期前葉	なし
42	5号室 六瓦室	理土 上位	深鉢	口縁	口沿・短み目、斜位星輪条体第1類(L,R)	ナゾ	にぶい・褐色	やや 良好	白、砂	白塵	なし
43	5号室 六瓦室	理土 上位	深鉢	口縁	縦位・斜位取	ナゾ (ミガキ)	にぶい・黄褐色	やや 不具	白	後葉?	外 -灰化物
44	5号室 六瓦室	理土 下位	深鉢	口縁 ～底	口沿・海帯・縄文帯体止痕(L,R) 山形突起(台形穴付取、斜位)・縦位・横位 ・縄文帯体止痕(L,R)、馬蹄形穴(底)取付	ナゾ	にぶい・褐色	やや 不具	白、砂	河内土器	なし
45	20号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	縦位・斜位取	ナゾ	にぶい・黄褐色	やや 不具	白(多) 砂	後葉	なし
46	18号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	口沿・短み目、横位星輪条体(L,R)	ナゾ	暗褐色	やや 不具	白、砂	白塵?	なし
47	20号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	口沿・縄文帯体止痕(L,R)、横位、斜位取	ナゾ	黒褐色	やや 不具	白、砂	中期前葉	なし
48	22号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	横位取	ナゾ	黄褐色	やや 良好	白(多) 砂	中期?	なし
49	22号 土坑	理土 中	深鉢	胴	沈線(横位)	ナゾ	明褐色	やや 良好	白、砂	後葉	なし
50	22号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	横位取	ナゾ	黒褐色	やや 不具	白 黄塵(多)	中期?	なし
51	22号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	横位・縄文帯体止痕(L,R)、斜位取	ナゾ	黒褐色	やや 良好	白、砂	後葉	なし
52	22号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	海帯(平行・弧状)	ナゾ	にぶい・褐色	やや 良好	白、砂	後葉初期～ 前葉	なし
53	23号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	斜位取	ナゾ	黒褐色	やや 不具	白	後葉?	内・外 -灰化物
54	23号 土坑	理土 中	深鉢	胴	沈線(弧状)、横位取	ナゾ	褐色	やや 良好	白	後葉	外 -灰化物
55	23号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	斜位取、沈線(斜位)、斜位取	ナゾ	にぶい・褐色	やや 良好	白	後葉	なし
56	23号 土坑	理土 中	深鉢	胴	弧状(内凹)、海帯(平行、弧状、溝垂文)	ナゾ	褐色	やや 良好	白	後葉初期～ 前葉	外 -灰化物
57	3号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	無文帯、縦位取	ナゾ	にぶい・黄褐色	不具	白	前期前葉	内・外 -灰化物
58	3号 土坑	理土 中	深鉢	底	附加制取(L+凸)	ナゾ	黄褐色	不具	白 砂(少)	前期前葉	なし
59	2号 土坑	理土 中	深鉢	口縁	縦位取	ナゾ	褐色	やや 不具	白、砂	後葉	なし
60	1A2	II層	深鉢	口縁 ～胴	無文、ナゾ	ナゾ	黒褐色	やや 良好	白 砂(多)	後葉?	なし
61	1A2	II層	深鉢	口縁	横位取付(結束第2取付)	ナゾ	明褐色	やや 良好	白	後葉	なし
62	1A3	II層	深鉢	口縁	横位取	ナゾ	にぶい・黄褐色	不具	白	前期前葉	なし
63	1A4	II層	深鉢	口縁	沈線(平行・弧状付、沈線取(縦位取))	ナゾ	にぶい・黄褐色	やや 良好	白、 砂(少)	後葉	なし
64	1A3	II層	深鉢	口縁	縦位取	ナゾ	にぶい・黄褐色	やや 良好	白 砂(少)	後葉	外 -灰化物
65	1A2	II層	深鉢	口縁 ～胴	横位取	ナゾ	黒褐色	やや 良好	白 砂(多)	後葉	外 -灰化物
66	1A4	II層	蓋	口沿取・短み目、沈線(平行、斜位)	ナゾ	にぶい・褐色	やや 不具	白	後葉	なし	
67	1A3	II層	小型 土器	口縁 ～胴	無文	ナゾ	にぶい・黄褐色	不具	白	後葉	なし
68	1A4	検出 面	深鉢	口縁	表穴口縁、多数結節取	ナゾ	にぶい・褐色	やや 不具	白、砂	白塵	なし
69	1A4	検出 面	深鉢	口縁	海帯・斜位取、沈線(平行)	ナゾ	褐色	やや 良好	白(多)	後葉初期	なし
70	1A4	検出 面	深鉢	口縁	無文(ヘラナゾ)	ナゾ	褐色	やや 良好	白	後葉	なし

## 2 検出遺構と出土遺物

掲載 番号	出土 位置	器種	残存 部位	外面文様	内面 調整	外面色調	焼成	胎土 混入物	時期・ 型式	付着物	備考
71	IA4	1層 深鉢	口縁	口縁直上1.5割目, 沈線(平行, 横四) (沈線跡: 横位)	ナデ (ミガキ)	黒褐色	やや 良好	白(多) 砂	後期	なし	
72	IA4	1層 小型 鉢	口縁 ~底	無文	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白	後期	内 - 装 飾 物	
73	IA4	1層 小型 鉢	底	無文(幅狭いミガキ)	ナデ	明褐色	やや 不良	白	後期	なし	底面外面 ナデ
74	IA4	1層 深鉢	胴	沈線(通身文, 横四), 縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	不良	白	後期	なし	
75	IA4	1層 深鉢	底	縦位	ナデ	明褐色	不良	白	後期	なし	底面 - 調 代 は 底
76	IA4	1層 深鉢	口縁	無文	ナデ	黒褐色	やや 良好	白, 雲母	後期	外 - 装 飾 物	
77	IA4	1層 深鉢	口縁	無文並, 沈線(平行), 縦位	ナデ	黒褐色	やや 良好	白	後期前期	なし	
78	IA4	1層 深鉢	口縁	貼付(円形), 隆帯, 沈線(横四), 縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 不良	白	後期	なし	白色粘土状 のものが付着
79	IA4	1層 深鉢	胴	沈線(平行, 横四), 沈線跡(横位)	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白	後期	なし	
80	IA4	1層 深鉢	口縁	口縁加肥厚, 横位	ナデ (ミガキ)	にぶい 黒褐色	やや 良好	白	後期	外 - 装 飾 物	
81	IA4	1層 深鉢	口縁 ~胴	縦位, 縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 不良	白, 砂	後期	内・外 - 装 飾 物 (少)	
82	IA4	1層 深鉢	胴部 ~底	縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白, 砂	後期	なし	やや上げ底
83	IA4	1層 深鉢	口縁	縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白, 砂	後期	外 - 装 飾 物	
84	IA4	1層 深鉢	口縁	縦位	ナデ (ミガキ)	黒褐色	やや 良好	白(多)	後期	なし	
85	IA4	1層 深鉢	口縁	口縁-肥厚, 縦位	ナデ (ミガキ)	明赤褐色	やや 良好	白, 砂	後期	なし	外面全体が 赤褐色で ある
86	IA4	1層 深鉢	胴	沈線(平行, 三角状), 縦位	ナデ (ミガキ)	黒褐色	やや 良好	白, 砂	後期前期	なし	
87	IA4	1層 深鉢	胴部 ~底	無文	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白, 砂	後期	内 - 装 飾 物	底面 - 木 葉 は 底
88	IA4	1層 小型 深鉢	底	縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白	後期	なし	底面外面 ナデ
89	IA4	1層 深鉢	胴	多条加沈線	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白(少) 雲母	後期	なし	
90	IA4	1層 深鉢	胴	多条加沈線	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白, 砂	後期	なし	
91	IA4	II層 深鉢	底	縦位	ナデ	明褐色	やや 不良	白	後期	なし	底面外面 - 木 葉 は 底
92	IA4	II層 深鉢	胴部 ~底	縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白, 砂	中期	なし	底面 - 木 葉 は 底
93	IA4	II層 深鉢	底	縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 不良	白, 砂	後期	外 - 装 飾 物	底面 - 木 葉 は 底?
94	IA4	II層 深鉢	底	縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	不良	白, 砂	後期	なし	
95	IA4	II層 深鉢	口縁	縦位, 縦位	ナデ	褐色	やや 良好	白	後期前期	なし	
96	IA4	II層 深鉢	口縁	横位(斜付(赤褐色), 丸)	ナデ (ミガキ)	にぶい 黒褐色	やや 不良	白(多) 砂	後期	内・外 - 装 飾 物	内面黒色 (ミガキ調整)
97	IA4	II層 深鉢	口縁	縦位(扇形)跡(丸)	ナデ	明褐色	良好	白	後期	なし	
98	IA4	II層 深鉢	口縁	縦位	ナデ	褐色~ 黒褐色	やや 良好	白, 砂	後期	なし	
99	IA4	II層 深鉢	口縁	口唇-刻み目, 沈線(平行)	ナデ	明褐色	やや 良好	白, 砂	後期	なし	
100	IA4	II層 深鉢	口縁	縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白 砂(少)	後期	なし	
101	IA4	II層 深鉢	胴	沈線(平行)	ナデ	褐色	やや 良好	白	後期	なし	
102	IA4	II層 深鉢	口縁	縦位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白	後期	なし	
103	IA4	II層 深鉢	口縁	口唇-刻み目, 横位	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 不良	白	前期前期	なし	
104	IA4	II層 深鉢	胴	沈線(斜行), 沈線跡(斜位)	ナデ	黒褐色	やや 良好	白	後期	なし	
105	IA4	II層 深鉢	胴	沈線(縦位平行, 扇形)	ナデ	にぶい 黒褐色	やや 良好	白, 砂	後期	なし	



## 2 検出遺構と出土遺物

掲載番号	出土位置	器種	残存部位	外部文様	内面調整	外面色調	焼成	胎土・泥人物	時期・型式	付着物	備考	
141	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	口縁	横位取	ナズ	黒褐色	良好	白	後葉	なし	
142	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	口縁	口唇・縄文彫刻(正位取)	ナズ	黒褐色	やや良好	白(多)	後葉	内・外-炭化物	内-輪縁痕
143	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	胴	沈刷(平行)	ナズ	にぶい・黄褐色	やや不具	白	後葉	なし	
144	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	口縁	横・横位取、蓋彫文	ナズ	黒褐色	やや不具	白、砂	前期前葉	外-炭化物	繊維含
145	IAⅠb	Ⅱ層	深鉢	口縁	斜位取	ナズ	にぶい・黄褐色 ～にぶい・黄褐色	やや不具	白、砂	後葉	なし	
146	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	口縁	口唇・刻み目、横位取取(非結束取、取)	ナズ	にぶい・黄褐色 褐色	やや不具	白、砂	白座	内-炭化物	
147	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	口縁	口唇・刻み目、横位取取(非結束取)LD	ナズ	褐色	やや良好	白	白座	外-炭化物(少)	
148	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	胴	沈刷(平行)、横位取	ナズ	褐色	良好		後葉	なし	
149	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	口縁	口唇・刻み目	ナズ	にぶい・黄褐色	やや良好	白	後葉	なし	輪縁痕
150	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	口縁	横位取	ナズ	黒褐色	やや不具	白	前期前葉	なし	繊維含
151	IAⅠ	Ⅱ層	深鉢	胴	横位取(斜位)	ナズ	にぶい・黄褐色	やや不具	白(多)	後期前葉	なし	
152	IAⅠc	Ⅱ層	深鉢	口縁	横位取取(非結束取、取)	ナズ	にぶい・黄褐色	やや不具	白	前期前葉	なし	
153	IAⅠc	Ⅱ層	深鉢	口縁	無文	ナズ	黒褐色	やや良好	白、雲母	後葉	なし	輪縁痕
154	IAⅠc	Ⅱ層	深鉢	口縁	縦位取(輪縁条体第1取)R	ナズ	黒褐色	やや良好	白、雲母	後葉	なし	
155	IAⅠc	Ⅱ層	深鉢	口縁	縄文彫刻(口唇・横位取)	ナズ	にぶい・黄褐色	不具	白、雲母	前期前葉	なし	繊維含
156	IAⅠf	Ⅱ層	深鉢	口縁	表状口縁、横位取取(結束取)LD-LR	ナズ	にぶい・黄褐色	やや良好	白、砂	前期前葉	なし	繊維含
157	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	胴	横位取(斜位、横位、幾何学)	ナズ 土質劣	にぶい・黄褐色	やや不具	白(多) 雲母	早期中葉	なし	丸塔部に近い
158	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁	口唇・海帯、縦位取(輪縁条体第1取)R	ナズ	浅黄褐色	不具	白	後葉	なし	
159	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	底	縦位取	ナズ	にぶい・黄褐色	やや良好	白	前期	なし	底面外面 -網代取痕
160	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	底	縦位取	ナズ	褐色	やや良好	白、雲母	後葉	なし	底面下面 -木葉取痕
161	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	胴～底	斜位取	ナズ	にぶい・黄褐色 ～にぶい・黄褐色	やや良好	白、砂	後葉	外-炭化物	底面外面 -網代取痕
162	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁	縄文彫刻(口唇・横位取(LR)) 海帯・縄文彫刻(正位取)LD、横位取	ナズ	黒褐色	やや良好	白(多)	後葉	内・外-炭化物	
163	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁	横位取	ナズ	にぶい・黄褐色	不具	白	後葉	外-炭化物	
164	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	胴	斜位取(輪縁条体第1取)R	ナズ	にぶい・黄褐色	不具	白 砂(少)	後葉	なし	
165	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁	山形小突起口縁、横位取取(斜位取)R	ナズ	にぶい・黄褐色	やや不具	白、砂	白座	なし	繊維含み
166	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁	海帯・縄文彫刻(正位取)LD、沈刷(斜位、縦位)	ナズ 土質劣	にぶい・黄褐色	やや不具	白、雲母	後葉	内・外-炭化物	
167	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁	沈刷(平行、弧状、斜行)、沈刷間に縦位取	ナズ	にぶい・黄褐色	やや良好	白、砂	後葉	なし	
168	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	胴	横位取(平行)	ナズ	浅黄褐色	やや良好	白	後葉	なし	
169	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁	沈刷(平行、弧状)	ナズ	にぶい・黄褐色	良好	白、砂	後葉	なし	
170	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁～胴	横位・斜位取	ナズ	にぶい・黄褐色	やや良好	白、砂	前期前葉	外-炭化物(少)	繊維含み
171	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁	横位取	ナズ	にぶい・黄褐色	やや良好	白、雲母	前期前葉		繊維含
172	IAⅡ	Ⅱ層	小型土器	胴部～底	縄文(横位取)		にぶい・黄褐色			後葉		繊維含
173	IAⅡ	Ⅱ層	深鉢	口縁～胴	小表状口縁、無文	ナズ	にぶい・黄褐色	やや不具	白、砂	後葉?	外-炭化物	
174	IAⅡm	Ⅱ層	深鉢	口縁	横突取、沈刷(平行、内凹)、縦位斜位取	ナズ	明褐色	やや良好	白、砂	後葉初期	なし	
175	IAⅡm	Ⅱ層	深鉢	底	無文(ナズ、ケツリ)	ナズ	黄褐色	やや良好	白	後葉	内-炭化物	底面外面 -網代取痕

掲載 番号	出土 位置	器種	残存 部位	外面文様	内面 調整	外面色調	焼成	胎土 混人物	時期・ 型式	付着物	備考
176	IA9a	I 瓶	鉢口縁	口縁隆起(外反), 直上に縄文彫体印痕(L)O, 沈線, 沈線(平行)	ナゲ	黒褐色	やや 良好	白	後葉	なし	
177	IA9a	II 瓶	深鉢口縁	内面打文(斜線)でんすり, 小突起口縁, 高倉(沈線)平行, 溝文(L), 沈線間に縦位の多支溝	ナゲ	にぶい黄褐色	やや 良好	白, 砂	富沢	なし	
178	IA9a	II 瓶	深鉢口縁 ~制	斜位瓦, 附加文(L)O-L	ナゲ	にぶい黄褐色	やや 不具	白, 雲母 砂	後葉?	外 -炭化物	
179	IA9a	II 瓶	深鉢口縁	口縁-高倉-堀込(斜位), 縄文彫体印痕(L)O, 堀込(高倉), 高倉(沈線), 高倉(沈線)間に縦位の多支溝	ナゲ ヒツギ	にぶい黄褐色	やや 不具	白, 雲母 砂	内葉上葉?	内 -炭化物	
180	IA9a	II 瓶	深鉢口縁 ~制	斜位瓦	ナゲ	明褐色	やや 良好	白, 砂	後葉	なし	内面の色調 ~黒褐色
181	IA12a	II 瓶	深鉢口縁	横位半輪体(結実第1A)印(L)O	ナゲ	黒褐色~ にぶい黄褐色	やや 良好	白, 雲母	白葉	なし	補修孔
182	IA12	II 瓶	深鉢口縁 ~制	斜位附加条(堀込)印(L)O	ナゲ	黒褐色~ にぶい黄褐色	やや 不具	白	大木?	内 -炭化物	補修孔
183	IA12	II 瓶	深鉢口縁	口縁に網交列(原体の先端)附加条(L)O-L・印(L)Oによる非結実印状	ナゲ	にぶい黄褐色	良好	白(多)	大木?	外 -炭化物	
184	IA12a	II 瓶	深鉢口縁	口縁に網交列(結実第1種)印(L)O	ナゲ	にぶい黄褐色	不良	白 雲母(少)	前期前葉	なし	織跡含
185	IA12a	II 瓶	深鉢口縁	横位印状(結実第1種)印(L)O	ナゲ	にぶい黄褐色	不良	白, 雲母	前期前葉	なし	織跡含
186	IA12a	II 瓶	深鉢口縁 ~底	縦位瓦	ナゲ	明褐色	良好	白	後葉	内・外 -炭化物	
187	IA12a	II 瓶	深鉢口縁	斜位印状(結実第1種)印(L)O	ナゲ	暗褐色	不良	白	前期前葉	なし	織跡含, 結実瓦 底? 213, 215 同?
188	IA12a	II 瓶	深鉢口縁	附加条印	ナゲ	にぶい黄褐色	不良	白, 雲母	前期	なし	織跡含
189	IA12a	II 瓶	深鉢口縁	沈線(縦位)平行, 横位(内)沈線(縦位)印	ナゲ	暗褐色	やや 良好	白 砂(少)	大木?	なし	炭化?
190	IA13	II 瓶	深鉢口縁 ~制	小突起, 斜位瓦	ナゲ	にぶい黄褐色	不良	白 砂(少)	前期前葉	なし	補修孔
191	IA14	II 瓶	深鉢口縁 ~底	横位瓦	ナゲ	にぶい黄褐色	不良	白	前期	なし	結実縄文彫体 山印(L)O 織跡含
192	IA14	II 瓶	深鉢口縁	斜位附加条(堀込)印(L)O	ナゲ	黒褐色	不良	白	前期前葉	なし	織跡含
193	IA14	II 瓶	深鉢口縁	口縁-堀込, 横位附加条(印)	ナゲ	明黄褐色	良好	白	白葉	なし	補修孔
194	IA14	II 瓶	深鉢口縁	沈線(平行), 沈線間に縦位のL	ナゲ	にぶい黄褐色	やや 良好	白, 砂	後葉前葉	内・外 -炭化物	
195	IA14	II 瓶	深鉢口縁	山形突起口縁, 口縁-堀込 横位印状(非結実)印(L)O	ナゲ	にぶい黄褐色	良好	白, 砂	白葉	外 -炭化物	
196	IA14	II 瓶	深鉢口縁	沈線(平行), 網交列, 縦位瓦	ナゲ	黒褐色~ にぶい黄褐色	不良	白, 砂	早稲田6a	なし	織跡含
197	IA15a	II 瓶	深鉢口縁	横位沈線文	ハケズ状 ナゲ	にぶい黄褐色	やや 不具	白, 砂	早稲田6a	なし	213, 215 同-縦体
198	IA15a	II 瓶	深鉢口縁	横位沈線文	ハケズ状 ナゲ	にぶい黄褐色	やや 不具	白, 砂	早稲田6a	内 -炭化物	213, 214 同-縦体
199	IA15a	II 瓶	深鉢口縁	横位沈線文	ナゲ (ハケズ)	にぶい黄褐色	やや 不具	白 砂(少)	早稲田6a	なし	214, 215 同-縦体
200	IA15b	I 瓶	深鉢口縁	目録沈線文	ナゲ	褐色	良好	白	早稲田葉	なし	
201	IA15b	I 瓶	深鉢口縁	目録沈線文	ナゲ	褐色	良好	白	早稲田葉	なし	実底に 近い部分
202	IA15b	I 瓶	深鉢口縁	目録沈線文	ナゲ	明褐色	やや 不具	白, 砂	早稲田葉	なし	
203a	IA15	I 瓶	深鉢口縁	斜位瓦	ナゲ	にぶい黄褐色	やや 不具	白, 砂	中葉	内・外 -炭化物	内外-輪体痕
203b	IA15	I 瓶	深鉢口縁	縦位瓦	ナゲ	にぶい黄褐色	不良	白, 砂	中葉	なし	底面付着 (葉の葉付)
204	IA15	I 瓶	深鉢口縁	山形突起口縁, 網交文 沈線(堀込), 横位瓦, 沈線間に縦位のL	ナゲ	にぶい黄褐色	やや 良好	白, 砂	後葉	外 -炭化物?	
205	IA15	I 瓶	深鉢口縁	横位印状(非結実)印(L)O	ナゲ	明黄褐色	やや 良好	白, 雲母 砂(多)	前期	内 -炭化物	
206	IA15	I 瓶	小型土器	堀込(L)O?	ナゲ	黄褐色			後葉	なし	
207	IA15	I 瓶	深鉢口縁	台形突起口縁, 縄文彫体印痕(斜位), 横位(印)印(L)O+印(L)O 隆起(三角状), 縦位, 横位, 縄文彫体印痕(L)O	ナゲ	にぶい黄褐色	やや 良好	白, 砂	内葉上葉?	なし	
208	IA15	I 瓶	深鉢口縁	口縁-堀込, 小突起, 横位印状(非結実)印(L)O	ナゲ	にぶい黄褐色	やや 不具	白	白葉	内・外 -炭化物	
209	IA15	I 瓶	深鉢口縁	横位印状(結実第1種)印(L)O	ナゲ	黒褐色	不良	白, 雲母	前期前葉	なし	織跡含
210	IA15	I 瓶	深鉢口縁	横位印状(結実第1種)印(L)O	ナゲ	にぶい黄褐色	不良	白, 雲母	前期前葉	なし	

## 2 検出遺構と出土遺物

掲載 番号	出土 位置	器種	残存 部位	外面文様	内面 調整	外面色調	焼成	胎土 混入物	時期・ 型式	付着物	備考
211	IA15a	I 層 深鉢	口縁 横位片		ナデ ミガキ	黒褐色	やや 良好	白	後期	なし	
212	IA15a	I 層 深鉢	口縁 沈積、沈積物(横位片)		ナデ ミガキ	黄褐色	やや 良好	白	後期	なし	
213	IA15a	I 層 深鉢	胴	沈積(遺棄文)	ナデ	黒褐色～ にがい黄褐色	やや 不良	白	前期前期	なし	
214	IA15a	I 層 深鉢	胴	沈積(縦位平行・横位)、縦位・斜位片	ナデ	黒褐色	やや 良好	白	後期	灰化物(少)	
215	IA15a	I 層 深鉢	口縁 ～ 胴	表皮口縁、沈積物(斜位、横位片)、 白(遺棄 遺文) 沈積(平行・遺文、遺棄文)	ナデ	にがい黄褐色	やや 不良	白、雲母 砂(少)	前期	灰 -灰化物 (少)	
216	IA15a	I 層 深鉢	胴	縦位片	ナデ	にがい黄褐色	やや 不良	白	後期	-灰化物 (少)	輪縁短少破害
217	IA15a	I 層 深鉢	胴	縦位片	ナデ	にがい黄褐色	やや 不良	白 不混入	後期	-灰化物 (少)	輪縁短少破害
218	IA15a	I 層 深鉢	口縁 ～ 胴	縦位片	ナデ	にがい黄褐色	やや 良好	白(多)	後期	なし	
219	IA15a	I 層 深鉢	口縁 ～ 胴	無文、(木丸組紐)	ナデ	黒褐色 明褐色	やや 不良	白 砂(多)	前期前期 (白磁)	口縁上縁 -灰化物	
220	IA15a	I 層 小型 土器	胴部 ～ 底	無文	ナデ	にがい黄褐色	やや 不良	白	後期	なし	底面外面 -ナデ
221	IA15a	I 層 深鉢	口縁 ～ 胴	無文	ナデ (ミガキ)	褐色	良好	白	後期	なし	輪縁短
222	IA15a	I 層 深鉢	口縁	沈積(平行・縦位)表皮・横位、斜位片	ナデ ミガキ	黄褐色	やや 良好	白、砂	大木5c	なし	
223	IA15a	I 層 深鉢	口縁	沈積(平行・遺棄文)、縦位片	ナデ	黒褐色	やや 良好	白(多)	前期前期	なし	
224	IA15a	I 層 深鉢	胴	沈積(平行・遺棄文)	ナデ	暗褐色	やや 良好	白(多) 雲母	前期前期	なし	
225	IA15a	I 層 深鉢	口縁	縦位片	ナデ	にがい黄褐色	良好	白、砂	後期	なし	
226	IA15a	I 層 深鉢	口縁	山形突起 口縁内側に以て灰層帯 (沈積 沈積物、横位) 沈積で覆われた部分に縦位片	ナデ	にがい黄褐色	やや 不良	白 金雲母 (多)	後期	なし	
227	IA15a	II 層 深鉢	口縁	縄文型係(正面片)、鳥跡形穴(縦位) 隆帯(横位)、斜位・縄文型係(縦位)	ナデ	黒褐色	やや 不良	白、砂	前期土器	なし	
228	IA15a	II 層 深鉢	口縁	表皮口縁、横位片・沈積物(遺棄文)	ナデ	にがい黄褐色	不良	白	最古	内・外 -灰化物	
229	IA15a	II 層 深鉢	口縁	口唇・縄文型係(正面片) 縄文型係(縦位平行・斜位片)	ナデ	にがい黄褐色	やや 不良	白	前期	なし	内面上部口
230	IA15a	II 層 深鉢	口縁	横位片	ナデ	褐色	やや 不良	白	前期	外-灰化物	
231	IA15a	II 層 深鉢	口縁	口唇・縄文型係(正面片)、斜位附加条(縦位)	ナデ	黒褐色	やや 良好	白、砂	前期	なし	輪縁短
232	IA15a	II 層 深鉢	口縁	横位・細組紐文	ナデ	黒褐色	やや 良好	白、雲母 ?、灰母?	白磁		
233	IA15a	II 層 深鉢	口縁	横位・多段筋帯(横位)	ナデ	黄褐色	やや 不良	白、砂 雲母	白磁	内・外 -灰化物	
234	IA15a	II 層 深鉢	口縁	横位・多段筋帯(横位)	ナデ	褐色	不良	白(多) 雲母	前期	内-灰化物 外-灰化物 (少)	繊維含
235	IA15a	II 層 深鉢	底	縦位片	ナデ	褐色	やや 良好	白	後期?	なし	底面 -ナデ付着
236	IA15a	II 層 深鉢	口縁 ～ 胴	山形突起 横位附加(結束部1輪帯・L形)	ナデ	暗褐色	やや 不良	白、砂	前期前期	なし	
237	IA15a	II 層 深鉢	口縁	横位・多段筋帯(横位)	ナデ	黒褐色 明黄褐色	やや 不良	白	前期前期	外- 灰化物	繊維含
238	IA15a	II 層 深鉢	口縁	横位附加(結束部・L形)	ナデ	にがい黄褐色	やや 不良	白(多) 砂、雲母	前期前期	なし	繊維含
239	IA15a	II 層 深鉢	口縁	表皮口縁、沈積(平行・山形、縦位) 沈積物(縦位)で充填	ナデ	にがい黄褐色	不良	白(多) 砂、雲母	前期前期	なし	
240	IA17a	II 層 深鉢	口縁	山形突起口縁、隆帯(縦位)、沈積(平行)	ナデ	暗褐色	やや 良好	白(多) 砂	後期	なし	
241	IA17a	II 層 深鉢	口縁	口唇・突起、突起列(横位・平行)	ナデ	にがい黄褐色	不良	白	前期前期	なし	繊維含
242	IA17a	II 層 深鉢	口縁	横位・多段筋帯(横位)	ナデ	にがい黄褐色	やや 不良	白	前期前期	なし	
243	IA17a	II 層 深鉢	口縁	縦位片	ナデ	暗褐色	やや 不良	白	前期前期	なし	
244	IA17a	II 層 深鉢	口縁	口縁・横位、横位・多段筋帯(横位)	ナデ	にがい黄褐色	やや 良好	白(多) 砂	白磁	なし	
245	IA17a	II 層 深鉢	口縁	横位・細組紐(全体)	ナデ	暗褐色	やや 不良	白	前期前期	外- 灰化物	繊維含

掲載番号	出土位置	出土層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調	焼成	胎土混入物	時期・型式	付着物	備考
246	IA17	II層	深鉢	口縁~側	口縁~側目、縦文縄文帯(Ⅰ段)・(Ⅱ段) 隆帯・縄文帯(Ⅰ段)・(Ⅱ段)、高脚部(Ⅰ段)・(Ⅱ段)	ナダ	にぶい・黄褐色	やや不具合	白、砂	前期前期b	なし	
247	IA17	II層	深鉢	口縁~側	小波状口縁、横文Ⅰ段	ナダ	暗褐色 黄褐色	やや良好	白	前期	なし	織跡含
248	IA17	II層	深鉢	胴~底	比羅(南内?)、比羅の中横文Ⅰ段で光焼	ナダ	褐色	やや不具合	白、砂	前期前期	なし	
249	IA18	I層	深鉢	口縁	横文Ⅰ段	ナダ	褐色	不具合	白	前期前期	内・外炭化物	織跡含
250	IA18	I層	深鉢	口縁	円文Ⅰ段	ナダ	にぶい・褐色	不具合	白	前期前期	なし	織跡含
251	IA18	I層	深鉢	口縁	横文(並列)Ⅰ段	ナダ	褐色	不具合	白、砂	前期前期	外炭化物	織跡含
252	IA18	I層	深鉢	口縁	波状口縁、口唇~側突、縦文の隆帯~側突	ナダ	暗褐色	不具合 白砂(少)	白	前期	なし	
253	IA18	I層	深鉢	胴	附加条状Ⅱ段(Ⅰ)・(Ⅱ)	ナダ	黄褐色	やや良好	白	前期前期	なし	織跡含
254	IA18	I層	深鉢	胴	横文(波状)(並列)Ⅰ段	ナダ	褐色	不具合	白、砂	前期前期		
255	IA18	I層	深鉢	胴	横文(波状)(並列)Ⅰ段(Ⅰ)・(Ⅱ)	ナダ	にぶい・褐色	やや不具合 白砂(少)	白	前期前期	なし	織跡含
256	IA18	II層	深鉢	口縁	横文の隆帯~側突Ⅰ段、横文Ⅰ段	ナダ	黄褐色	不具合	白、砂	前期前期	なし	織跡含
257	IA18	II層	深鉢	口縁	横文多段(並列)Ⅰ段	ナダ	黒褐色	不具合 白砂(少)	白	前期前期	なし	織跡含
258	IA18	II層	鉢	胴~底	胴、横文Ⅰ段、底部~側突	ナダ	にぶい・黄褐色	やや不具合	白、砂	前期前期	なし	織跡含
259	IA18	II層	深鉢	胴	横文(半輪)並列(Ⅰ)・(Ⅱ)	ナダ	黄褐色	やや不具合 白砂(少)	白	前期前期	なし	
260	IA19	II層	深鉢	胴	原形Ⅰ段	ナダ	にぶい・黄褐色	不具合	白、雲母	前期前期	新炭化物	織跡含
261	IA19	II層	深鉢	口縁	縄文(原形)Ⅰ段	ナダ	にぶい・黄褐色	やや不具合	白、雲母	後期	なし	
262	IA13	カタン	深鉢	口縁~側	台形状口縁、高脚部(Ⅰ)・(Ⅱ) 隆帯(Ⅰ)・(Ⅱ)、横文、横文(原形)Ⅰ段	ナダ ミガキ	にぶい・黄褐色	やや不具合	白、砂	前期前期b		
263	不明	検出箇所	深鉢	口縁	口縁~側目目、多段(並列)Ⅰ段	ナダ	にぶい・黄褐色	やや不具合	白、雲母	白座	なし	
264	不明	表探	深鉢	口縁	横文(波状)(並列)Ⅰ段	ナダ	黒褐色	やや良好	白	前期前期	外炭化物	
265	IA13	カタン	深鉢	口縁	隆帯~側目目~側突Ⅰ段、横文多段(並列)Ⅰ段、口縁~側目目、横文Ⅰ段				白座	なし	大木2a ~大木2b	
266	SX01	カタン	深鉢	胴	貝刷痕Ⅰ段	ナダ	にぶい・黄褐色	やや不具合	白、砂	早期	外炭化物	
267	SX01	カタン	深鉢	口縁	口唇~側目目、横文Ⅰ段	ナダ	にぶい・黄褐色	やや良好	白、雲母・砂	前期	内・外炭化物	
268	SK24	カタン	深鉢	口縁	横文Ⅰ段	ナダ	にぶい・黄褐色	やや不具合	白	前期前期	なし	
269	カタン	深鉢	口縁	側突Ⅰ段、横文Ⅰ段	ナダ	にぶい・黄褐色	不具合	白、砂	前期前期	なし		
270	カタン	深鉢	口縁	横文(附加)Ⅰ段(Ⅰ)	ナダ	黒褐色	やや良好	白	前期前期	なし		

第5表 平成27年度調査掲載遺物一覧表2

掲載番号	出土位置	出土層位	器種	残存部位	外面文様	外面色調	土部調整	径(mm)	高さ(mm)	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	重量(g)	備考
67	IA5	II層	ミコチュア土器	口縁~底	無文	にぶい・黄褐色	後期			6.7	12.0	5.4	525.6	
109	IA4	I層	ミコチュア土器	口縁~側	縦突Ⅰ段、斜紋Ⅰ段	黒褐色	後期					3.2	2038.3	内輪暗値
172	IA8	II層	ミコチュア土器	胴~底	縄文(Ⅰ)段	にぶい・黄褐色	後期			13.2	11.0	3385.9		
206	IA15	I層	ミコチュア土器	胴~底	縄文(Ⅰ)段	黄褐色	後期			2.2	1.2	786.2		(F30、F4?)
220	IA15	I層	ミコチュア土器	胴~底	無文(ナダ)	にぶい・黄褐色	後期			2.6	1.3	173.1		底面外面ナダ
271	IA16	I層	円盤状土製品	全面	比羅、縄文(Ⅰ)段	暗黄褐色	中期	3.6	0.7				673.3	
274	IA16	I層	円盤状土製品	全面	縄文(Ⅰ)段	にぶい・黄褐色	中期?	3.4	0.7				332.0	
273	IA16	I層	ミコチュア土器	胴~底	縄文(Ⅰ)段	褐色	後期			11.0	11.1	1299.6		
274	IA16	I層	ミコチュア土器	口~底 (一重文)Ⅰ段	附加側突(Ⅰ)段(Ⅰ)	暗褐色	後期			12.0	12.0	1810.0		底面内面炭化物
275	IA6	I層	キノコ形土製品	上半(Ⅰ)段(Ⅰ)	無文	にぶい・黄褐色	前期	4.9	1.2				389.9	
276	IA16	I層	土鏃	口唇~側	比羅(Ⅰ)段	暗褐色	後期?	4.2	1.2				193.1	
277	IA16	埋土土器	円筒土製品	全面	無文	褐色	後期	2.8				2.4	189.4	
278	IA8	II層	円筒土製品	上半	比羅(Ⅰ)段、南内?	にぶい・褐色	後期					12.0	36.9	
279	IA16	I層	円筒土製品	上半	無文	褐色	後期					12.0	86.2	

第6表 平成27年度調査掲載遺物一覧表3

掲載番号	種別	分類	出土位置	出土層位	残存部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
280	石鏡	凸基無冢	4号塚穴内南側	2層	端部1/10欠損	(2.2)	0.85	0.3	0.7	頁岩
281	石鏡	1	2号塚穴内南側	埋土上位	端部1/20欠損	(4.1)	1.3	0.7	2.9	頁岩
282	石鏡	凸基有冢	IA4b	I層	完形	2.7	1.3	0.4	1.1	頁岩、As付着
283	石鏡	平基有冢	IA17g	検出面	完形	2.75	(1.6)	0.4	1.1	頁岩
284	石鏡	凸基有冢	IA14b	II層	完形	2.5	1.35	0.5	1.3	頁岩
285	石鏡	凹基無冢	IA19h	II層	先端部1/20欠損	(1.9)	1.4	0.3	0.6	赤色頁岩
286	石鏡	凹基無冢	5号塚穴住居	埋土下位	先端部1/2欠損	1.4	1.7	0.4	0.9	頁岩
287	石鏡	凸基無冢	IA17g	検出面	完形	2.3	1.7	0.4	1.3	頁岩
288	石鏡	平基無冢	IA3j	検出面	完形	2.35	1.5	0.4	1.0	頁岩
289	石鏡	平基無冢	IA17i	II層	完形	2.5	1.7	0.4	1.4	頁岩
290	石鏡	不明	5号塚穴住居土	埋土下位	基部欠損	(1.95)	(1.65)	0.7	1.5	頁岩
291	石鏡	平基無冢	IA15j	II層	先端部1/20欠損	(2.1)	(1.75)	0.5	1.5	頁岩
292	石鏡	2	4号塚穴内南側	埋土下位	完形	5.9	2.5	1.1	7.8	頁岩
293	石鏡	2	4号塚穴内南側	埋土下位	端部1/10欠損	(5.8)	2.15	0.9	5.9	頁岩
294	石鏡	2	3号塚穴内南側	黒色土層	完形	6.3	2.6	0.8	8.6	頁岩
295	石鏡	2	1号塚穴内南側	埋土下位	完形	6.2	2.2	1.1	9.4	頁岩
296	石鏡	2	IA17j	II層	完形	6.65	2.8	0.9	15.1	頁岩
297	石鏡	2	IA16j	検出面	完形	5.8	3	0.8	9.7	頁岩
298	石鏡	2	4号塚穴内南側	2層	完形	5.3	2.6	1.0	11.5	頁岩
299	石鏡	1	23号土坑	埋土	完形	5.5	3.1	0.9	10.0	頁岩
300	石鏡	3	IA9m	II層	完形	4.7	5.4	1.0	22.4	頁岩
301	石鏡	3	IA14j	II層	完形	3.2	5.9	0.7	11.9	頁岩
302	石鏡	2	IA16j	検出面	完形	3.4	4.55	0.8	8.2	頁岩
303	石鏡	2	IA9m	II層	完形	7.8	4.1	1.2	33.7	頁岩
304	石鏡	2	IA19h	II層	完形	4.35	2.85	0.8	5.7	頁岩
305	石鏡?	1	IA18h	II層	完形	4.2	5.4	1.5	23.9	頁岩
306	石鏡?	1	IA4i	I層	完形	3.8	2.75	0.8	5.8	頁岩
307	石鏡?	1	IA4g	検出面	完形	(4.35)	3.25	1.3	11.2	頁岩
308	尖頭器		IA19i	II層	両端それぞれ1/10、3/10欠損	(6.5)	2.6	0.6	10.7	頁岩
309	尖頭器		IA14i	II層	完形	8.2	2.1	1.0	12.6	頁岩
310	尖頭器		IA8f	II層	完形	(6.0)	2.35	1.1	14.6	頁岩
311	尖頭器		5号塚穴住居土	埋土下位	完形	3.85	2.05	0.9	6.7	頁岩
312	尖頭器		IA17j	II層	両端それぞれ1/10、3/10欠損	(9.1)	3.5	1.6	43.3	頁岩
313	削棒器	1	IA16o	II層	完形	6.8	2.6	1.0	14.8	頁岩
314	不定形	2	IA17j	I層	1/5欠損	6.1	3.4	1.4	11.6	頁岩
315	削棒器	1	IA14j	I層	1/3欠損	4.5	3.4	0.7	29.3	頁岩
316	不定形	1	5号塚穴内南側	埋土上位	完形	4.7	3.2	1.2	19.2	頁岩
317	不定形	3	2号塚穴内南側	埋土上位	完形	5.0	5.2	2.0	50.4	頁岩
318	不定形	1	5号塚穴住居	埋土上位	端部1/20欠損	4.9	3.4	1.3	19.7	頁岩
319	磨製石斧		3号塚穴内南側	埋土	基部欠損	4.5	3.0	2.3	32.7	
320	磨製石斧		T1内中央	II層	側面1/20欠損	12.0	5.9	3.7	353.7	
321	磨製石斧		T3内南側	II層	1/20欠損	12.6	5.4	2.7	262.8	
322	磨製石斧		IA3j	II層	基部欠損	10.0	5.3	2.8	237.6	
323	磨製石斧		T3内南側	II層	1/5欠損	17.6	10.3	7.0	1414.9	
324	磨製石斧		001板付近	II層	1/10欠損	11.5	4.8	2.7	218.5	
325	磨製石斧	2	SI01	床面直上	完形	10.5	7.8	5.9	738.9	
326	磨製石斧	3	SI03	床面直上	1/20欠損	11.0	6.1	3.8	423.5	
327	磨製石斧	2-3	3号塚穴内南側	黒色土層	1/2欠損	9.1	6.6	3.1	352.7	
328	磨製石斧	1-3	2号塚穴内南側	土層	1/10欠損	12.5	8.2	3.7	658.2	
329	磨製石斧	1	2号塚穴内南側	土層	完形	14.0	7.2	6.2	976.4	
330	磨製石斧	3	5号塚穴内南側	床面直上	1/20欠損	11.6	5.5	10.2	823.2	
331	磨製石斧		1号土坑	埋土	完形	16.0	10.4	6.9	1397.5	
332	磨製石斧		21号土坑	埋土	完形	9.7	7.5	3.3	354.3	
333	磨製石斧		3号土坑	埋土	完形	15.8	10.9	7.9	1634.8	
334	磨製石斧		3号土坑	埋土	1/20欠損	16.7	6.2	8.3	1256.5	
335	磨製石斧	1-3	2号塚穴内南側	検出面	完形	14.4	7.2	7.4	1056.8	
336	磨製石斧		T1中央	II層	完形	17.4	6.9	6.6	1158.5	
337	磨製石斧	1-3	2号塚穴内南側	検出面	完形	14.8	8.0	6.8	1123.3	
338	磨製石斧		T1北側	II層	完形	13.5	7.0	6.2	977.7	
339	磨製石斧		T1北側	II層	完形	10.0	6.3	2.7	247.2	
340	磨製石斧		T3中央	II層	完形	12.9	7.8	5.9	796.1	
341	磨製石斧		T8東側	II層	完形	5.7	6.1	3.8	184.1	
342	磨製石斧		T9南側	II層	1/2欠損	7.4	7.5	4.3	341.5	
343	磨製石斧		IA15k	II層	完形	10.0	5.1	3.1	275.9	
344	磨製石斧		IA15k	II層	完形	12.5	5.8	2.5	264.2	
345	磨製石斧		粗掘、南側	I層	完形	11.4	9.8	5.3	926.6	

第7表 平成27年度調査掲載遺物一覧表4

346	銭貨	銅銭	寛永通寶	IA15h	黒色土層	完形	2.4	2.4	0.1	2.7
-----	----	----	------	-------	------	----	-----	-----	-----	-----

## V 平成29年度調査

### 1 概 要

平成29年度調査区は平成27年度調査区から北に280m程度の離れた位置に相当する。調査範囲は、概ね南北29m、東西15mの範囲で、調査面積は300㎡である。調査区周辺の地形は西から東に下る緩やかな斜面地である。ただし、同年度調査区に限定するならば、斜面上方に相当する調査区西半は切土、斜面下方に相当する調査区東半は盛土されており、調査前の状況はほぼ平坦であった。平成29年度調査区内の標高は89.5mから91.0mで比高は小さい。

調査区は調査直前の段階では山林地であったが、それ以前は住宅地としての利用がなされていたようだ。前述の平坦地を造成するにあたり、斜面下方に相当する調査区東端から調査区外の範囲にかけては2m以上厚さの盛土が行われていた。この盛土を土留めするために調査区外東側の位置には総長16m程度のコンクリート擁壁が設置されていたが、この擁壁にはこれを建設したであろう現存する近隣の建設業者名で昭和19年の銘が刻まれていた。このことから考えると少なくとも昭和十年代半ばの段階においては、同地が1軒の宅地として利用されていたようである。また近年まで住宅地として利用されていたことを反映したためか、調査区東部を中心に住宅やこれに付随する設備類の設置に伴う削平痕や擾乱が多く認められた。

表土から遺構検出面までの深さは調査区全体で一律15cm程度である。斜面上方に相当する調査区西半は切土に伴い、本来は表土直下に堆積しているはずの黒色土から黒褐色土層が削平されていた。このため同所では基本層序Ⅳ層に相当する黄褐色シルト中を遺構検出面とした。対して切土の影響を受けず、原地形が残された調査区東半では、黄褐色シルト面に到達するよりも上面に堆積している黒色土から黒褐色土中（基本層序Ⅲ層上面相当）を遺構検出面とした。

同年度の調査では古代の竪穴建物1棟、近現代の炭窯1基、土坑5基検出した。土坑は1基が縄文時代の陥し穴で、残りの4基は年代不明である。調査区東部中央付近の位置で近代ないし現代の帰属が推測される掘立柱建物が認められたが、今回は記録していない。遺物は縄文時代や平安時代の土器などが出土した。

(福島)

### 2 検出遺構と出土遺物

#### (1) 竪 穴 建 物

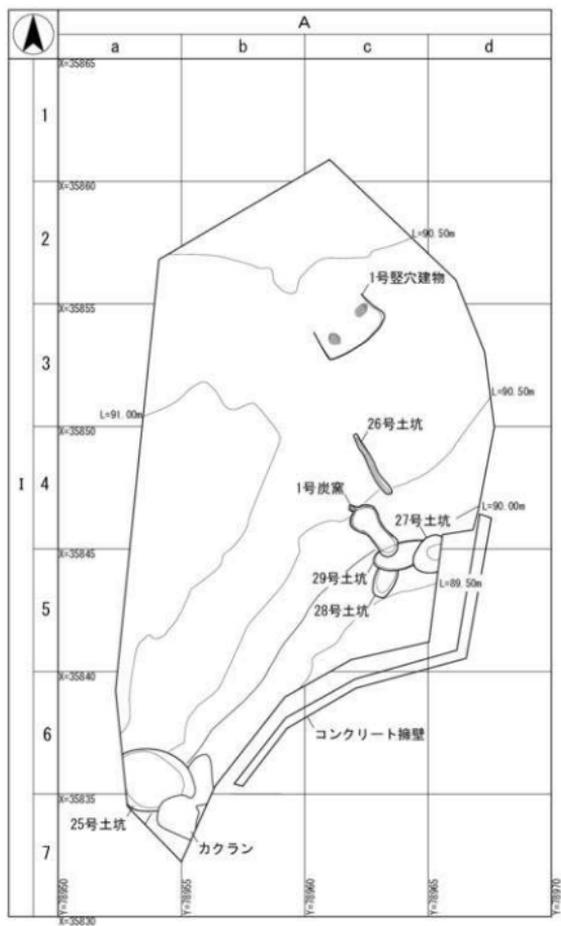
##### 1号竪穴建物（第39図、写真図版7）

【位置・検出状況】調査区北東部分に相当するI A 3 c グリッドに位置する。基本層序Ⅲ層下層に相当する黒褐色シルト中で少量の黄褐色シルトを含む黒褐色シルトの長方形プランとして検出した。

【他の遺構との重複】その他の遺構との重複は認められないが、上面の削平と樹木の根による擾乱を受けている。

【平面形】残存する平面形は東西を長辺とする長方形であるが、検出状況から考えると遺構西半は削平により失われている可能性が高い。

【規模】残存する平面規模は長軸2.7m、短軸2.0mである。残存する遺構の深さは8cm程度である。



第38図 平成29年度調査区遺構配置図

〔埋土〕 堅穴建物内に堆積している埋土は上下2層に分層可能である。埋土の主体は黒色シルトで、各層に少量の黄褐色シルト粒を含む。埋土は、樹木の根による擾乱以外は極端な堆積層は認められず、機能停止後の自然堆積であると考えられる。遺構南側では製塩土器片が多く出土した。

〔床面・壁〕 現地性焼土を検出した平坦面を床面と判断した。床面は締まりがあり、床面の使用による硬化とみられる。残存する壁は、ほぼ垂直に立ち上がる形状である。

〔炉〕 2基の炉を検出した(1号堅穴建物炉1・炉2)。炉1は北壁東寄りの位置で検出された。規模は南北を長軸とする61×39cmで、形状は楕円形である。特に焼土北側の部分の閉塞性が高かったためか、還元していた。被熱深度は15cm程度である。炉2は南壁東寄りの位置で検出された。径は48×46cmで、形状は楕円形である。北側の部分が還元しており、濃い青灰色が赤褐色部分の外側で半環状に巡る。燃焼部中心部は酸化雰囲気の中で燃焼がなされ、その周縁部では還元するような閉塞性が高い条件となっていたことが想定される。堅致な炉壁材の破片は出土しなかったが、焼土塊は散見されるため、高い炉壁は構築されなくとも小規模で低い炉壁が構築されていた可能性が考えられる。

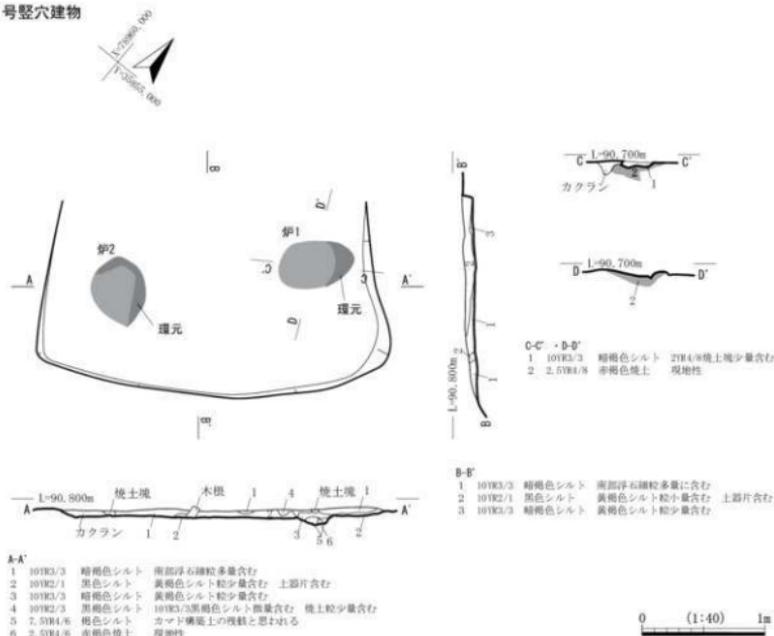
〔付属遺構〕 柱穴等は認められなかったが、上屋は存在した可能性が考えられる。

〔出土遺物〕 埋土および炉周辺では土師器甕や製塩土器が出土した。

〔時期・性格〕 遺構の特徴や出土遺物の年代から古代～中世の堅穴建物であると考えられる。

床面で検出した炉2基の存在から高温で燃焼する作業がおこなわれていたと想定され、調査当初は鉄生産に関連する工房である可能性を考えたが、鉄滓や鍛造剥片等の鉄生産関連遺物の出土が皆無であることから、その可能性が否定された。その後、出土遺物を整理すると、炉2周辺で多数の製塩土

#### 1号堅穴建物



第39図 1号堅穴建物

器片が出土したことが判明し、土器による製塩作業がおこなわれた堅穴建物の工房であると考えに至った。製塩土器は1個体が多くても数個体である可能性が考えられ、出土位置から炉2で少数回使用されたものとみられる。土器製塩は海水を煮詰めて塩を取り出す作業である。今回の事例が土器製塩工程でどのような工程に当たるか不明であるが、海浜から約1.5kmの丘陵上に遺構が立地することから最初期段階の工程ではない可能性が高く、燃料材を容易に調達できる場所で、より純度を上げる工程が展開していたものと想像される。また、周辺での燃料材確保については、約10m南の斜面に位置する27号土坑が製炭土坑である可能性があり、製塩で使用される木炭を生産したのではないかと考えられる。

詳細な時期は、出土した土器から平安時代であると推測される。詳細は後述するが、これら土器類は10世紀後半から11世紀に帰属する八戸市林ノ前遺跡で多く出土する土器に類例を求めることができ、この時代の製塩工房である可能性が考えられる。

(中村・福島)

## (2) 土 坑

平成29年度調査で確認された土坑は5基である。内訳は陥し穴状土坑1基(26号土坑)と時期不明の土坑4基(25・27~29号土坑)である。

### 25号土坑(第40図、写真図版14)

【位置・検出状況】調査区南端部IA6aグリッドに位置する。基本層序Ⅲ層上面で黒色と濃い黒褐色の平面円形プランを検出した。

【他の遺構との重複】他の遺構とは重複していないが、南東側を宅地で利用されたと思われる地下水の水槽の設置孔によって破壊されている。

【平面形】平面楕円形を呈すると推測されるが、西側は調査区外へ続いているため全体形は不明である。

【規模】残存する平面規模は長軸3.1m短軸2.67mである。残存する遺構の深さは103cmである。

【埋土】遺構外より自然流入し徐々に埋没した様子が看取できるため、自然堆積であると考えられる。

【底面・壁】底面は平坦であり、いずれの壁も直立気味に立ち上がり、上部も外方へ広がらない。

【出土遺物】微細な土器器片が少量出土した。

【時期・性格】時期および性格は不明であるが、出土遺物に土器器片が混じることから古代以降の遺構である可能性が考えられる。

### 26号土坑(第40図、写真図版14)

【位置・検出状況】調査区南端部IA4cグリッドに位置する。攪乱除去中に基本層序Ⅳ層上面で黒色の平面円形プランを検出した。

【他の遺構との重複】他の遺構とは重複していないが、上部をトレンチ状の攪乱によって破壊されている。

【平面形】細長い溝状を呈する。

【規模】残存する平面規模は長軸2.7m短軸1.2mである。残存する遺構深さは60cm程度である。

【埋土】上下2層に分層可能であり、自然堆積であると考えられる。

【底面・壁】底面は平坦であり、いずれの壁も直立気味に立ち上がり、上部も外方へ広がらない。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【時期・性格】遺構の形態的特徴から縄文時代中期以降の陥し穴であると考えられる。

### 27号土坑(第40図、写真図版14)

【位置・検出状況】調査区中央部IA5cグリッドに位置する。検出面は斜面である。基本層序Ⅲ層

上面で黒色の平面楕円形プランを検出した。

〔他の遺構との重複〕29号土坑と重複関係にあり、29号土坑を切っている。

〔平面形〕平面楕円形あるいは不整形な円形を呈すると推測されるが、遺構の東側は調査区外へ続いているため全体形は不明である。

〔規模〕残存する平面規模は長軸1.57m、短軸1.08mである。残存する遺構の深さは76cmである。

〔埋土〕遺構外より自然流入した様子が看取できるため、自然堆積であると考えられる。下層には多量の炭化物が認められ、炭化物は面をなしている。底面において被痕跡は顕著ではないが、焼土粒が微かに認められた。

〔底面・壁〕底面は本来の斜面傾斜を無視して平坦に作られており、いずれの壁も底面から緩やかに立ち上がる。

〔出土遺物〕炭化物以外の出土遺物は認められなかった。

〔時期・性格〕時期は不明であるが、底面で検出した炭化物を採取し、3点を試料として年代測定をおこなった。その結果はIV章に詳述されているが、試料によってばらつきがあった。古い値で1040～1152cal AD、1169～1222cal ADの測定値が得られている。遺構の特徴から斜面地に設けられた製炭土坑の可能性が高い。

#### 28号土坑（第40図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕調査区南端部IA5cグリッドに位置する。検出面は斜面である。基本層序Ⅲ層上面でやや濃い黒色の平面円形プランを検出した。

〔他の遺構との重複〕29号土坑と重複しており、29号土坑に切られている。

〔平面形〕平面楕円形を呈すると推測されるが、北側は29号土坑に切られているため正確な全体形は不明である。

〔規模〕残存する平面規模は長軸1.13m、短軸0.87mである。残存する遺構の深さは25cmである。

〔埋土〕上下2層に分層でき、炭化物を少量含むシルト主体である。自然堆積であると考えられる。

〔底面・壁〕底面は斜面に対応するように緩やかに下降し、残存する壁は緩やかに立ち上がる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期・性格〕時期および性格は不明である。

#### 29号土坑（第40図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕調査区南端部IA5cグリッドに位置する。検出面は斜面地である。基本層序Ⅲ層上面で濃い黒色の平面長楕円形プランを検出した。

〔他の遺構との重複〕27号土坑・28号土坑とそれぞれ重複しており、28号土坑を切り、27号土坑によって切られている。また、1号炭窯に埋土上部を切られている。

〔平面形〕平面長楕円形を呈する。

〔規模〕残存する平面規模は長軸2.20m、短軸1.16mである。残存する遺構の深さは54cmである。

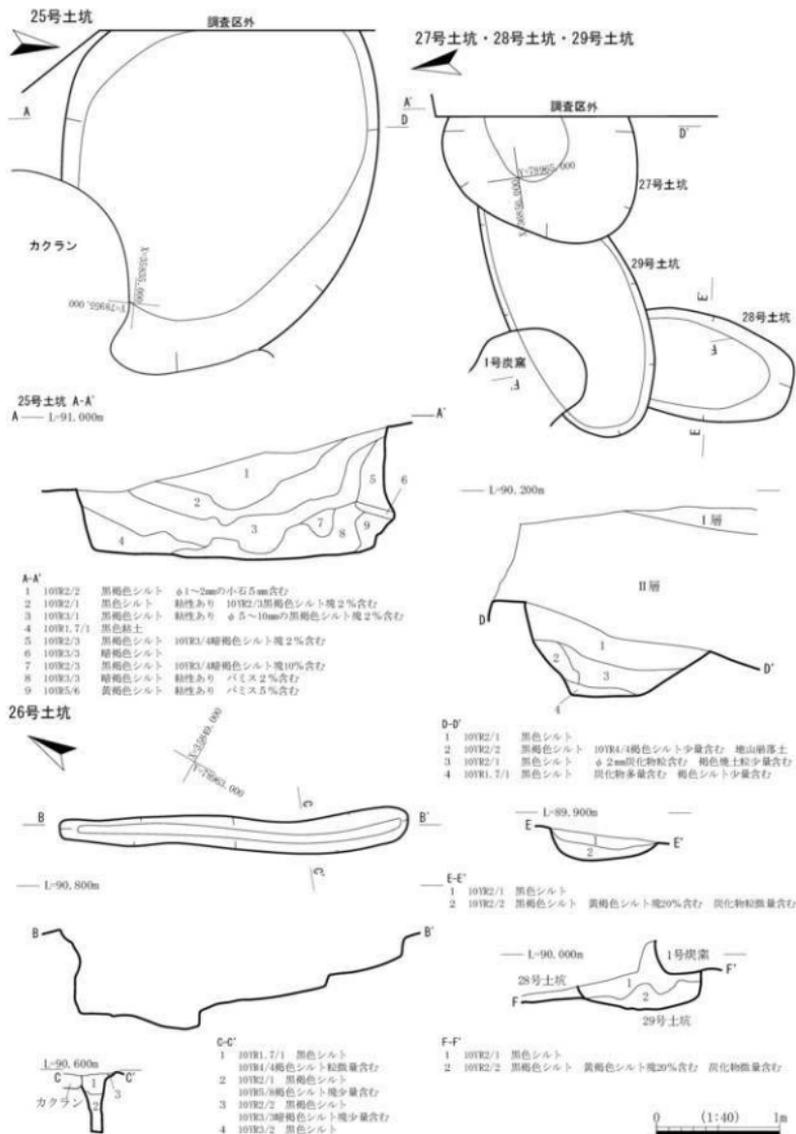
〔埋土〕下層には炭化物が微量認められる。遺構外より自然崩落、自然流入した様子が看取できるため、自然堆積であると考えられる。

〔底面・壁〕底面は平坦であり、壁は斜面上方側で直立気味に立ち上がり、その他は緩やかに立ち上がる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期・性格〕時期・性格とも不明であるが、遺構の形態や立地から27号土坑のような製炭土坑の可能性も考えられる。

（中村・船渡）



第40図 25号～29号土坑



れる。なお、室内に残存する木炭を採取し、年代測定の試料として提供した。測定結果のうち二つの領域が示されたが、より新しい方の1634~1658 cal ADという値が妥当であると思われる。

(中村・松渡)

#### (4) 出土遺物

平成29年度調査で出土したおもな遺物は、製塩土器・土師器・縄文土器などである。

##### 製塩土器 (第42図、写真図版34)

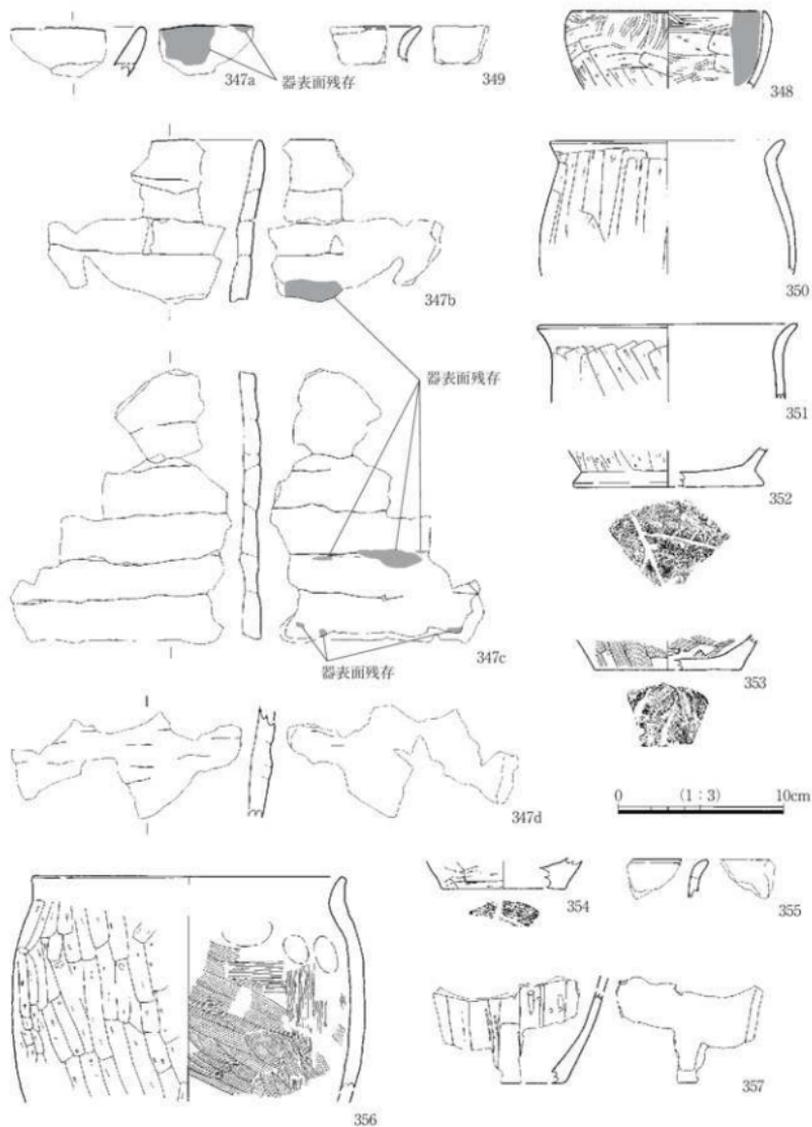
347は製塩土器である。いずれも損傷の著しい破片となっており、その全体形を推し量ることは難しい。しかし、接合できた破片では曲線的な部位が一切無く、直線的で寸胴な器形であったものと思われる。掲載した製塩土器は、それぞれ接点認められないが、同一個体の可能性が考えられる。全体的に被熱による破損が著しいが、成形時の積み上げ痕跡は明瞭である。成形の積み上げ方法は接合部が水平になっていることから輪積み成形であると推測される。器表面は被熱により剥落が顕著で、使用以前の器表面はわずかに残るのみであり、土器製作時における器表面の調整などを知ることができない。ただし、一部残存する器表面を観察する限りでは、工具を用いるような手の込んだ調整は施されていないようである。器壁は全体的に均等で約5mmの厚みを持つ。色調は黄橙~黄褐色を呈するが、本来の器表面はもう少し暗い色調であったと思われる。347aは口縁部だけの破片であり、347bは口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は丸く収められ直線的であると考えられ、頸部等の括れや屈曲は認められない。粘土の積み上げ幅は体部と変わらない。347cと347dはいずれも体部の破片であるが、どの部分に位置するかは判断できない。土器内面には塩の結晶やその他の残留物はみられないが、製塩作業の中でも煎熬や焼塩等の作業で使用されたものと考えられる。土器の器表面の剥離や欠損は、製塩時の焼成作業によって胎土に含まれるカルシウム等が抜けたことに起因するとみられる。

##### 土師器 (第42・43図、写真図版35)

348~364は土師器である。いずれも1号堅穴建物より出土した。器種は348のみが坏であり、その他はすべて甕である。

348は出土中唯一の供膳具である非口クロの坏であり、丸みを持つ体部に直立気味の口縁部が続く。体部最下半から底部の形態は不明であるが、およそ丸腕状の器形であると推測される。内面は黒色処理されていると考えられる。外面も広範囲で黒色化しているが、意図的な処理かどうか不明である。内外面ともに粗いミガキとヘラケズリ調整が認められる。この土器に類する出土資料は、ほとんど事例がなく、直ちに年代を特定できるものではない。強いて類例を挙げるとするならば、青森県八戸市に所在する林ノ前遺跡出土の土器の中に近い形態のものを求めることができる。10世紀後半から11世紀の土器群に非口クロ・丸腕器形の坏が一定量出土しており、形態的特徴は今回出土した坏と似る。

次に、土師器甕では350、356などが器形の判明する個体である。体部は緩やかな丸みを持ち、口縁部は短くなおかつ緩やかに屈曲する。ともに内面は粗いヘラケズリ調整であり、356は内面に横方向のハケ調整と指頭圧痕が明瞭に認められる。この指頭圧痕は頸部から口縁部を作り出すための痕跡であると考えられる。これら土師器甕も林ノ前遺跡出土の10世紀後半から11世紀の土器群に多くみられる特徴が見出せる。また、358・361は直立する口縁部を持つ土師器甕である。358は工具による縦方向の調整が認められる。このような明確な口縁部を作り出さない器形の土師器もやはり林ノ前遺跡に類例がある。さらに、底部の残存する個体から土師器甕の形態を推測すると、体部にやや丸みを持つ



第42図 出土遺物22

形態と体部が直線的な縦長の形態の2種が存在すると思われる。

総合的に判断して、これら1号堅穴建物より出土した土器器類は林ノ前遺跡の10世紀後半～11世紀の土器群に類例を求めることができ、これらと共通する時代の土器群である可能性が考えられる。未だ出土資料に限りがあるため不確かさは否めないものの、今後県内での新たな類例が出土する可能性もあり、注意する必要がある。

なお、360は土器器としたが、底部に網代痕が認められ、縄文土器の可能性も排除できない。

**縄文土器**（第44図、写真図版35・36）

365～395は縄文土器である。これら縄文土器は遺構に伴う遺物で

はない。365は微細な破片であるが、縄文時代早期のムシリⅠ式に比定される薄手の土器片である。外面には微隆起線による文様が認められ、内面は細かな単位の貝殻条痕文が横方向に施されている。胎土は非常に精良で繊維等の混和材は混入されていない。367は縦方向の絡条体による地文が認められる。390にも共通する地文が認められ、同一個体である可能性もある。368・369は口縁部を外方に折り返し、口縁部が肥厚する形態である。口縁部肥厚帯にも地文が展開する。379は深鉢頸部と思われる部位である。横方向に沈線と隆帯が認められる。380は縄文時代前期の深鉢である。385は縄文時代後期前葉の小形深鉢である。縄文原体の圧痕文が認められる371・372・375・381・383・393は、前期末～中期前葉の特徴である。

**磨製石斧**（第45図、写真図版36）

396は縄文時代の磨製石斧である。基部は折れており、残存していない。刃部は緩やかな円弧を描き、刃部から基部に向けて幅が狭くなる傾向が看取される。側面は緩やかだが、稜を持つ。

**寛永通寶**（第45図、写真図版36）

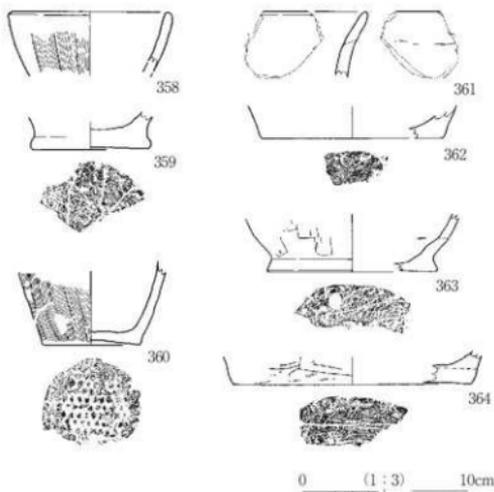
397は寛永通寶である。銅銭で、「寛」・「寶」字体からいわゆる「新寛永」（1668年初鑄）であることが明らかである。表土出土であるが、1号炭窯の時代に近い時代のものであると評価できる。

（福島）

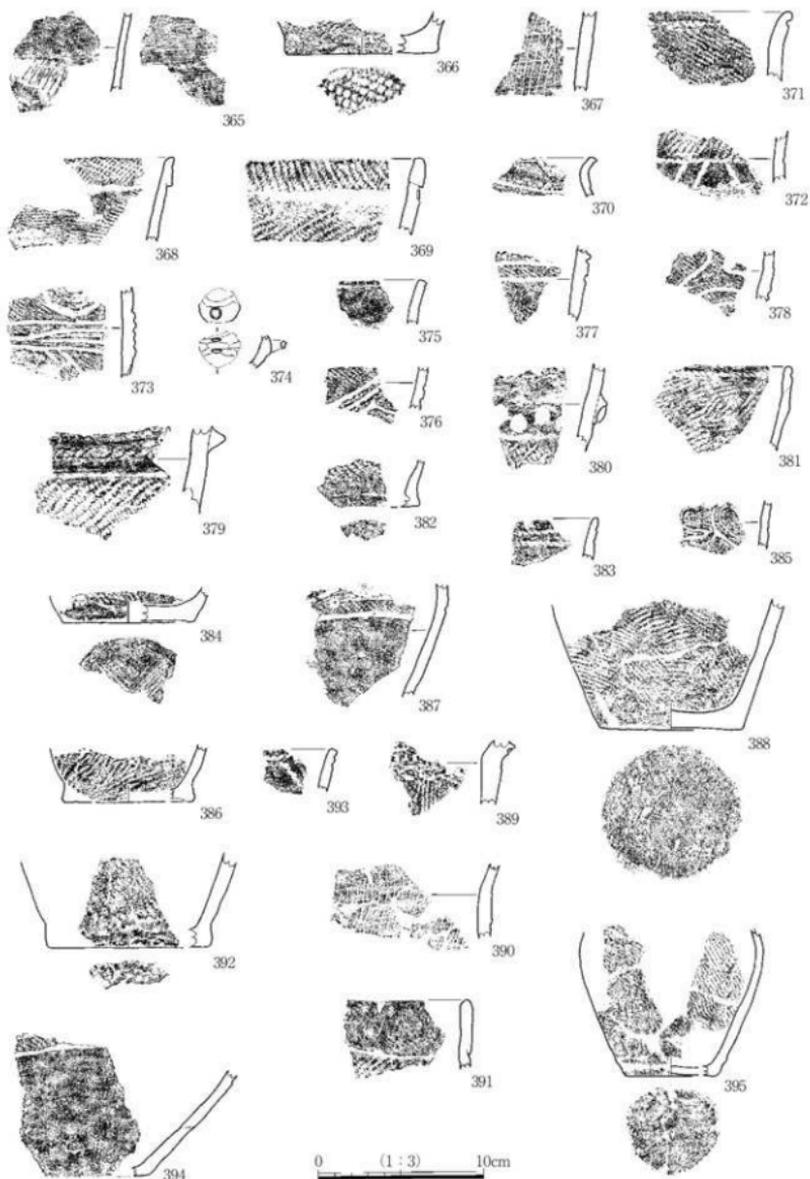
## （5）土器製塩

以上、平成29年度調査では、平成27年度調査とは調査地点が離れていることもあり、異なる成果が認められた。特に、土器製塩に関する遺構・遺物が注目される。

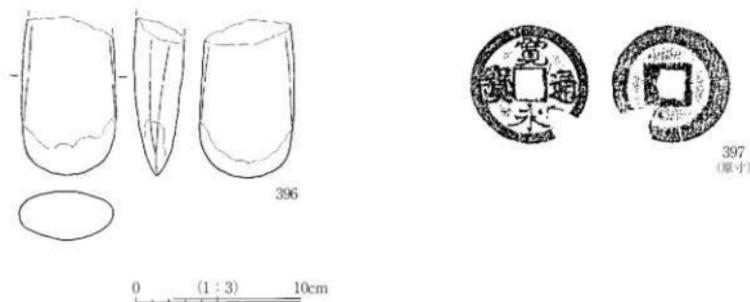
調査で検出した1号堅穴建物は、建物内に炉を有する工房であると考えられる。建物床面には2基の炉が構築されている。2基の炉はいずれも極度に被熱している様子が窺え、そのうち南側の1基の



第43図 出土遺物23



第44図 出土遺物24



第45図 出土遺物25

炉周辺より多数の製塩土器片が出土したことから土器を用いた製塩炉であることを想定した。建物の平面形態は方形基調であり、出土する土師器は平安時代のものであると考えられるため、この竪穴建物は、全国的にも珍しい平安時代の土器製塩工房であると想定される。工房は海浜から少し離れた丘陵部に立地しているため海水を直接汲み上げる工程を想定するには難があり、ある程度濃縮された状態のものを加熱して塩を取り出す炉であったと思われる。

問題は、詳細な時代を特定できないことにある。この建物出土の土師器は特異な坏や甕で構成されており、平安時代の範疇であると推測されるものの詳細な時期の特定は難しい状況であった。しかし、八戸市林ノ前遺跡の出土土器に類似していることから10世紀後半～11世紀の年代を推定した。これを補強する材料として、製炭土坑と推定した27号土坑の木炭を試料とした年代測定で11世紀～12世紀という結果が得られた。この土坑が製塩工房に燃料材である木炭を供給する製炭土坑であれば、土器と測定値が重なる範囲である11世紀という時代に製塩工房が営まれた可能性が考えられる。林ノ前遺跡で検出された竪穴建物は鉄生産工房などを含めすべて方形あるいは長方形である点も今回検出した長方形プランの竪穴建物と共通する。ちなみに、製塩土器は林ノ前遺跡でも少量であるが出土している。

(福島)

## 引用・参考文献

青森県教育委員会 2006 『林ノ前遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第415集

第8表 平成29年度調査掲載遺物一覧表

掲載 番号	種別	器種	出土遺構・位置・層位	おもな器面調整・文様等	色調	寸法(cm)			備考
						口径	器高	底径	
347	製塩土器	-	1号壑穴建物・南西・埋土 下層	輪積み、ナデ(内外 面)	黄橙色	-	-	-	複数破片あり。
348	土師器	坏	1号壑穴建物・埋土	ミガキ?(内面)、 ケズリ(内外面)	にぶい 黄橙色	11.7	4.7	-	黒色処理(内面)
349	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土	ヨコナデ(内外面)	褐色	-	2.2	-	
350	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土	ケズリ(外面)、 ナデ(内面)	褐色	(14.4)	8.2	-	
351	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土	ケズリ(外面)、ナデ(内 面)	にぶい 黄橙色	(16.0)	4.7	-	
352	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土	ケズリ(外面)、ナデ(内 面)	にぶい 黄褐色	-	2.3	(11.6)	底部木葉痕
353	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土	ハケ(内外面)	にぶい 黄橙色	-	1.8	(3.9)	底部木葉痕
354	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土下層	ケズリ(外面)、ナデ(内 面)	暗褐色	-	1.7	(7.6)	底部木葉痕
355	土師器	甕	1号壑穴建物・南西・埋 土下層	ヨコナデ(内外面)	褐色	-	2.4	-	
356	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土	ケズリ(外面)、ハケ・指 環(内面)	褐色	(19.1)	13.9	-	
357	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土	ケズリ(外面)、ナデ(内 面)	黄橙色	-	6.6	-	
358	土師器	甕?	1号壑穴建物・埋土	ハケ(外面)、ナデ(内 面)	暗褐色	(9.7)	3.9	-	
359	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土	ナデ(内外面)	暗褐色	-	1.8	(7.2)	底部木葉痕
360	土師器	甕	1号壑穴建物・埋土	ハケ(外面)、ナデ(内 面)	暗褐色	-	4.8	5.9	底部ムシロ痕?縄文土器の 可能性もあり。
361	土師器	甕	26号土坑・埋土	ヨコナデ(内外面)	にぶい 黄橙色	-	3.8	-	
362	土師器	甕	5c・検出面	ナデ(内外面)	褐色	-	2.0	(11.2)	
363	土師器	甕	5c・検出面	ケズリ(外面)、ナデ(内 面)	褐色	-	3.5	(10.4)	
364	土師器	甕	5c・検出面	ケズリ(外面)、ナデ(内 面)	褐色	-	1.7	(14.5)	底部木葉痕。縄文土器の可 能性もあり。
365	縄文土器	深鉢	1号壑穴建物・埋土	微隆起線文(外面)、 貝殻条痕文(内面)	にぶい 黄橙色	-	4.9	-	
366	縄文土器	深鉢	1号壑穴建物・埋土	縄文(LR)	にぶい 黄橙色	-	2.2	(9.2)	
367	縄文土器	深鉢	1号壑穴建物・埋土	撚糸文	褐色	-	5.1	-	
368	縄文土器	深鉢	26号土坑埋土、4d・検出 面	縄文(斜位LR)	黒褐色	-	5.5	-	
369	縄文土器	深鉢	4d・II層	縄文(RL)	暗褐色	-	5.0	-	
370	縄文土器	深鉢	4d・II層	縄文	暗褐色	-	2.4	-	
371	縄文土器	深鉢	4d・II層	原体庄痕、縄文(RL)	褐色	-	4.5	-	

## 2 検出遺構と出土遺物

掲載番号	種別	器種	出土遺構・位置・層位	おこな器面調整・文様等	色調	寸法(cm)			備考
						口径	器高	底径	
372	縄文土器	深鉢	4d・II層	原体圧痕、縄文(LR)	にぶい黄橙色	—	4.4	—	
373	縄文土器	深鉢	4d・II層	沈線、縄文(RL)	暗褐色	—	5.8	—	
374	縄文土器	深鉢	4d・II層	ミガキ	にぶい黄橙色	—	2.0	—	
375	縄文土器	深鉢	4d・II層	原体圧痕	にぶい黄橙色	—	3.1	—	
376	縄文土器	深鉢	4d・II層	沈線、縄文(RL)	にぶい黄橙色	—	2.4	—	
377	縄文土器	深鉢	4d・II層	沈線、縄文(RL)	にぶい黄褐色	—	4.6	—	
378	縄文土器	深鉢	4d・II層	沈線、縄文(RL)	にぶい黄褐色	—	4.2	—	
379	縄文土器	深鉢	5c・検出面	原体圧痕付隆帯、縄文(LR)	明褐色	—	5.3	—	
380	縄文土器	深鉢	5c・検出面	刺突列付隆帯、S字状連続沈文、縄文	にぶい黄橙色	—	5.3	—	繊維混じり。
381	縄文土器	深鉢	5c・検出面	原体圧痕、縄文(LR)	褐色	—	5.2	—	
382	縄文土器	深鉢	4d・II層	縄文(RL)	褐色	—	2.8	—	
383	縄文土器	深鉢	4d・II層	原体圧痕	灰褐色	—	2.5	—	
384	縄文土器	深鉢	4d・II層	縄文	褐色	—	1.9	(8.0)	
385	縄文土器	深鉢	トレンヂ2	沈線	黄橙色	—	2.8	—	
386	縄文土器	深鉢	4d・II層	縄文(LR)	褐色	—	3.2	(8.1)	
387	縄文土器	深鉢	4b・検出面	沈線、縄文(RL)充填縄文?	褐色	—	6.6	—	
388	縄文土器	深鉢	5b・検出面	縄文(甲節)	暗褐色	—	7.6	7.7	
389	縄文土器	深鉢	表採	刺突列、撚糸文	にぶい黄橙色	—	4.1	—	
390	縄文土器	深鉢	5c・検出面	撚糸文	にぶい黄褐色	—	4.3	—	
391	縄文土器	深鉢	表採	縄文(LR)	褐色	—	4.2	—	
392	縄文土器	深鉢	3b・検出面	縄文	褐色	—	5.2	(10.1)	底部網代痕。
393	縄文土器	深鉢	4d・II層	原体圧痕	にぶい黄橙色	—	2.5	—	
394	縄文土器	深鉢	4b・検出面	沈線、充填縄文?	暗褐色	—	6.1	—	
395	縄文土器	深鉢	5b・検出面	縄文(RL)	にぶい黄橙色	—	8.8	5.6	

## VI 放射性炭素年代測定

### 1 測定対象試料

測定対象試料は8点である。平成27年度調査からは堅穴住居埋土中の炭化物4点、平成29年度調査からは炭室埋土中の炭化物1点と土坑埋土中の炭化物3点を試料とした。

### 2 測定の意義

時代不明遺構の年代を明らかにする。

### 3 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度 (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- 1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) <sup>14</sup>C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁

を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$ が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。

4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma=68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma=95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を使い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2、3、図1、2に示した。なお、暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表1・2、図1・2に示す。

平成27年度調査分の試料 (試料No.1~4) はcal BPで算出した。

$^{14}\text{C}$ 年代は、4510 $\pm$ 30yrBP (試料No.3、4) から4450 $\pm$ 30yrBP (試料No.1) の狭い年代幅にまとまる。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、最も古いNo.3が5289~5060cal BPの間に5つの範囲、最も新しいNo.1が5270~4976cal BPの間に5つの範囲で示され、いずれも縄文時代中期前葉から中葉頃に相当する (小林編2008)。

平成29年度調査分の試料 (試料No.5~8) はcal BC/ADで算出した。

1号炭窯から出土した木炭試料UM-17-1の $^{14}\text{C}$ 年代は270 $\pm$ 20yrBP、暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、1528~1658cal ADの間に2つの範囲で示される。

27号土坑から出土した木炭試料UM-17-2~4の $^{14}\text{C}$ 年代は、930 $\pm$ 20yrBP (UM-17-4) から840 $\pm$ 20yrBP (UM-17-2) の間にある。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、最も古いUM-17-4が1040~1152cal ADの間に3つの範囲、最も新しいUM-17-2が1169~1222cal ADの範囲で示される。

なお、今回測定された試料の年代については、次に記す古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる (古木効果)。今回測定された木炭は、いずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、これらの木が死んだ年代は測定結果より新しい可能性がある。

全試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

(株式会社 加速器分析研究所)

## 引用参考文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{13}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第9表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

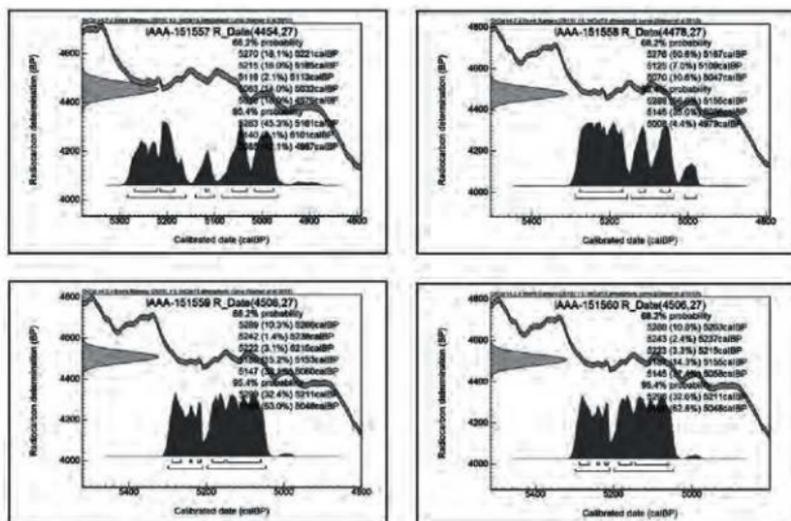
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-151557	No.1	5号壑穴住居炉埋設土器内	炭化物	AAA	-31.06 ± 0.25	4,450 ± 30	57.43 ± 0.20
IAAA-151558	No.2	5号壑穴住居焼土周辺 埋土下位	炭化物	AAA	-29.22 ± 0.28	4,480 ± 30	57.27 ± 0.20
IAAA-151559	No.3	6号壑穴住居P2 埋土下位	炭化物	AAA	-27.30 ± 0.27	4,510 ± 30	57.05 ± 0.20
IAAA-151560	No.4	6号壑穴住居 埋土下位	炭化物	AAA	-27.79 ± 0.30	4,510 ± 30	57.06 ± 0.20
IAAA-172253	No.5	1号炭窯 底面	木炭	AAA	-24.42 ± 0.23	270 ± 20	96.65 ± 0.27
IAAA-172254	No.6	27号土坑 底面付近	木炭	AAA	-26.70 ± 0.23	840 ± 20	90.05 ± 0.26
IAAA-172255	No.7	27号土坑 底面付近	木炭	AAA	-26.99 ± 0.21	890 ± 20	89.56 ± 0.25
IAAA-172256	No.8	27号土坑 底面付近	木炭	AAA	-26.21 ± 0.22	930 ± 20	89.01 ± 0.25

[IAA 登録番号: 試料 No1~4.#7607, 試料 No5~8.#8915]

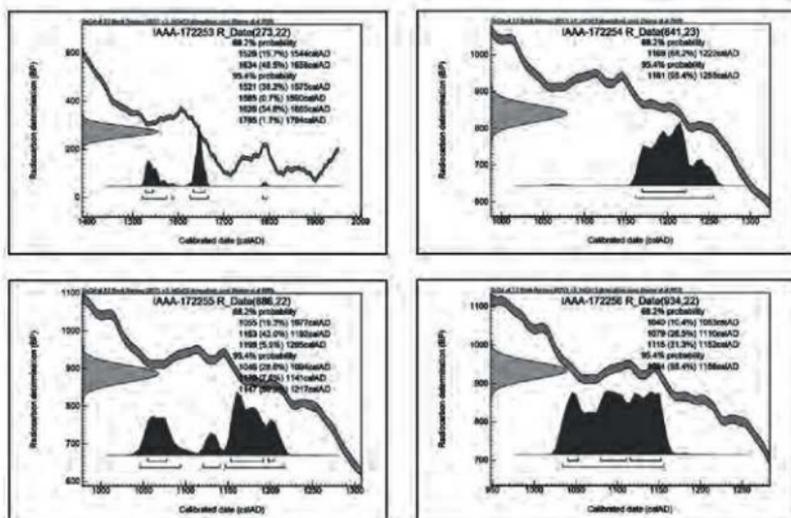
第10表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代試料No1~4calBP、試料No5~8calBC/AD)

[参考値]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正値		曆年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 曆年代範圍	2 $\sigma$ 曆年代範圍
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-151557	4,550 $\pm$ 30	56.72 $\pm$ 0.19	4,454 $\pm$ 27	5270calBP - 5221calBP (18.1%) 5215calBP - 5185calBP (16.0%) 5119calBP - 5113calBP ( 2.1%) 5063calBP - 5032calBP (14.0%) 5016calBP - 4976calBP (18.0%)	5283calBP - 5161calBP (45.3%) 5140calBP - 5101calBP ( 8.1%) 5085calBP - 4967calBP (42.1%)
IAAA-151558	4,550 $\pm$ 30	56.77 $\pm$ 0.19	4,478 $\pm$ 27	5276calBP - 5167calBP (50.6%) 5125calBP - 5109calBP ( 7.0%) 5070calBP - 5047calBP (10.6%)	5288calBP - 5155calBP (56.0%) 5145calBP - 5036calBP (35.0%) 5008calBP - 4979calBP ( 4.4%)
IAAA-151559	4,550 $\pm$ 30	56.79 $\pm$ 0.19	4,508 $\pm$ 27	5289calBP - 5266calBP (10.3%) 5242calBP - 5238calBP( 1.4%) 5222calBP - 5215calBP( 3.1%) 5186calBP - 5153calBP (15.2%) 5147calBP - 5060calBP (38.1%)	5299calBP - 5211calBP (32.4%) 5198calBP - 5048calBP (63.0%)
IAAA-151560	4,550 $\pm$ 30	56.74 $\pm$ 0.19	4,506 $\pm$ 27	5288calBP - 5263calBP (10.8%) 5243calBP - 5237calBP ( 2.4%) 5223calBP - 5215calBP ( 3.3%) 5187calBP - 5155calBP (14.3%) 5145calBP - 5058calBP (37.4%)	5298calBP - 5211calBP (32.6%) 5199calBP - 5048calBP (62.8%)
IAAA-172253	260 $\pm$ 20	96.76 $\pm$ 0.27	273 $\pm$ 22	1528calAD - 1544calAD (19.7%) 1634calAD - 1658calAD (48.5%)	1521calAD - 1575calAD (38.2%) 1585calAD - 1590calAD ( 0.7%) 1626calAD - 1665calAD (54.8%) 1785calAD - 1794calAD ( 1.7%)
IAAA-172254	870 $\pm$ 20	89.74 $\pm$ 0.26	841 $\pm$ 23	1169calAD - 1222calAD (68.2%)	1161calAD - 1255calAD (95.4%)
IAAA-172255	920 $\pm$ 20	89.19 $\pm$ 0.25	886 $\pm$ 22	1055calAD - 1077calAD (19.3%) 1153calAD - 1192calAD (43.0%) 1198calAD - 1205calAD ( 5.9%)	1046calAD - 1094calAD (28.6%) 1120calAD - 1141calAD ( 7.6%) 1147calAD - 1217calAD (59.2%)
IAAA-172256	960 $\pm$ 20	88.79 $\pm$ 0.25	934 $\pm$ 22	1040calAD - 1053calAD (10.4%) 1079calAD - 1110calAD (26.5%) 1115calAD - 1152calAD (31.3%)	1034calAD - 1156calAD (95.4%)



第46図 試料No1~4層年較正年代グラフ



第47図 試料No5~8層年較正年代グラフ

## 7 所 見

提供した8点の測定試料についての測定結果を受けて、提供元である発掘調査担当者が考古学的見地からの所見を記述する。

### (1) 平成27年度調査の測定

平成27年度調査では、4点の測定試料を提供した。いずれも竪穴住居の年代を推定するために遺構から採取した炭化物である。

#### 試料№1

5号竪穴住居の床面で検出した炉に埋設された土器内部の炭化物である。測定結果では縄文時代中期前葉から中期中葉頃に相当するとされた。埋設土器は縄文時代中期に帰属すると考えられる。また、共存する土器は円筒上層b式に比定されることから竪穴住居も中期前葉であると考えられ、測定結果と矛盾しない。

#### 試料№2

5号竪穴住居焼土周りで採取した炭化物である。これも試料1と概ね同様の測定結果であり、考古学的な年代観と矛盾しない。

#### 試料№3

6号竪穴住居P2埋土下位より採取した炭化物である。発掘調査結果では、縄文時代中期前葉の竪穴住居と考えたが、これも5号竪穴住居の結果と同じく縄文時代中期の測定結果が得られており、双方矛盾しない。

#### 試料№4

6号竪穴住居の床面で検出した炉に埋設された土器内部の炭化物である。

(久保)

### (2) 平成29年度調査の測定

平成29年度調査では、4点の測定試料を提供した。測定試料は炭窯と土坑の年代を推定するために遺構から採取した木炭である。いずれの遺構も土器等の時期を特定する遺物が出土していないため、遺構の時代を決める手掛かりが少ない。

#### 試料№5

1号炭窯底面で検出した多量に出土した木炭である。暦年較正年代は1527～1658calADという測定値を得られた。この炭窯は奥壁で削り抜かれた煙道を有する形態の炭窯であり、この地域ではおもに近世以降の現代までの間に多く認められる。17世紀後半であれば大きな矛盾はないと思われるが、16世紀まで遡る可能性は低いと思われる。

#### 試料№6～8

製炭土坑であると推測した27号土坑底面で検出した木炭である。測定値は1040～1222calADの範囲で分散するようである。10世紀後半～11世紀に推定される製塩工房に供給する木炭を焼成する施設であれば最も古い値と合致する。ただし、これが製炭土坑であること、製炭土坑であった場合製塩工房との関係、製塩工房の時期など多くの課題を残している。

(福高)

## Ⅶ 総 括

### 1 縄 文 時 代

平成27年度調査では、おもに縄文時代の遺構・遺物が認められた。平成29年度調査でも少量の遺構・遺物が認められた。

平成27年度調査で検出したおもな縄文時代の遺構は、縄文時代前期・中期・後期の竪穴住居（1～6号竪穴住居）、貯蔵穴等である。出土遺物は縄文時代早期～後期までの土器が出土した。この域内が居住域として利用されていたことが判明した。

縄文時代後期の竪穴住居は、石囲炉のみである4号竪穴住居・6号竪穴住居である。いずれも竪穴住居の平面形や規模が調査では不明だったが、後期前葉の住居であると考えられる。6号竪穴住居は地床炉のみであり、西側のやや高い地点、標高99mに立地している。同じ等高線上には焼土遺構があり、これらも同様の竪穴住居の痕跡であった可能性が考えられる。

縄文時代中期の竪穴住居は、2号竪穴住居・複式炉のみである3号竪穴住居・5号竪穴住居の3棟が挙げられる。2号竪穴住居は住居の中央に埋設土器があり、この土器が中期前葉のものである。5号竪穴住居は床面で良好な土器が出土しており、やはり2号竪穴住居同様中期前葉の時期である。

縄文時代前期の竪穴住居は、1号竪穴住居のみである。大木2b式期の住居であると考えられ、十和田中振火山灰を遺構内で検出している。

貯蔵穴群は、北側にある沢と南側にある沢に挟まれた標高93～95mのエリアに立地している。密集しているものの、貯蔵穴同士の重複は認められないことから、ほぼ同じ時代に順次構築されていったものと推定される。これら貯蔵穴の時代は遺物を伴わないため特定できないが、遺跡内で最も多くの竪穴住居・遺物のみられる縄文時代中期～後期に構築されたものであると推測できる。

以上のように、縄文時代前期よりわずかながら居住域として利用され始め、縄文時代中期～後期前半頃には集落として機能したことが判明した。これらは調査した範囲の外にもある程度拡大する可能性を秘めている。

(久保賢)

### 2 古 代 ～ 中 世

平成29年度調査で、土師器と製塩土器が出土した製塩工房を1棟確認した。製塩工房は、平面方形の竪穴構造の建物であり、床面には2基の炉を検出した。いずれも炉体構造は簡素なものであるが、多くの製塩土器片が出土したことによって土器製塩に与する炉であると考えた。立地的な観点から、海浜から距離がある丘陵に位置しており、海辺で海水を濃縮し、濃縮が進んだ状態のものを土器ごと持ち込んでこの場所で焼成し、塩を取り出す工程がおこなわれたと想定される。

製塩土器とともに出土した土師器類はV章でも記載した通り、平安時代のものである。八戸市林ノ前遺跡に類似があり、10世紀後半～11世紀のものである可能性が考えられる。

古代および中世の竪穴建物内での土器製塩は全国的にみても類例が少なく、非常に稀少な調査事例となった。洋野町域では、かつて青森県との県境付近の二十一平遺跡で製塩土器が出土しており、土器製塩がおこなわれた遺跡として知られている。この二十一平遺跡では、海浜に位置していること、

土製支脚が多量にみつまっていることなど、今回の上のマッカ遺跡の調査事例と異なる点もある。これら相違点は、工程上の違いなのか、それとも時代の違いなのか未だ説明は難しいと思われる。今後、調査事例が増えることによって検討されるべき事象である。

(福島)

### 3 ま と め

最後に、上のマッカ遺跡の調査成果をまとめると、調査範囲のうち南側の尾根筋に位置する平成27年度調査範囲は縄文時代前期～後期の居住域が断続的に展開する。この居住域に伴って中期～後期とみられる貯蔵穴が集中してみられる地点がある。遺物は中期～後期のものが多く、周辺域にも集落が広がっている可能性が考えられる。

平成29年度調査では、平安時代の製塩工房が見つかった。出土遺物から10世紀後半から11世紀の時期が想定されるが、稀少な事例であるため、今後も検証が必要である。

(福島)

#### 引用・参考文献

- 岩手県洋野町教育委員会 2013 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集  
青森県教育委員会 2006 「林ノ前遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第415集

# 写 真 图 版





平成27年度調査区 空撮（西から）

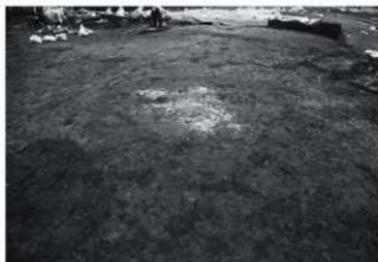


平成27年度調査区 調査区直上（上が東）

写真図版1 空撮写真



1号竪穴住居 実掘 (東から)



1号竪穴住居 検出状況 (東から)



1号竪穴住居 断面 (西から)



1号竪穴住居 断面 (北から)



3号竪穴住居 実掘 (東から)



3号竪穴住居 炉実掘 (東から)



3号竪穴住居 炉断面 (南西から)



3号竪穴住居 炉掘方 (東から)



2号竪穴住居 完掘（西から）



2号竪穴住居 断面（北から）



2号竪穴住居 土器埋設炉全景（西から）



2号竪穴住居 土器埋設炉断面（北西から）



2号竪穴住居 土器埋設炉断面（北から）



4号竪穴住居 完振（東から）



4号竪穴住居 断面（東から）



4号竪穴住居 炉全景（東から）



4号竪穴住居 炉断面（北から）



4号竪穴住居 炉検出状況（南から）



5号竪穴住居 完掘（西から）



5号竪穴住居 完掘（北から）



5号竪穴住居 断面（北から）



5号竪穴住居 断面（東から）



5号竪穴住居 遺物出土状況



5号竪穴住居 埋設土器断面(東から)



5号竪穴住居 床下土坑全景(南から)



6号竪穴住居 完掘(南東から)



6号竪穴住居 断面(南から)



6号竪穴住居 炉1全景(南東から)



6号竪穴住居 炉1断面(南から)



6号竪穴住居 炉2全景(南東から)



6号竪穴住居 炉2断面(南から)



1号竪穴建物 完掘（西から）



1号竪穴建物 断面（西から）



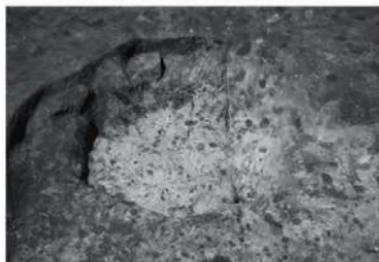
1号竪穴建物 断面（北から）



1号竪穴建物 炉1検出（北から）



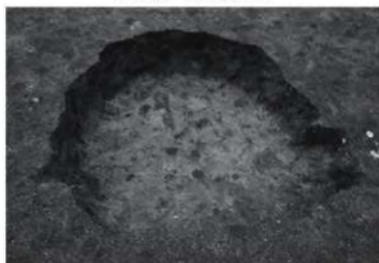
1号竪穴建物 炉2検出（北から）



1号土坑 完掘(東から)



1号土坑 断面(南から)



2号土坑 完掘(南から)



2号土坑 断面(南から)



3号土坑 完掘(南から)



3号土坑 断面(南から)

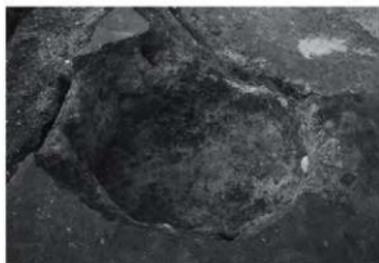


4号土坑 完掘(南から)



4号土坑 断面(南から)

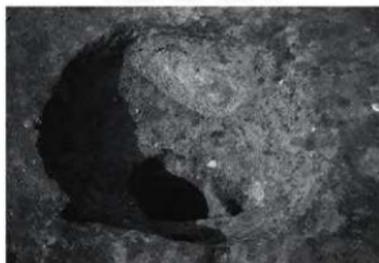
写真図版8 1号～4号土坑



5号土坑 完掘 (南東から)



5号土坑 断面 (北から)



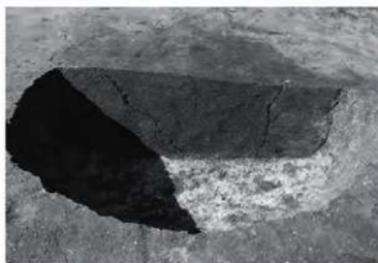
6号土坑 完掘 (南から)



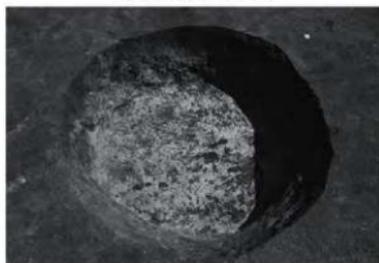
6号土坑 断面 (南から)



7号土坑 完掘 (南から)



7号土坑 断面 (南から)



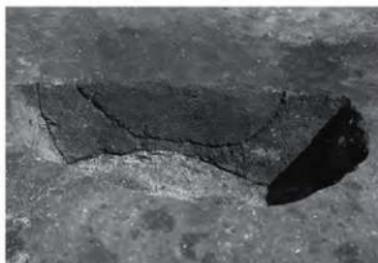
8号土坑 完掘 (南から)



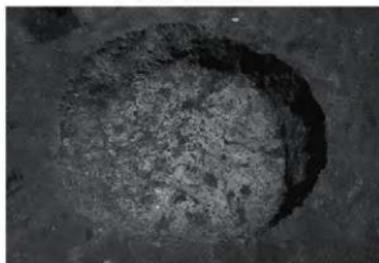
8号土坑 断面 (南から)



9号土坑 完掘 (南から)



9号土坑 断面 (南から)



10号土坑 完掘 (南西から)



10号土坑 断面 (南から)



11号土坑 完掘 (南から)



11号土坑 断面 (南から)



12号土坑 完掘 (南西から)



12号土坑 断面 (西から)



13号土坑 完掘 (南西から)



13号土坑 断面 (南から)



14号土坑 完掘 (北から)



14号土坑 断面 (北から)



15号土坑 完掘 (南西から)



15号土坑 断面 (南から)



16号土坑 完掘 (南西から)



16号土坑 断面 (南から)



17号土坑 完掘 (南西から)



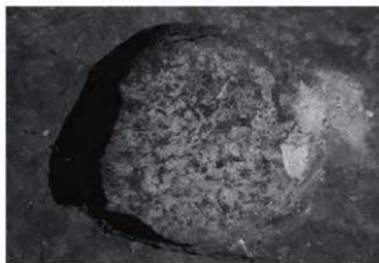
17号土坑 断面 (南西から)



18号土坑 完掘 (南から)



18号土坑 断面 (南から)



19号土坑 完掘 (南から)



19号土坑 断面 (南から)



20号土坑 完掘 (南から)



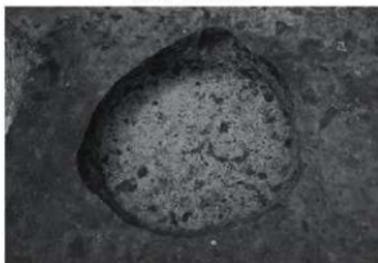
20号土坑 断面 (南から)



土坑群 (南西から)



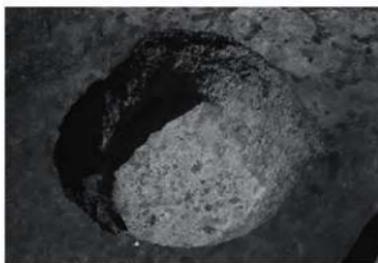
21号土坑 断面 (南から)



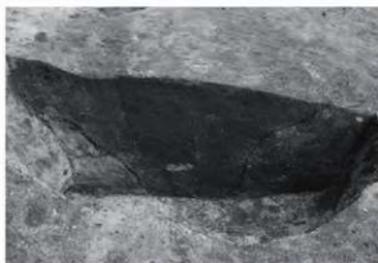
22号土坑 完掘 (東から)



22号土坑 断面 (南から)



23号土坑 完掘 (南東から)



23号土坑 断面 (南から)



24号土坑 完掘 (北から)



24号土坑 断面 (北から)



25号土坑 完掘（西から）



25号土坑 断面（東から）



26号土坑 完掘（北から）



26号土坑 断面（北から）



27号土坑 完掘（北から）



27号土坑 断面（西から）



28号土坑 完掘（東から）



28号土坑 完掘（南から）



29号土坑 完掘 (東から)



28号土坑・29号土坑 断面 (東から)



1号焼土 検出 (東から)



1号焼土 断面 (南から)



2号焼土 検出 (北西から)



2号焼土 断面 (南から)



3号焼土 検出 (西から)



3号焼土 断面 (南東から)



1号炭窯 完掘（東から）



1号炭窯 断面（東から）



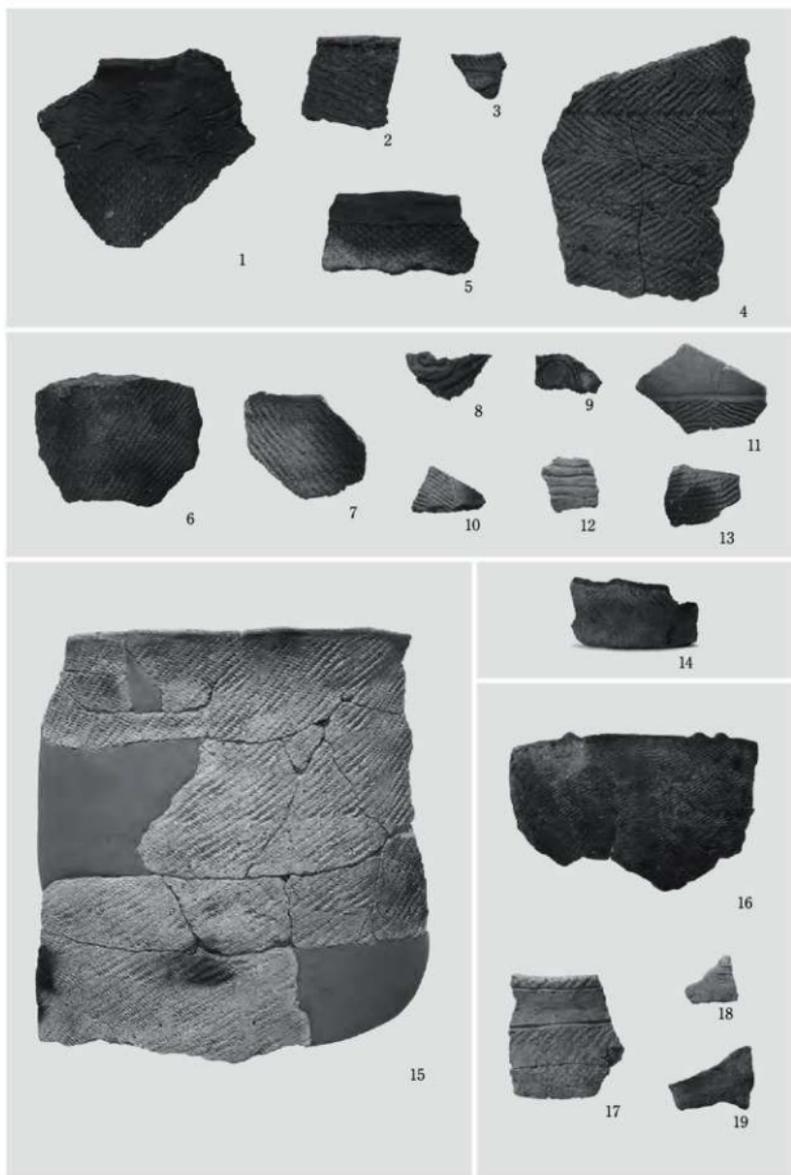
1号炭窯 断面（北から）



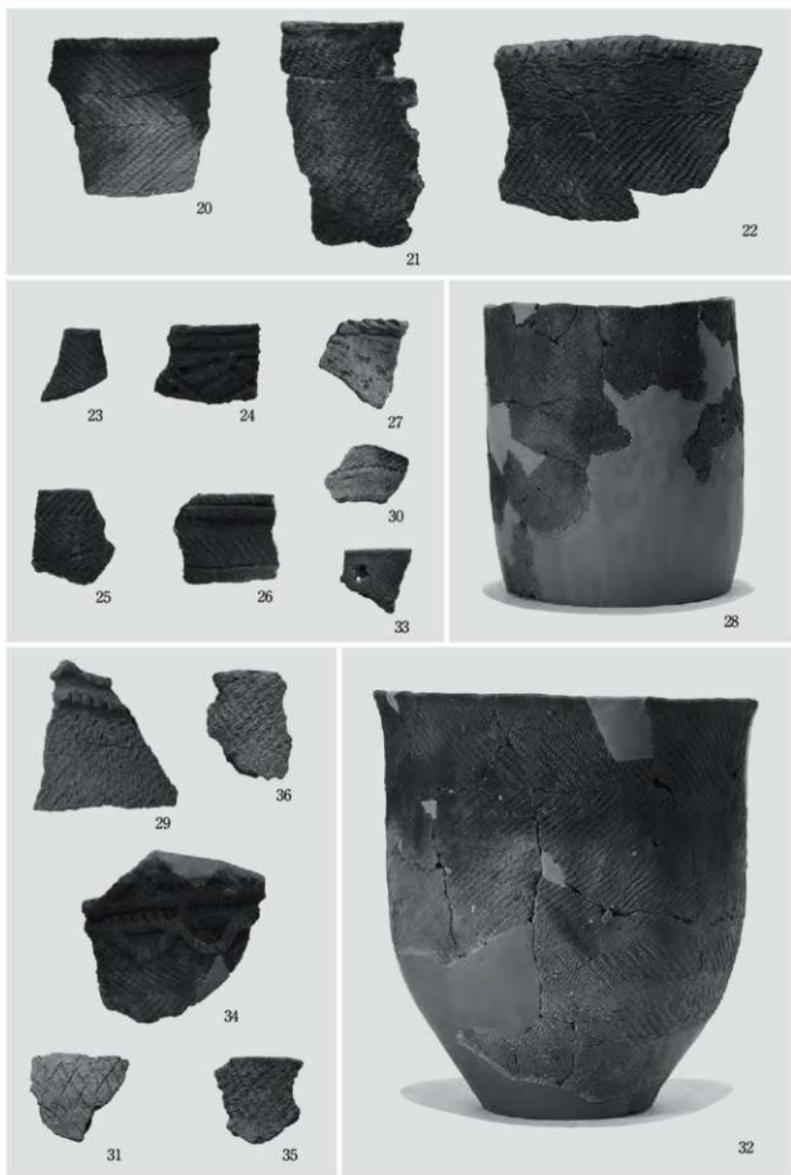
平成 27 年度調査区沢跡 検出状況（南東から）



平成 27 年度調査区沢跡 検出状況（南西から）



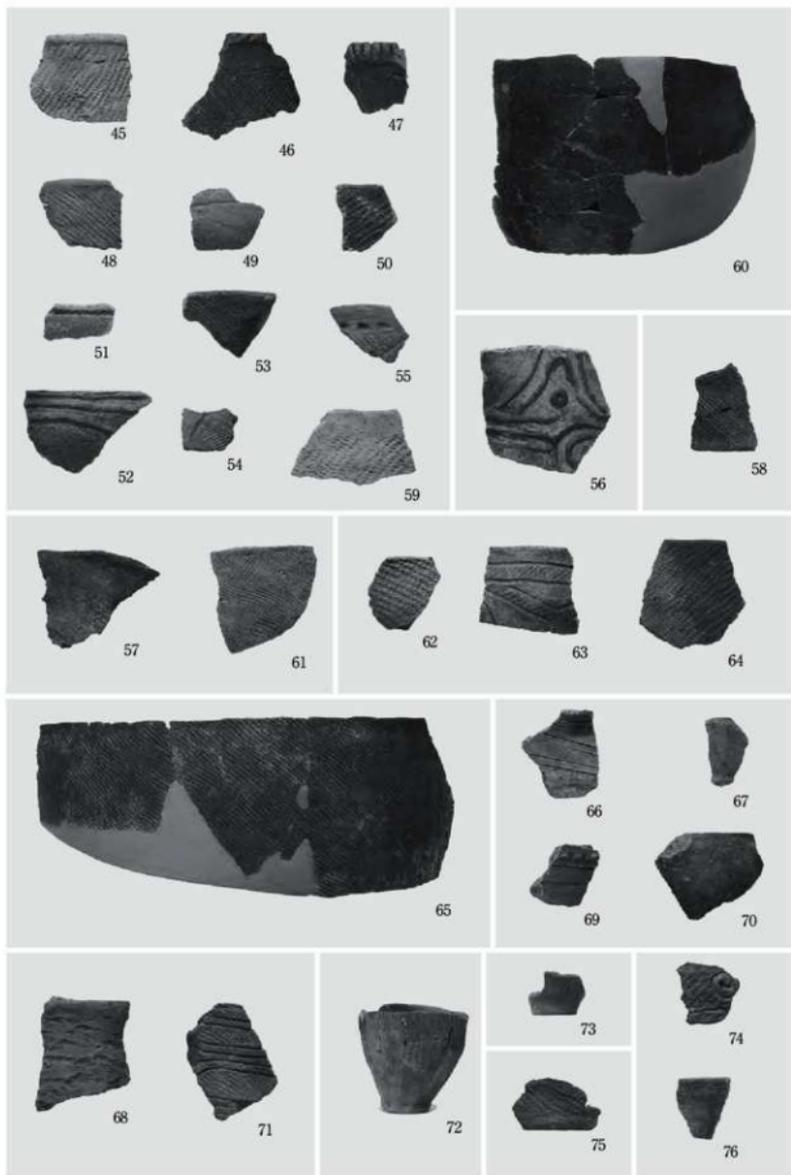
写真図版 17 出土遺物（縄文土器）



写真図版 18 出土遺物（縄文土器）



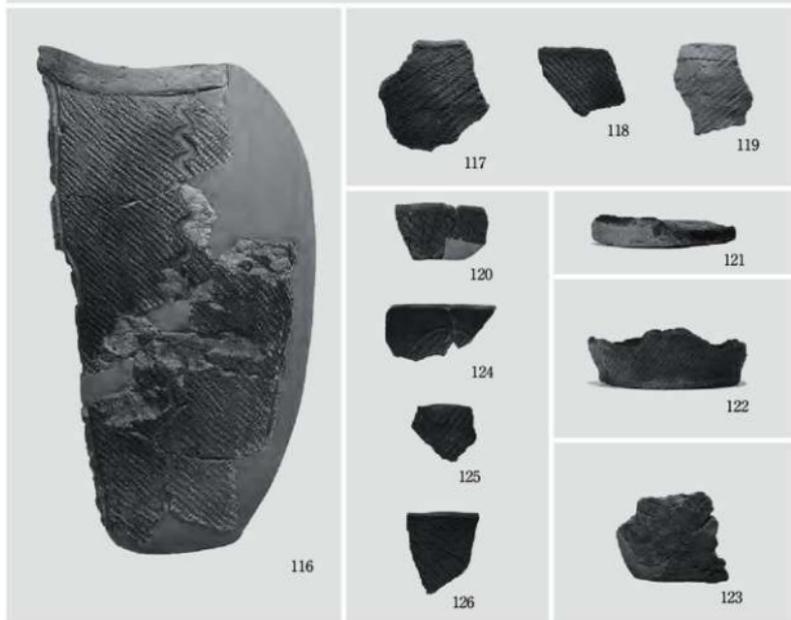
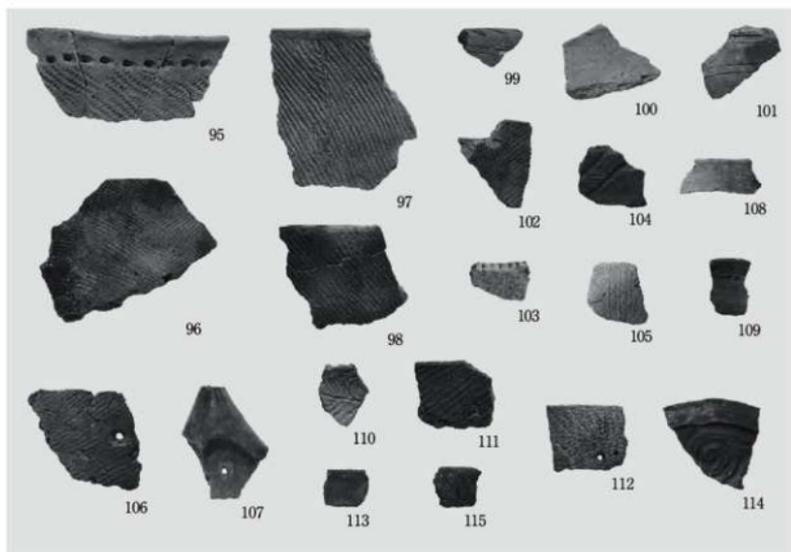
写真図版 19 出土遺物（縄文土器）



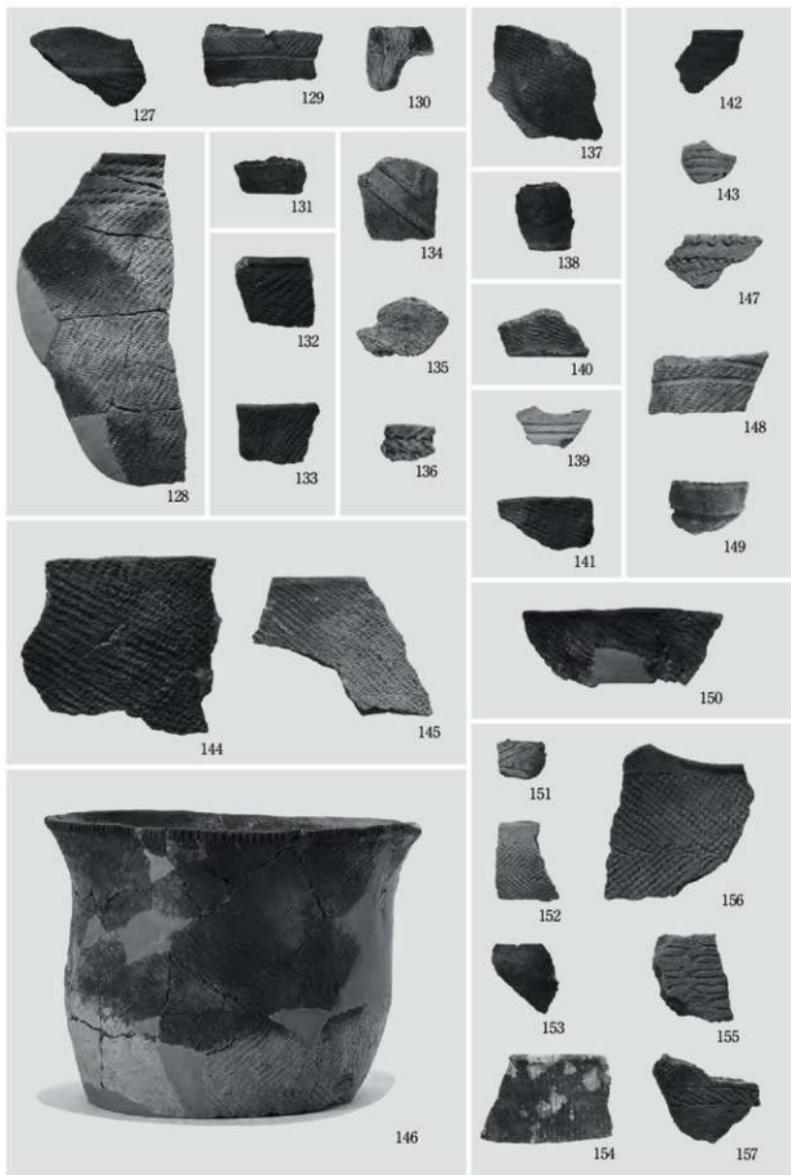
写真図版 20 出土遺物（縄文土器）



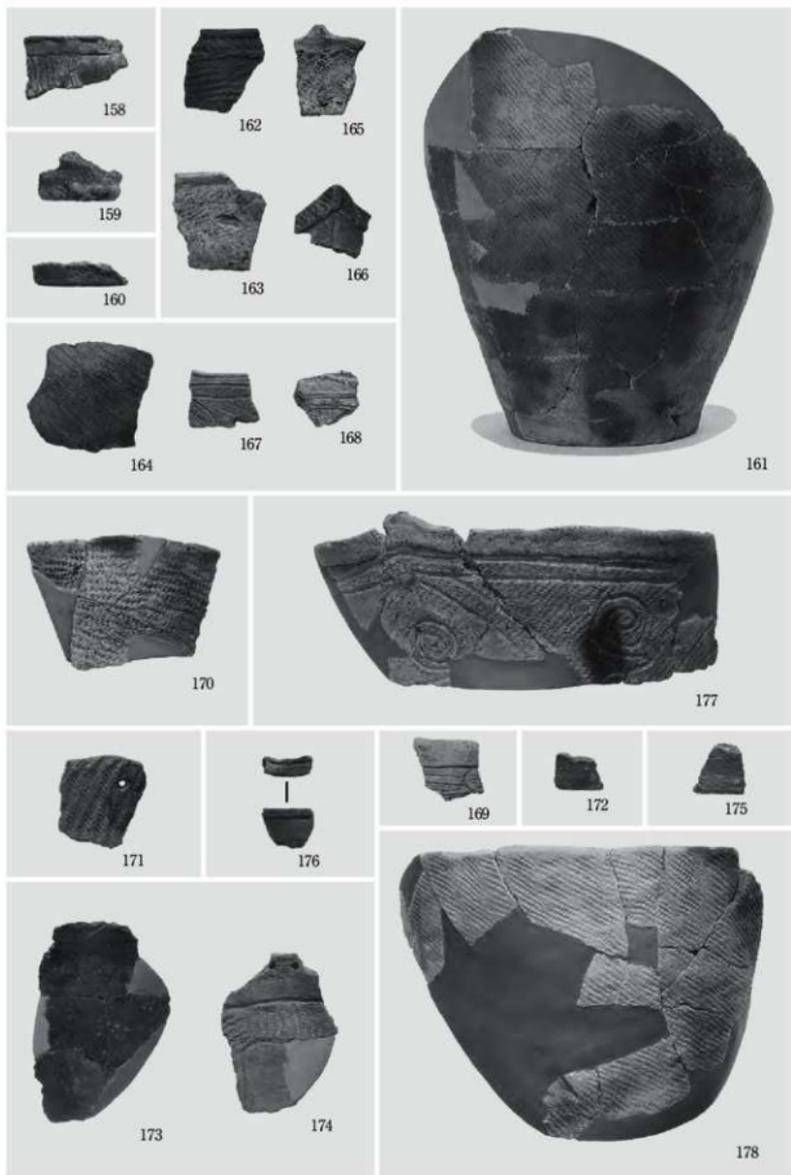
写真図版 21 出土遺物（縄文土器）



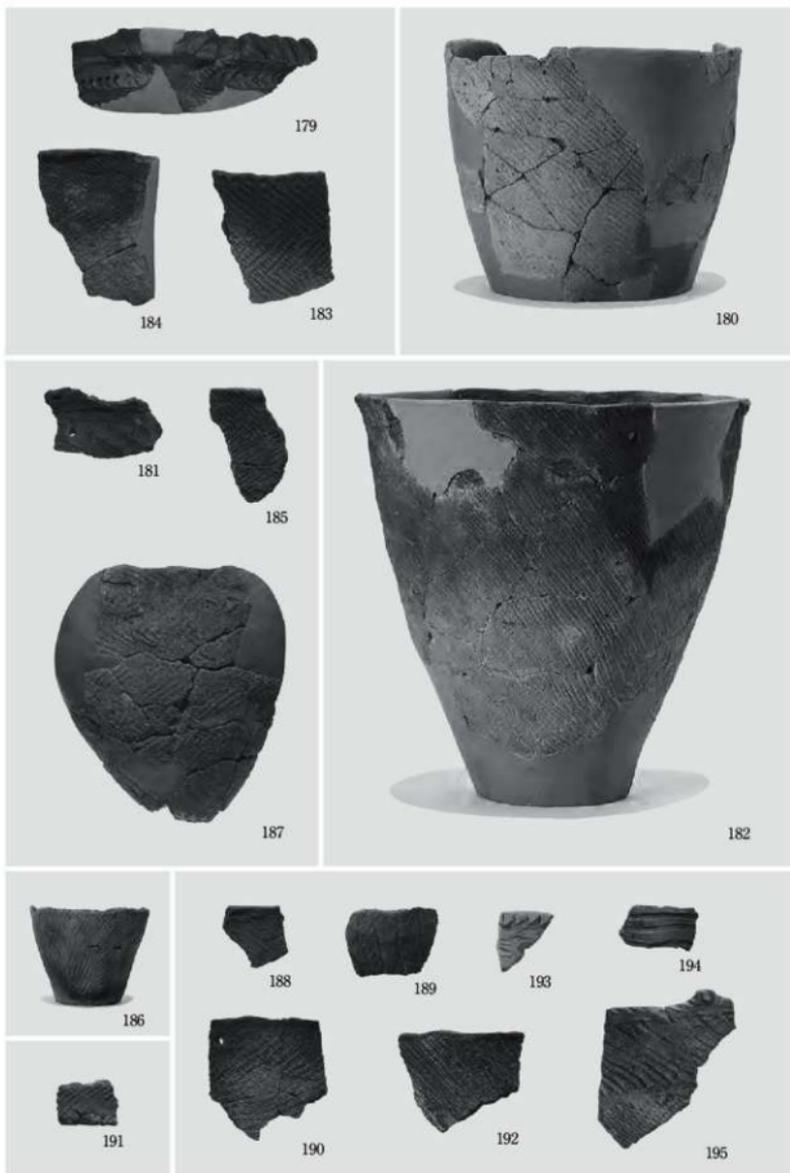
写真図版 22 出土遺物 (縄文土器)



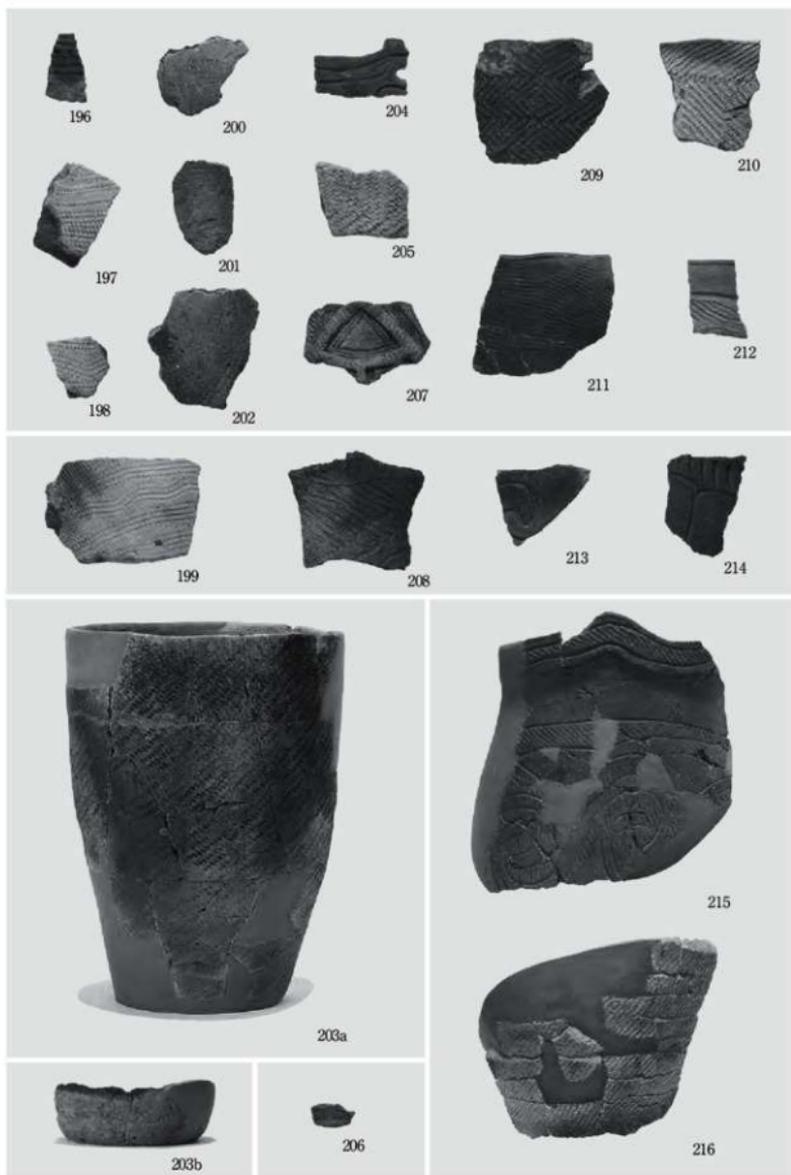
写真図版 23 出土遺物（縄文土器）



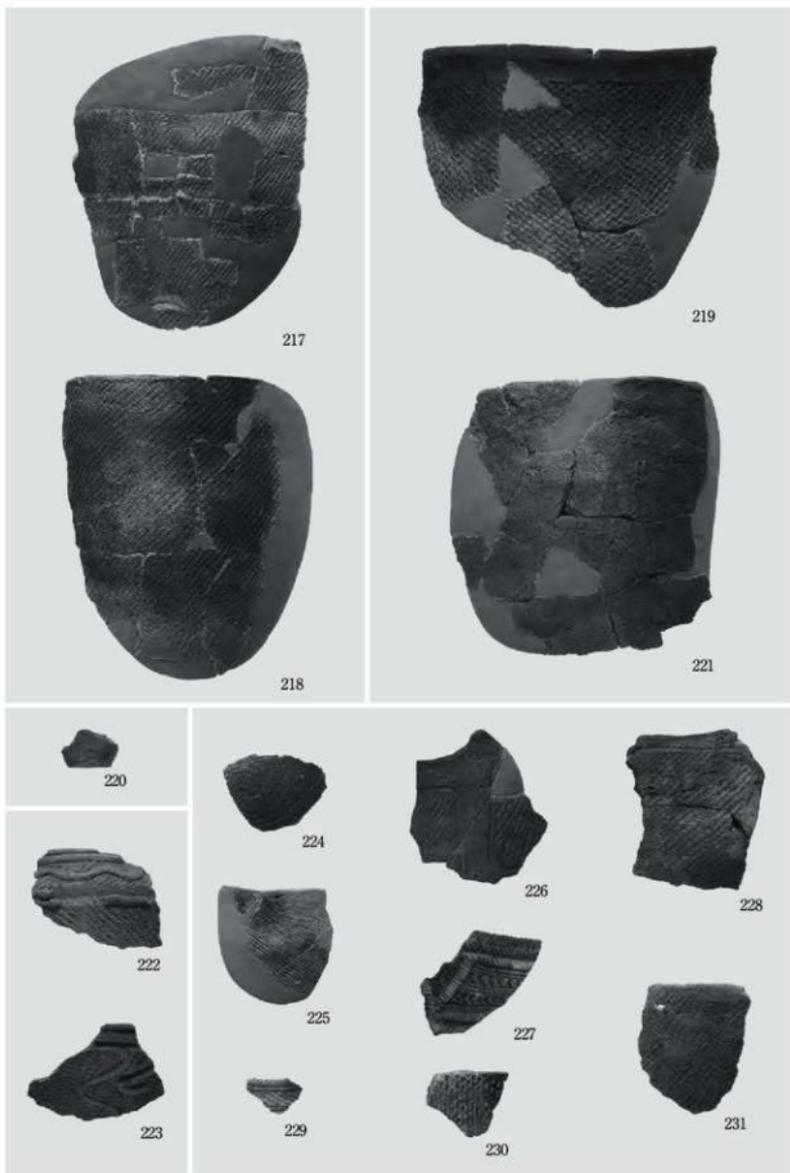
写真図版24 出土遺物(縄文土器)



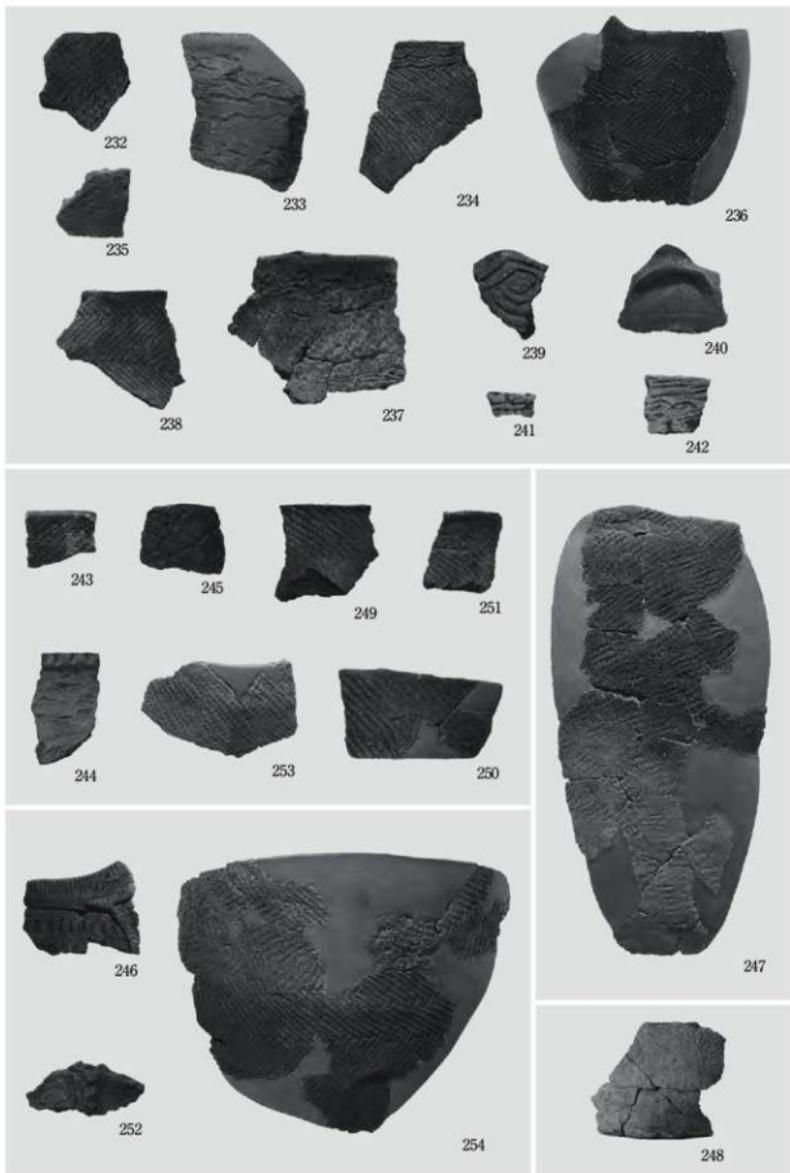
写真図版25 出土遺物(縄文土器)



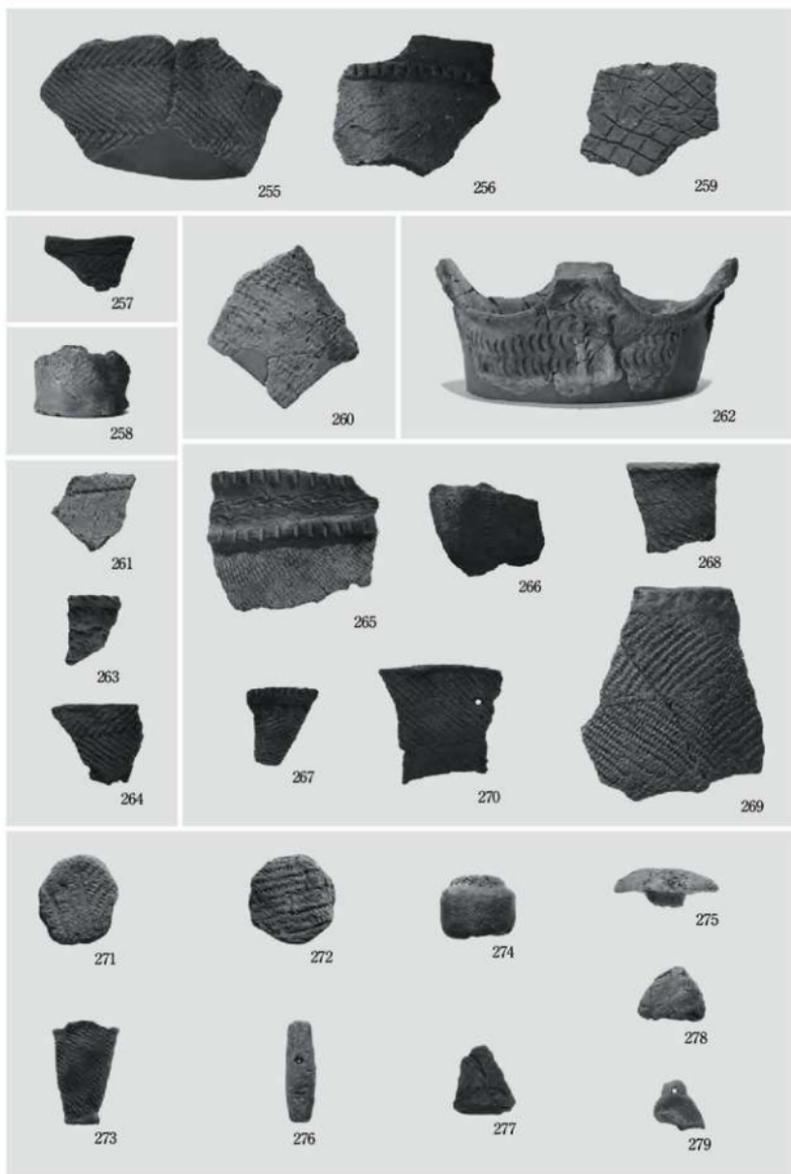
写真図版26 出土遺物(縄文土器)



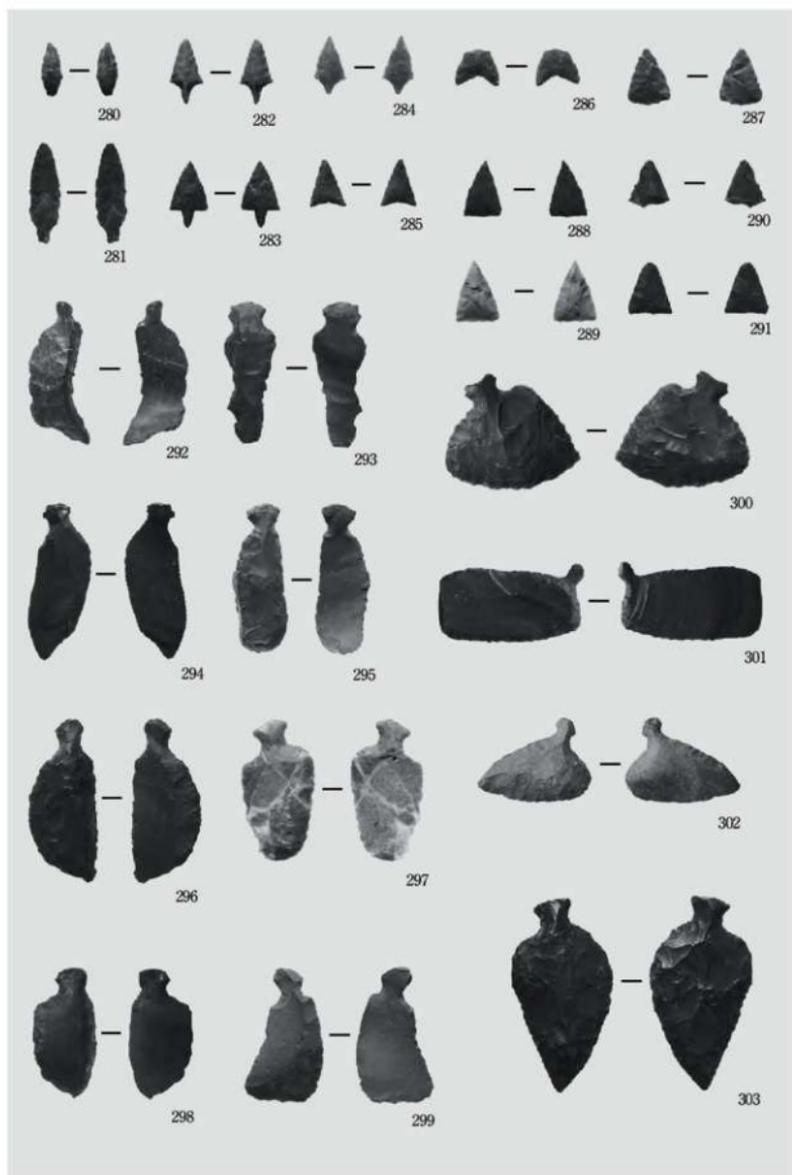
写真図版27 出土遺物(縄文土器)



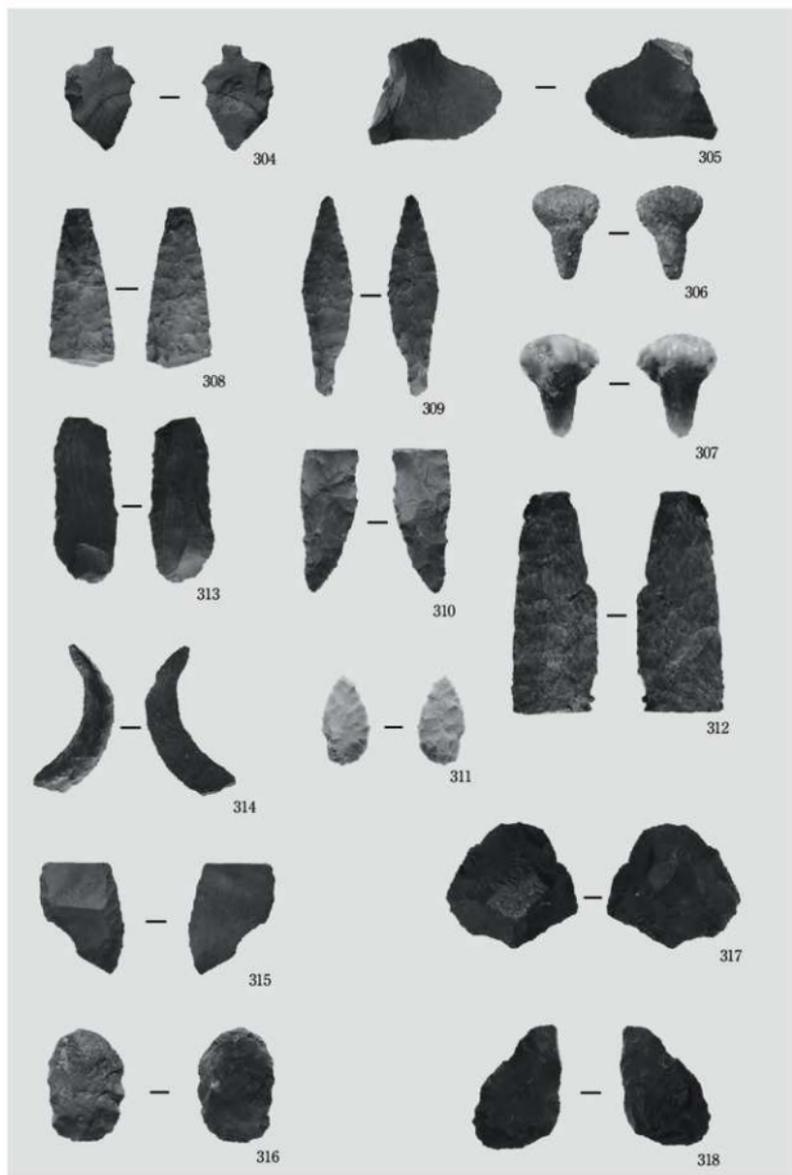
写真図版28 出土遺物(縄文土器)



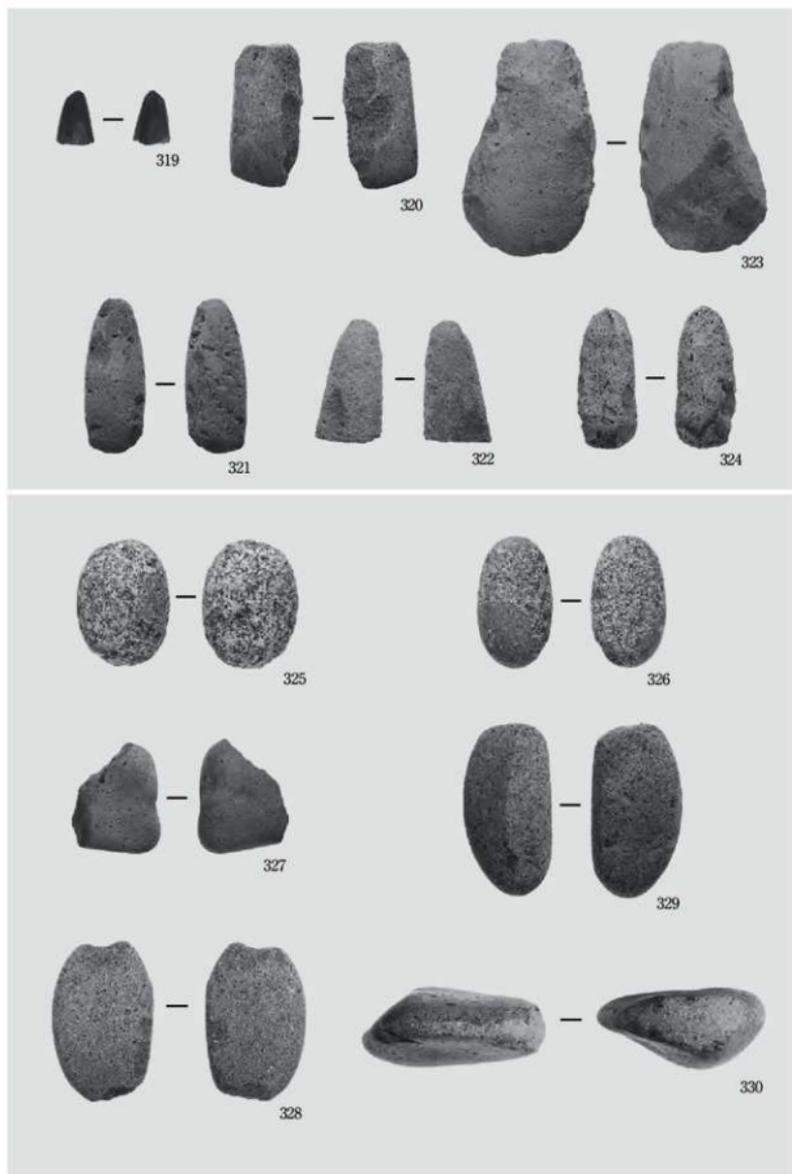
写真図版29 出土遺物(縄文土器・土製品)



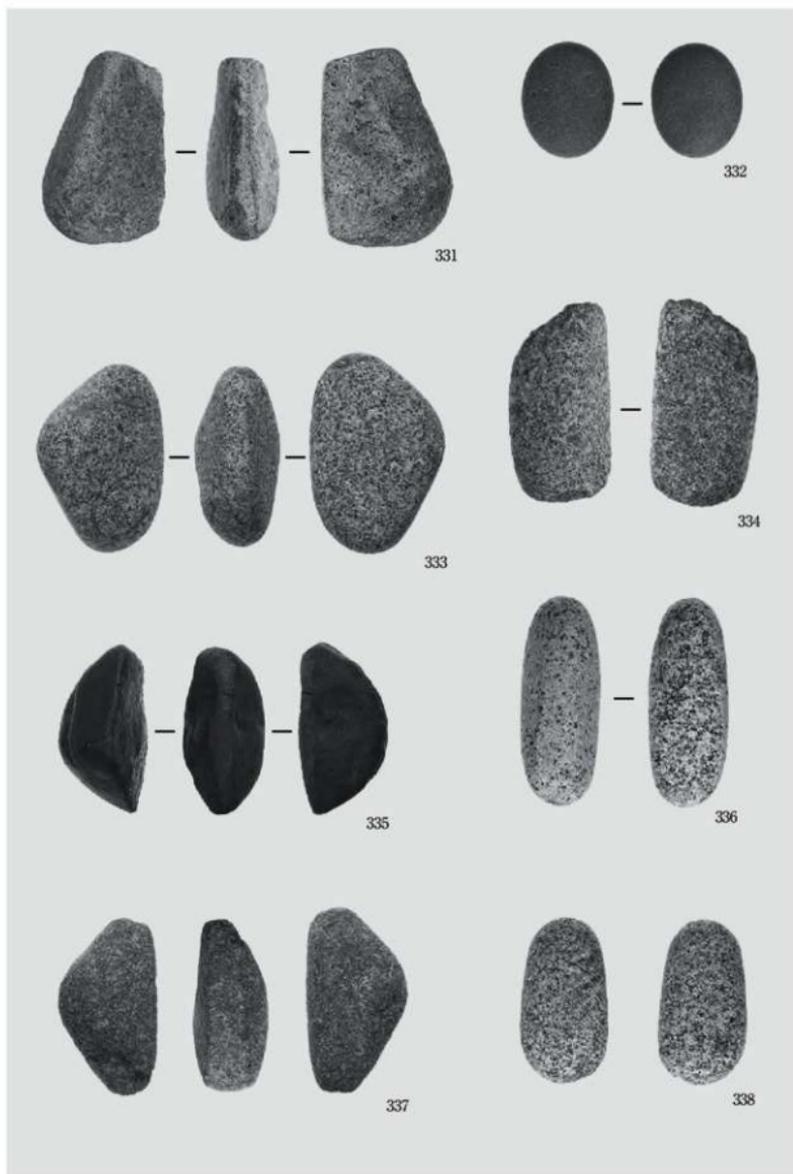
写真図版30 出土遺物(石器)



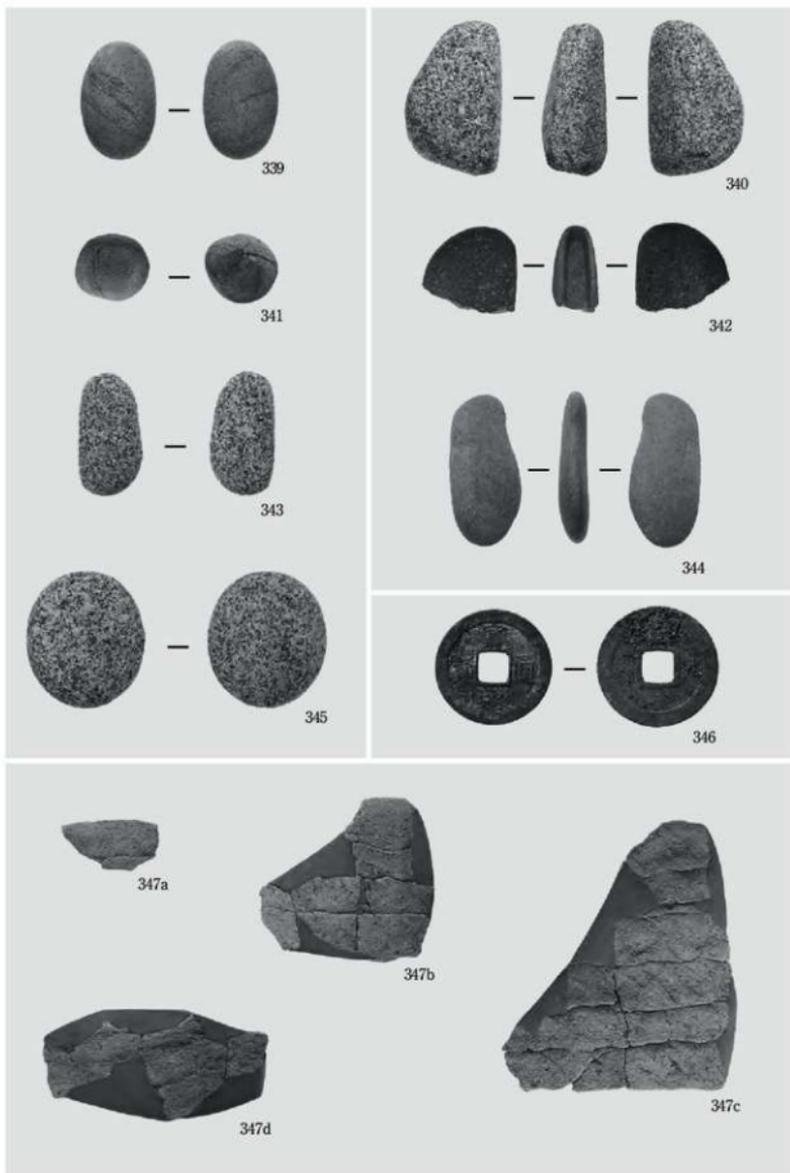
写真図版31 出土遺物(石器)



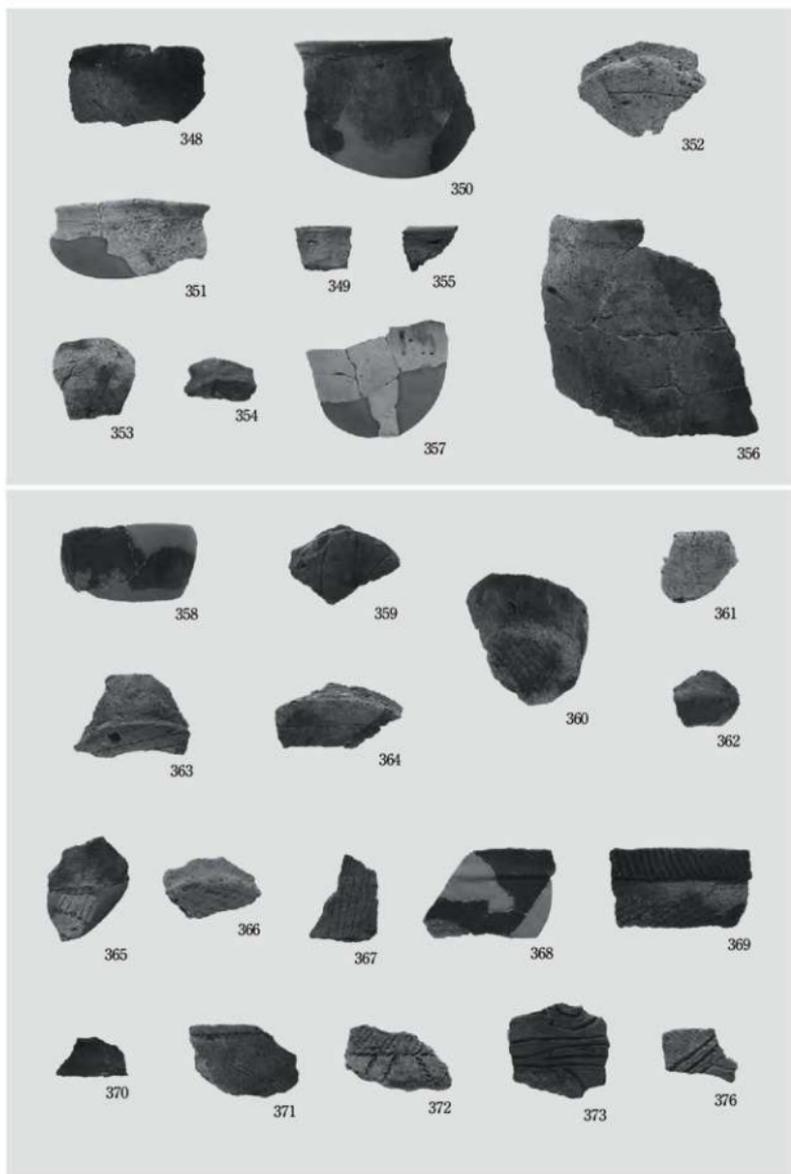
写真図版32 出土遺物(石器)



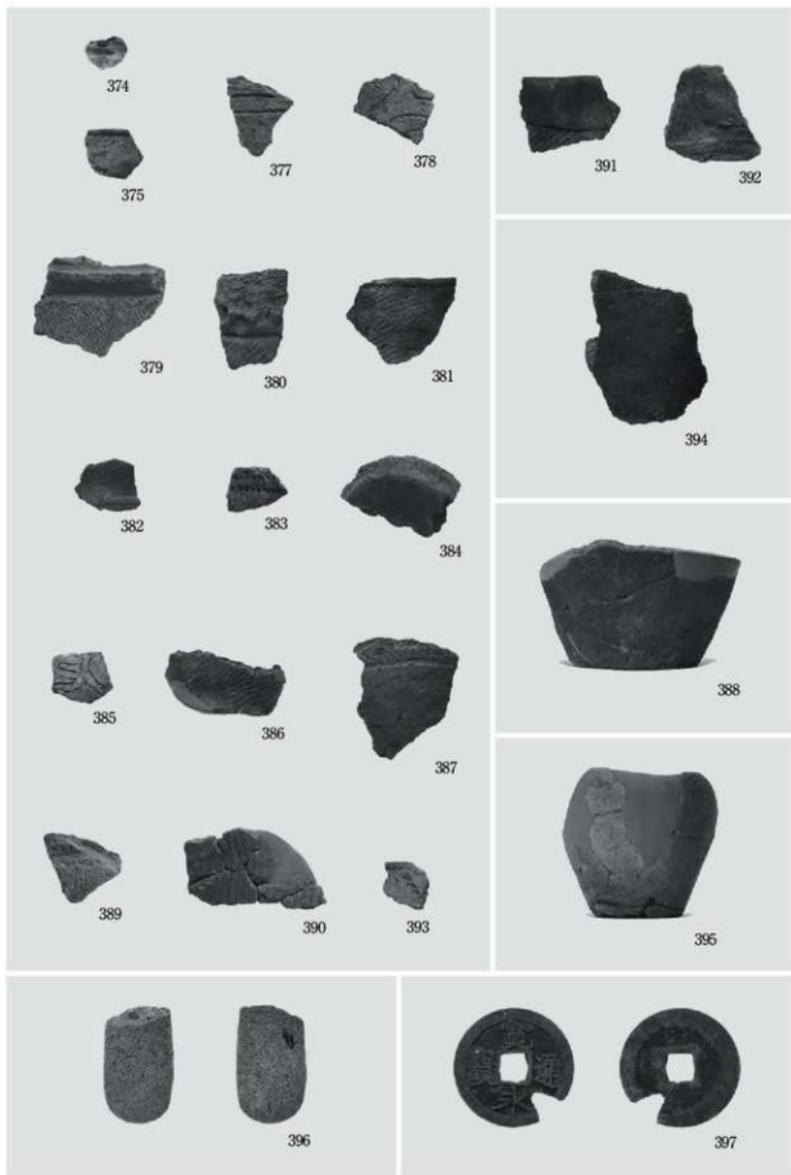
写真図版33 出土遺物(石器)



写真図版34 出土遺物(石器・錢貨・製塩土器)



写真図版35 出土遺物(土師器・縄文土器)



写真図版36 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	うえのまっかいせきはくつちょうさほうこくしょ								
書名	上のマッカ遺跡発掘調査報告書								
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査								
巻次									
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第698集								
編著者名	福島正和 久保賢治 光井文行 久保友咲 中村隼人 松波耕己								
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019)638-9001								
発行年月日	2019年3月8日								
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
上のマッカ遺跡	岩手県九戸郡洋野町 種市有家第5地割地内	035076	IF89-0340	40度 18分 58秒	141度 45分 41秒	2015.06.15～ 2015.09.24  2017.06.05～ 2017.06.30	平成27年度 3,700㎡  平成29年度 300㎡	三陸沿岸道路 建設事業	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
平成27年度	集落	縄文時代 早期～後期	竪穴住居跡 土坑 焼土遺構	6棟 24基 3基	縄文土器・石器・古銭		縄文時代前期の竪穴住居1棟と中期の竪穴住居5棟を検出した。		
平成29年度	集落	縄文時代 古代～中世 近世	竪穴建物跡 陥し穴伏遺構 土坑 炭窯	1棟 1基 4基 1基	縄文土器・製塩土器・ 土師器・石器・古銭		製塩土器・製塩炉を伴う竪穴建物を検出した。近世の炭窯1基を検出した。		
要約	調査は平成27年度と同29年度の2箇年にわたり実施された。調査区は畑地として調査直前まで使用されており、遺構や遺物の残存状態が不良であった。主な検出遺構は縄文時代前期の竪穴住居1棟と中期の竪穴住居5棟、古代～中世の製塩工房1棟、近世の炭窯1基である。								

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 698 集

**上のマッカ遺跡発掘調査報告書**

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成 31 年 3 月 1 日

発行 平成 31 年 3 月 8 日

編集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

〒027-0029 岩手県宮古市藤の川 4 番 1 号

電話 (0193) 62-1711

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番 1 号

電話 (019) 654-2235

印刷 有限会社小松茂印刷所

〒020-0025 岩手県盛岡市大沢川原二丁目 5-37

電話 (019) 623-6073